葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書第３集

高知県高岡郡葉山村

姫　野　々　城　跡　Ⅱ

―農山漁村活性化定住圏創造事業（公園整備）に伴う発掘調査報告書―

１９９６．３

葉山村教育委員会

姫野々城跡発掘調査報告書 Ⅱ

1996. 3

葉山村教育委員会

銅 製 品

青　磁

序

姫野々城跡は，土佐の中世，高岡郡一帯を支配していたといわれる津野氏の城であります。葉山村においては村のシンボル的存在であり，周辺城下町を含めた歴史的景観は学術的にも非常に価値のあるものです。

平成５年６月，農林水産省の「農産漁村定住圏創造事業」を受けて，葉山村指定文化財（村史跡）「姫野々城跡」周辺を公園化する計画が持ちあがりました。

葉山村教育委員会では，平成６年度に姫野々城跡の歴史的な位置付けを目的として発掘調査を実施いたしました。昨年度の調査では津野氏興亡の歴史を甦らせる貴重な遺構・遺物の発見があり，葉山村の歴史に新たな新知見をもたらす成果がありました。今年度は，昨年度調査に引き続き，姫野々城跡をより明確に把握するために発掘調査を進めてきました。

その結果，城の存続時期を知る上で貴重な遺物が多量に出土し，今後，高知県下の歴史を解明していく上でも重要な資料が得られました。

これらの成果が斯学の向上と共に，地域社会に広く活用されますことを念じて止みません。今後とも中世城郭として周辺城下町を含めた歴史的復元に向けて詳細に検討していくつもりです。

おわりに，発掘調査を担当して頂いた財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターをはじめ，指導・助言を頂いた高知県教育委員会および専門家の先生方，ご協力・ご理解を頂いた地権者の皆様，そして酷暑の中，発掘調査に携わった作業員の皆様方に衷心より厚く御礼申し上げます。

平成８年３月31日

葉山村教育長　堅田　忠男

例　　言

1．本書は，葉山村教育委員会が平成７年度に実施した農山漁村定住圏活性化創造事業（城山公園整備事業）に伴う姫野々城跡試掘調査の発掘調査報告書である。

2．姫野々城跡は，高知県高岡郡葉山村姫野々886-1他に所在する。

3．発掘調査は，平成７年５月22日から同年７月24日まで実施し，引き続き資料整理・報告書作成を平成８年３月31日まで行った。発掘調査面積は322㎡である。

4．調査体制は以下の通りである。

調査主体　葉山村教育委員会

調査事務　葉山村教育委員会

教　育　長　　堅田忠夫

事務担当　　西森健一

調 査 員　（財）高知県文化財団　埋蔵文化財センター

調査第３係　　吉成承三

5．本書の執筆・編集は吉成が行った。

6．発掘調査にあたっては，地元葉山村の方々の献身的な協力を得ることができた。また，報告書作成では埋蔵文化財センター諸氏の助言をいただいた。記して感謝する次第である。

7．姫野々城跡の調査では，坂井英弥氏（文化庁記念物課調査官）を初め数多くの方々から，助言，御教示をしていただいた。併せて記して謝意を表したい。

中井　均（米原町教育委員会）・加藤理文（静岡県埋蔵文化財調査研究所）・織豊系城郭研究会・池田　誠（東京都文京区立第一中学校）・八巻孝夫（小学館）・中世城郭研究会・金谷眞章（松野町教育委員会）・中野良一（愛媛県埋蔵文化財センター）・片桐孝浩（香川県埋蔵文化財センター）・松田直則（高知県埋蔵文化財センター）・岡本桂典（高知県立歴史民族資料館）

8．出土遺物等の資料は，一部を除き高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。また，遺物の注記は調査略号95-5HH である。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の契機と経過 …… 1
　1．調査の契機 …… 1
　2．調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　調査の成果 …… 5
　1．主郭部分（A区）
　　詰ノ段
　　(1)　A－1トレンチ …… 5
　　(2)　A－2トレンチ …… 7
　　(3)　A－3トレンチ …… 8
　　二ノ段西
　　(4)　Eトレンチ …… 9
　　二ノ段北
　　(5)　Rトレンチ …… 16
　　Sトレンチ …… 20
　　二ノ段南
　　(6)　Fトレンチ …… 34

　2．丘陵南尾根部（B区） …… 41
　　(1)　Tトレンチ …… 41
　　(2)　Vトレンチ …… 43
　　(3)　Xトレンチ …… 43

第Ⅲ章　ま　と　め …… 51

挿　図　目　次

Fig. 1　葉山村位置図 …… 1
Fig. 2　姫野々城跡周辺地形図 …… 2
Fig. 3　主郭部分（Ａ区）遺構全体図 …… 3～4
Fig. 4　詰ノ段Ａ－１トレンチ遺構図 …… 6
Fig. 5　Ａ－１トレンチ出土遺物 …… 7
Fig. 6　Ａ－２トレンチ出土遺物 …… 7
Fig. 7　Ａ－３トレンチ遺構図・セクション図 …… 8
Fig. 8　Ａ－３トレンチ出土遺物 …… 8
Fig. 9　Ｅトレンチ礎石エレベーション …… 10
Fig. 10　Ｅトレンチ遺構図・セクション図 …… 11～12
Fig. 11　Ｅトレンチ出土遺物 …… 14
Fig. 12　Ｒトレンチ遺構図 …… 17
Fig. 13　Ｒトレンチセクション図 …… 18
Fig. 14　ＲトレンチＳＸ１石積み側面図 …… 20
Fig. 15　Ｓトレンチセクション図 …… 20
Fig. 16　Ｒトレンチ出土遺物土師質土器 …… 28
Fig. 17　〃　〃 …… 29
Fig. 18　〃　国産陶器（瀬戸・美濃産、備前焼） …… 30
Fig. 19　〃　輸入陶磁器（青磁） …… 31
Fig. 20　〃　〃　（白磁・青白磁・天目・染付） …… 32
Fig. 21　〃　瓦質土器・金属製品・石製品 …… 33
Fig. 22　Ｆトレンチ遺構図・セクション図・石積み側面図 …… 35～36
Fig. 23　Ｆトレンチ出土遺物 …… 39
Fig. 24　丘陵南尾根部（Ｂ区）トレンチ設定図 …… 40
Fig. 25　Ｔトレンチ遺構図 …… 41
Fig. 26　Ｖトレンチセクション図 …… 42
Fig. 27　Ｖトレンチ出土遺物 …… 42
Fig. 28　Ｘトレンチ出土遺物 …… 42
Fig. 29　Ｘトレンチセクション図 …… 42

表　目　次

Tab. 1　出土土器法量表１ …… 44
Tab. 2　〃　２ …… 45
Tab. 3　〃　３ …… 46
Tab. 4　〃　４ …… 47
Tab. 5　〃　５ …… 48
Tab. 6　〃　６ …… 49
Tab. 7　〃　７ …… 50
Tab. 8　トレンチ別出土遺物集計表 …… 53
Tab. 9　土器組成と機能分担 …… 54
Tab. 10　土師質土器法量表（Ｅトレンチ） …… 56
Tab. 11　〃　（Ｆトレンチ） …… 57
Tab. 12　〃　（Ｒトレンチ） …… 57

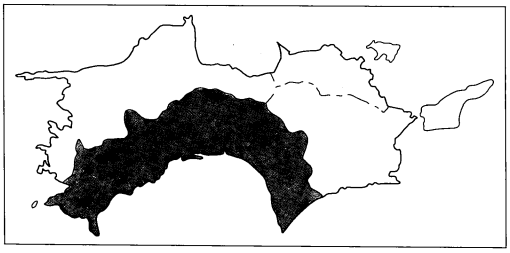
写　真　目　次

PL 1　詰ノ段調査前全景（東より）
　　Ａ－１トレンチ全景（西より）
PL 2　Ｅトレンチ礎石検出状況
　　Ｅトレンチ完掘状況（北より）
PL 3　Ｅトレンチ完掘状況（東より）
　　礎石建物検出状況
PL 4　Ｆトレンチ第１次面検出状況（北より）
　　Ｆトレンチ集石検出状況（西より）
PL 5　Ｆトレンチ石積み検出状況（東より）
　　同上（西より）
PL 6　Ｆトレンチ石積み検出状況（西より）
　　Ｆトレンチ石積み西端部（南より：上方が詰ノ段）
PL 7　Ｒトレンチ遺構検出状況（西より）
　　Ｒトレンチ遺物出土状況（東より）
PL 8　詰ノ段調査前全景・Ａ－２トレンチ（東より）
　　Ａ－３トレンチ（西より）・二ノ段南から二ノ段西を望む
　　二ノ段西Ｅトレンチ・二ノ段南Ｆトレンチ設定
　　Ｆトレンチ調査風景・二ノ段北調査前全景
PL 9　二ノ段北Ｒトレンチ調査前全景・Ｒトレンチ調査風景
　　ＲトレンチＳＸ１検出状況・Ｒトレンチ遺物出土状況
　　土師質土器一括出土状況・青磁盤（No.108）出土状況
　　Ｂ区丘陵南尾根部調査風景・Ｂ区Ｘトレンチ調査前全景
PL 10　土師質土器（小皿・杯）
PL 11　土師質土器（杯・皿）
PL 12　土師質土器（小皿・小杯・杯）
PL 13　土師質土器（小皿・灯明皿・杯）
PL 14　土師質土器（杯）
PL 15　土師質土器（杯・皿）
PL 16　土師質土器（皿・耳皿・小杯）
PL 17　土師質土器（小皿・杯）
PL 18　土師質土器（小皿・杯・皿）
PL 19　瓦
　　石製品
PL 20　瓦質土器（火鉢）
　　備前焼（摺鉢）
PL 21　銅製品
　　銅銭
PL 22　青磁（杯・碗・盤）外面
　　同上　内面
PL 23　青磁（碗・稜花皿・盤・香炉・摺鉢）外面
　　同上　内面
PL 24　青磁（碗・盤・青白磁）・青白磁（梅瓶）・染付（大皿）外面
　　同上　内面
PL 25　染付（皿）外面
　　同上　内面
PL 26　備前焼（摺鉢）外面
　　同上　内面
PL 27　白磁・青白磁・天目　外面
　　同上　内面
PL 28　備前焼（甕・壺）外面
　　同上　内面
PL 29　瀬戸・美濃焼　外面
　　同上　内面
PL 30　石製品　外面
　　同上　内面

第Ⅰ章　調査の契機と経過

1．調査の契機

葉山村は，高知県の中央西寄りに位置し，北面は東から佐川町・越知町・仁淀村，西方は東津野村，南に大野見村，東は須崎市に境を接している。村の周囲を山々が囲み，中央部には新荘川が西東に流れ，国道197号が川に並走している。



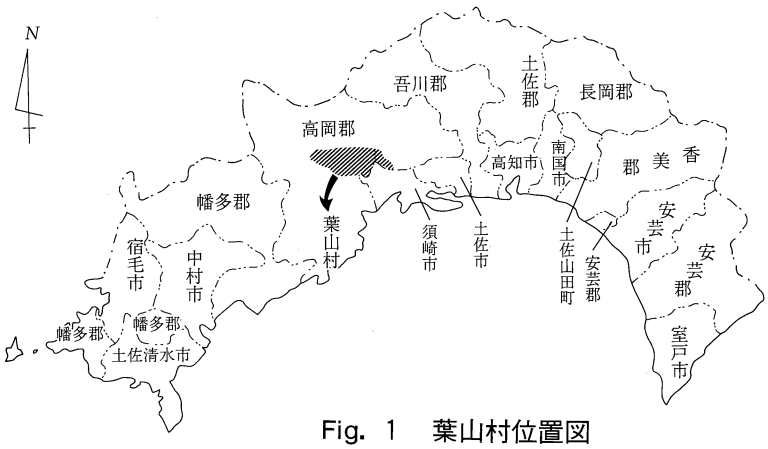


Fig. 1　葉山村位置図

この葉山村には，中世，高岡郡一帯を治めていた津野氏により築かれたとされる姫野々城跡が存在する。中世城郭として，その景観の壮麗さをはじめ，周辺城下町を含めた学術的価値は計り知れないものがあり，地元葉山村における文化財の中ではシンボル的存在として位置付けられている。この他にも歴史的に高く評価されるべき文化財が存在する地域でありながら，近年，村の地域振興発展のために産業基盤整備など開発の手が及び，遺跡自体蚕食されながらその姿を失いつつある。

こうした中，姫野々城跡が立地している丘陵にも農山漁村活性化定住圏創造事業による城山公園整備計画が持ち上がった。計画では城跡の立地している丘陵を山に派生している自然林とともに，姫野々城跡の歴史的景観を生かし，城山を訪れた人々が散策しながら歴史・自然などを学べる公園に整備するという目的であり，具体的には丘陵尾根部における遊歩道の設置，主郭部分にあたる山頂部に城の機能していた時期の建物及び施設等を復元するというものであった。

これに先立ち，文化財保護の立場から葉山村文化財保護審議会，葉山村教育委員会，ならびに高知県教育委員会では，葉山村産業課と協議を重ねた結果，計画地が村史跡であることをふまえ，事前に城跡内における遺構の拡がりをはじめ，城跡の時期や，遺物の分布密度など姫野々城跡の基礎的データを得るための試掘調査を実施する必要性に迫られた。このため葉山村教育委員会では，平成６年度に国庫補助金を得て，遊歩道計画ルートである丘陵南尾根部，及び山頂部を中心に城跡の縄張り調査及び試掘調査を実施することとなった。調査の結果，山頂部の主郭部分では礎石建物跡，石積みを伴う堀状遺構などを検出し，それに伴い土師質土器，輸入陶磁器など姫野々城跡の機能時期を知る上で貴重な遺物の出土があった。また，城跡の縄張りについては東本城から東方に堀切が存在することが明らかとなり，主郭部分の縄張りと併せて姫野々城跡の縄張りの変遷を考える上で多大な成果であった。

今回の調査は，平成６年度に引き続き主郭部分を中心に検出した遺構の規模，拡がりを把握するための調査を行った。調査は，平成７年度に国庫補助金を得て葉山村教育委員会が主体となり，発掘調査には（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターからの調査員の派遣を受け，平成７年５月22日より調査を行った。

２．調査の経過

姫野々城跡の発掘調査は，平成７年５月22日に発掘器材を搬入，設営し調査を開始した。調査は，主郭部分（Ａ区）を中心に行われ，平成６年度調査で遺構を確認した調査トレンチを拡張し調査を進めた。また，丘陵南尾根部（Ｂ区）についても，遊歩道計画ルートである尾根を中心に試掘調査を行った。発掘は，すべて人力により行ったが，現場は急峻な地形，雑木が生い茂り困難をきわめた。調査区設定においても植林，自然林保護のため，これら樹木の間に調査区を設定せざるを得なかった。以後，酷暑を通じての調査であったが，７月24日に無事調査を終了することができた。現地調査後の整理作業及び報告書作成は，高知県立埋蔵文化財センターの施設において行われ平成８年３月31日をもってすべての作業を終了した。

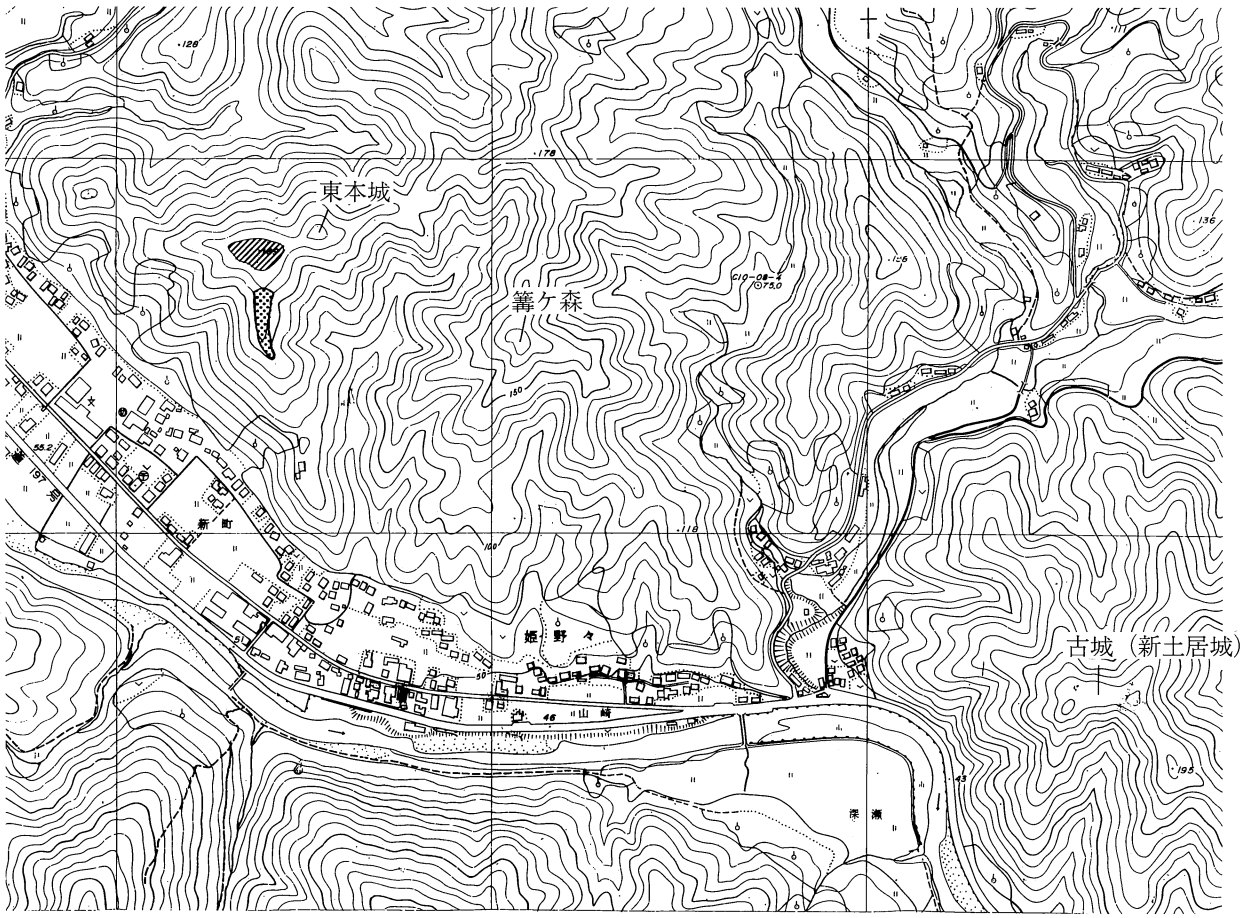


Fig. 2　姫野々城跡周辺地形図

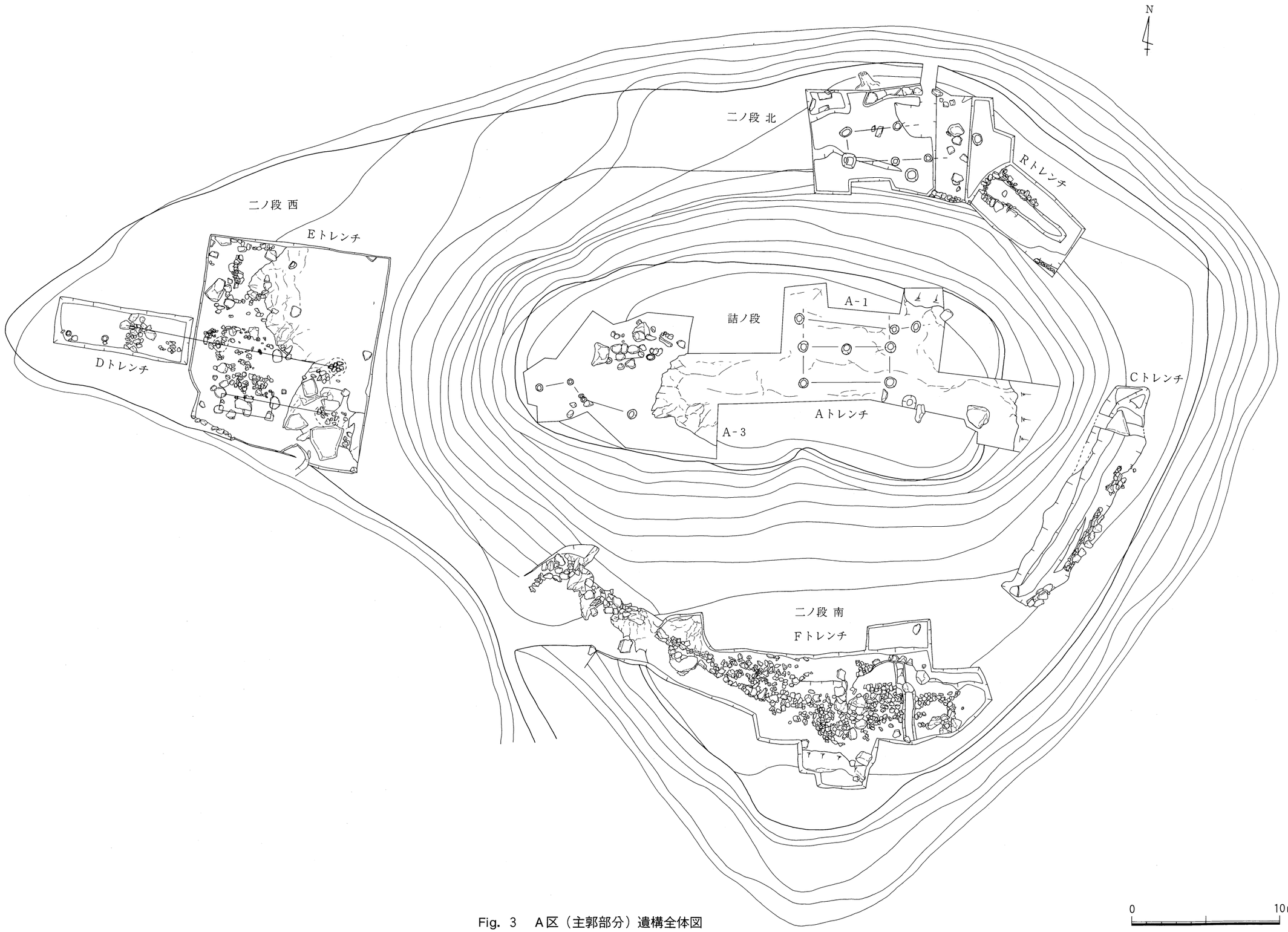


Fig. 3　A区（主郭部分）遺構全体図

第Ⅱ章　調査の成果

今回の調査は，平成６年度調査で遺構を確認している主郭部分（Ａ区）を中心に調査トレンチを拡張し，遺構の規模・性格等の把握に努めた。主郭部分（Ａ区）は，標高193ｍを測る山頂部に平面楕円形を呈した180㎡ほどの平場があり，比高差３～５ｍを測る下方には帯曲輪を呈した平坦面が巡る。帯曲輪は，西方，南方にそれぞれ突出しており平場を形成している。調査では，山頂部の平場を「詰ノ段」，帯曲輪を「二ノ段」とそれぞれ呼称し，平坦面を中心に調査区を設定した。詰ノ段では平成６年度調査でピットを検出しており，遺構の拡がりが考えられる箇所にＡ－１～３トレンチを設定し調査を進めた。二ノ段では，礎石建物跡と考えられる遺構を検出した二ノ段西Ｅトレンチ，二ノ段南Ｆトレンチを拡張した。また，今年度調査では新たに帯曲輪北側にＲ・Ｓトレンチを設け発掘調査を実施した。Ｅ・Ｆトレンチについては，礎石，集石遺構及び石積み遺構を検出し，土師質土器片，青磁，染付が出土している。Ｒトレンチでは，岩盤を掘込んだ掘立柱建物の柱穴及び石積み遺構を確認し，整地層中より，多量の土師質土器，国産陶器，輸入陶磁器など15世紀～16世紀前半代を中心とする遺物の出土があった。丘陵南尾根部（Ｂ区）については，平成６年度に調査を行った平場２の尾根筋を中心に５ヵ所トレンチを設定し，Ｔ～Ｘと付し発掘調査を実施した。この中で，尾根方向の変化点にあたるＶトレンチでは多量の土師質土器片が出土している。また，平場２の南西斜面に設定したXトレンチでは土師質土器片とともに，岩盤をL字状に削った犬走り状の平坦面を検出した。

ここでは各トレンチごとに，その概要について記述していく。

１．主郭部分（Ａ区）

詰ノ段

⑴　Ａ－１トレンチ（Fig. 4）

詰ノ段北東隅部に設定した６×2.5ｍのトレンチである。平成６年度調査（一次調査）で詰ノ段に十字に設定したＡ・Ｂトレンチの北東側にあたる。基本層序は表土層（褐色土）のみである。表土層直下で地山の岩盤を掘込んだピット（Ｐ－８～13）を６個検出した。ピットのプランはいずれも円形で，直径35～40㎝前後を測り，深さ20～48㎝である。一次調査のＡトレンチで検出しているＰ－６・７と今回検出したＰ－10・12がそれぞれ対応し，梁間１間（1.20ｍ）以上，桁行２間（3.75ｍ）とみられる東西棟建物になるものと思われる。柱間寸法は梁間（南北）1.25ｍ内外，桁行（東西）1.80ｍと1.90ｍを測る。棟方向は，Ｎ－86°－Ｅである。Ｐ－９は深さ20㎝を測り，遺構埋土は褐色土である。直径15㎝前後の円礫がピット上層部側面に３個並んだ状況で検出した。Ｐ－９より土師質土器の杯（Fig. 5　No. １～３）が３個体まとまって出土し，他にもＰ－12から青花（染付）の皿片（Fig. 5　No. 5）が１点出土している。他のピットからは，遺物の出土は認められなかった。

出土遺物（Fig. 5）は，褐色土中より染付の細片が僅少出土しているが図示でき得るものは５点である。１～３は，土師質土器の杯であり，Ｐ－９から一括して出土した。底径の狭い底部から内湾気味に立ち上がる。内外面とも回転ナデを施し底部切り離しは，すべて回転糸切りによるもの

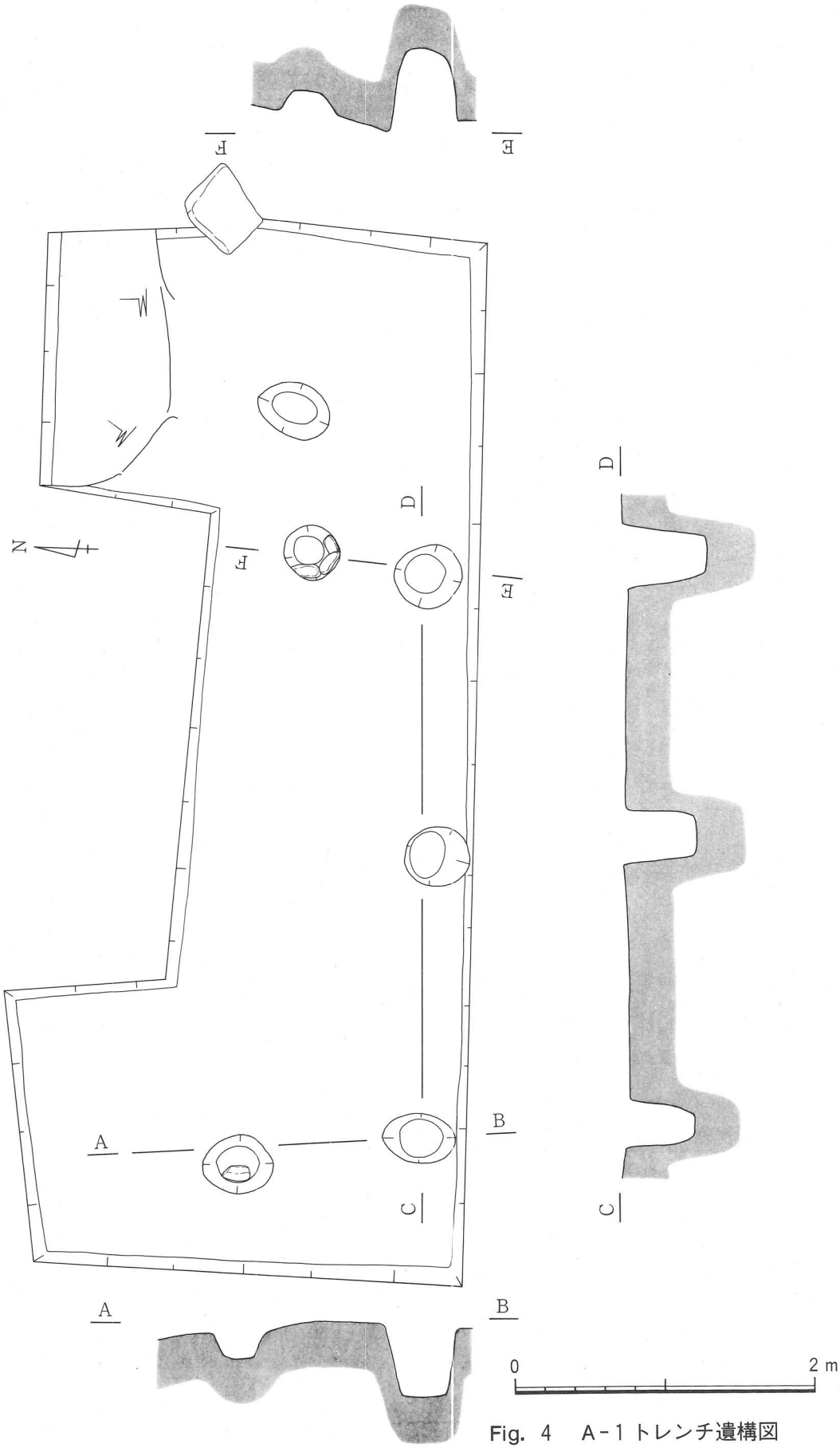


Fig. 4　A-1 トレンチ遺構図

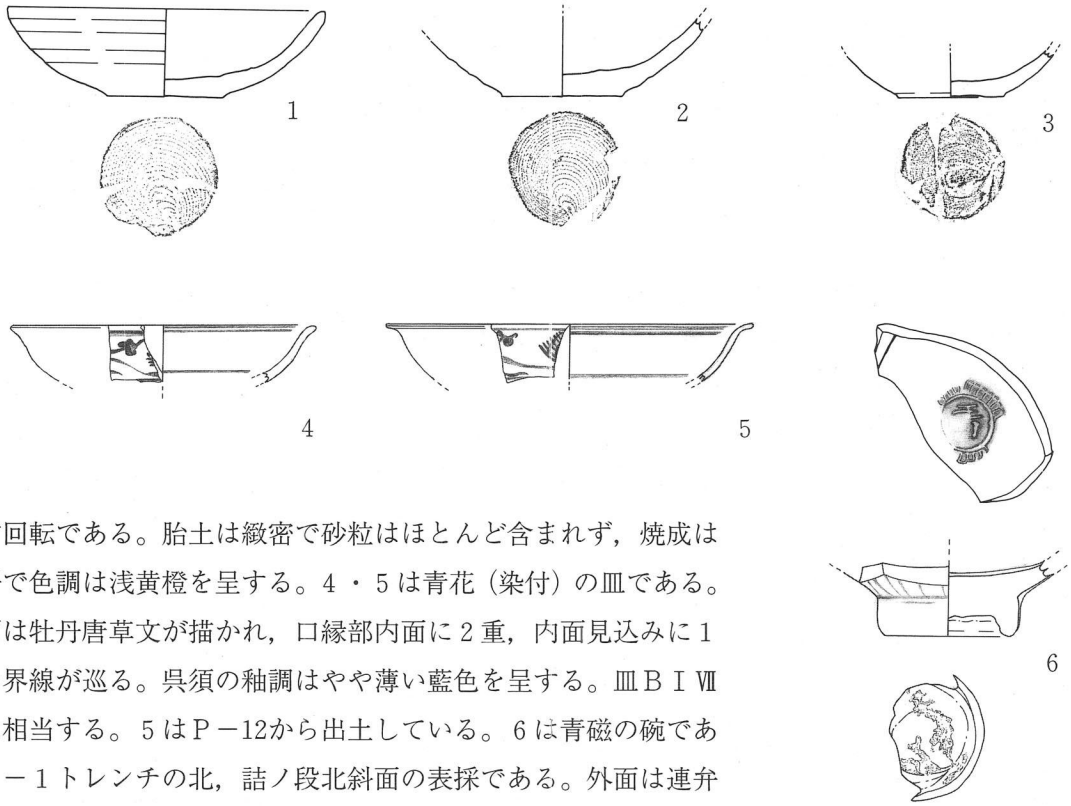


Fig. 5　A-1トレンチ出土遺物

で右回転である。胎土は緻密で砂粒はほとんど含まれず，焼成は良好で色調は浅黄橙を呈する。4・5は青花（染付）の皿である。外面は牡丹唐草文が描かれ，口縁部内面に2重，内面見込みに1重の界線が巡る。呉須の釉調はやや薄い藍色を呈する。皿ＢⅠⅦ群に相当する。5はＰ－12から出土している。6は青磁の碗でありＡ－1トレンチの北，詰ノ段北斜面の表採である。外面は連弁文，内面見込みには，菊花に囲まれた「寿」と思われるスタンプが施される。釉は全体的に厚く全面施釉され，外底部は釉を輪状に削り取る。

(2)　Ａ－2トレンチ（Fig. 6）

詰ノ段北西部，Ａ－1トレンチの西側に設定した2×4ｍのトレンチである。表土下20㎝前後で地山の岩盤が認められる。地山は，詰ノ段北斜面に向け46°の傾斜角で落ち込んでいる。遺構は検出されなかった。出土遺物（Fig. 6）は，表土層及びⅡ層（暗褐色土）中から出土したものである。7は，備前焼甕の口縁部片である。口縁部は外側へ折り返し玉縁を呈する。8・9は青花（染付）の皿であり，表土層中から出土した。8は高台脇に2重の界線が巡る。内面見込みは，幅の広い粗雑な界線が巡り，その内側には木賊風の文様が描かれている。高台外面は面取りされ，高台内面途中まで釉を削り取る。9は内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。外面は渦状に装飾化された唐草文，内面は波涛文帯が描かれる。口縁部内面には，2重の界線が巡る。

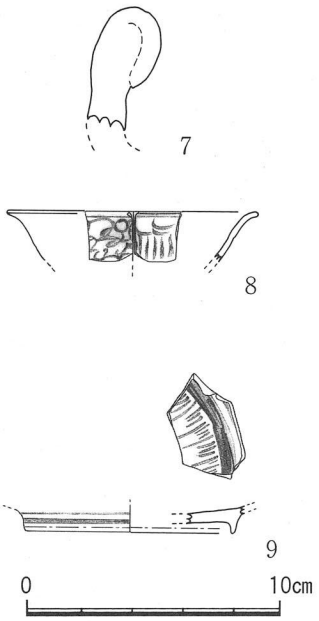


Fig. 6　A-2トレンチ出土遺物

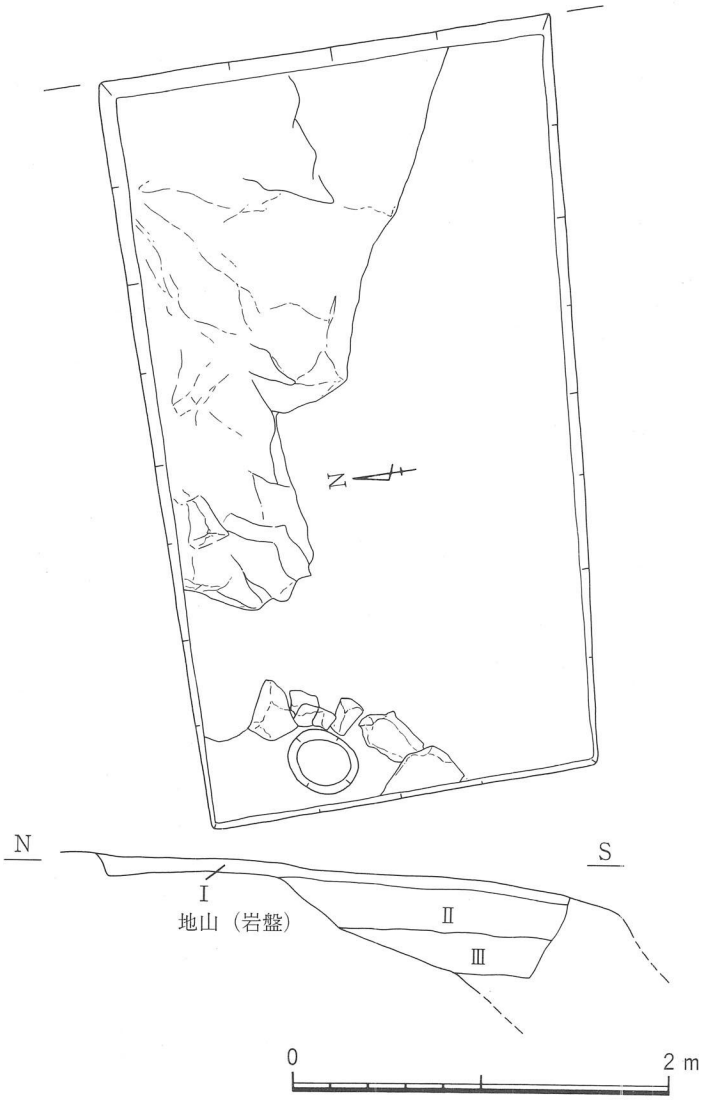


Fig. 7　A-3トレンチ平面図・セクション図（東壁）

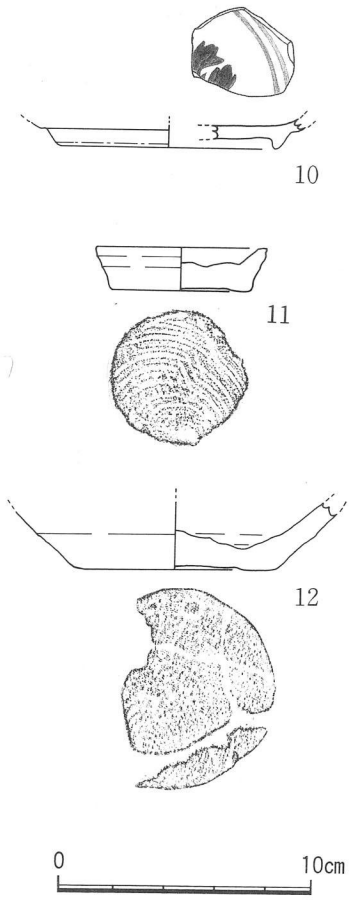


Fig. 8　A-3トレンチ出土遺物

(3)　A－3トレンチ（Fig. 7）

詰ノ段南西隅に設定した2×4ｍのトレンチである。表土下10cm前後で地山の岩盤が認められるが，地山はトレンチの南東方向から北西に向けて切れている。岩盤のラインから南東部は，土師質土器片を含んだ褐色土の整地層（第Ⅲ層）である。この整地層は，一次調査で確認されており，詰ノ段西側については，整地層により平場が拡張されている。一次調査では，この整地層上面において柵列と考えられるピットを検出しているが，A－3トレンチの西端部で検出したP－14はこの柵列の続きであると考えられる。P－14は，直径28cmの円形であり，深さ20cm前後を測る。遺構埋土は，整地層よりやや色調の暗い暗褐色（Ⅱ層と同じ）を呈する。遺物は，土師質土器の細片が3片出土している。

出土遺物（Fig. 8）は，土師質土器の細片が第Ⅱ層中よりまとまって出土している。10は，青花（染付）の皿であり，表土層（第Ⅰ層）から出土した。内面見込みには2重の界線が巡り，その内側には捻花風の便化した牡丹文が描かれている。高台内面及び，高台外面途中の釉を削り取る。11は土師質土器の小杯である。ベタ底から上方に短く立ち上がる。底部の器壁は厚く，内面にロク

ロ目が残る。底部切り離しは回転糸切り（右回転）によるもので，切り離した後に簀状の圧痕が認められる。12は土師質土器の皿の底部である。底径8.0㎝を測り，斜上外方に直線的に立ち上がる。回転ナデ調整，回転糸切り（右回転）によるものである。

二ノ段西

(4)　Ｅトレンチ（Fig. 10）

二ノ段西に設定した調査区である。二ノ段西は帯曲輪の中でも西側に大きく突出した平場であり，詰ノ段との比高差は5.5～6.0ｍを測る。一次調査で礎石を検出しており，遺構の規模を確認するために一次調査のトレンチを北側に２ｍ，南側に４ｍ拡張した。調査面積は72㎡であり，基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層：表土層

第Ⅱ層：明褐色土

第Ⅲ層：暗褐色土（黒色土：炭化物層）

第Ⅳ層：暗褐色瓦礫層（整地層）

第Ⅴ層：黄褐色瓦礫層

調査区北部の表土層の厚さは５～10㎝であり，下層は地山の砂岩質岩盤礫である。岩盤の標高は187.00ｍ前後を測りほぼフラットに成形されている。調査区ほぼ中央部で40㎝前後西側に向けて深く削られており，この地点から西側にかけては瓦礫層により整地されている。この整地層上面（第Ⅳ層上面）での標高は，186.60ｍを測る。Ⅳ層上面には，Ⅲ層の暗褐色土と黒色土（炭化物層）があり，土師質土器の杯・皿がほぼ完形で多量に出土した。特に，Ｓ２・３・４・SS３に囲まれた範囲内において完形品が一括集中出土している。また，直径40～50㎝前後の扁平な河原石の礎石を検出した。石質は全て砂岩質である。礎石は，一次調査で確認されているものと並んでおり，１間（2.50ｍ）×２間（4.00ｍ）以上の南北棟礎石建物（Ｓ１～Ｓ６）か，もしくは一次調査Ｄトレンチで確認されている礎石と並び１間（2.00ｍ）×３間(7.50ｍ）以上の庇構造（Ｓ７・８）を持つ東西棟の櫓門的な性格の建物になるものと思われる。

北側（SS１），南側（SS２）とも岩盤礫の切れ目に直径20㎝前後の円礫を敷き詰め，根石にしている。SS１は円礫が６個，SS２は円礫５個，角礫４個で構成されており，石質は砂岩質である。エレベーション（Fig. 9）では岩盤上のSS１・２と，整地面上のＳ２・３・４・SS３の標高差が20～40㎝を測る。また，庇部分（Ｓ７・８）の柱間寸法は2.20ｍを測り，中央に階段状の踏石（Ｓ９・10）を構える。Ｓ９・10の蹴上げは（段差）20㎝を測り，Ｓ10の踏み面（石の上面）は38㎝である。Ｓ３・７とＳ４・８の柱間寸法は80㎝を測る。櫓門の棟方向は，Ｎ－70°－Ｅである。

南北棟礎石建物（Ｓ１～Ｓ６）は，岩盤上のＳ１と，整地面上のＳ２～６の標高差が34～40㎝を測り，構造上の問題点が残る。Ｓ２に対応しているのはSS３であるが，Ｓ５が木根の攪乱等により移動している可能性があり，礎石は40～50㎝の扁平な円礫であり，柱間寸法は梁間2.40～2.80ｍ，桁行1.80～2.00ｍを測る。棟方向はＮ－32°－Ｗである。

調査区の南西隅部の壁には，直径16～28㎝の石列が長さ2.20ｍ曲輪の外縁に沿って続いている。

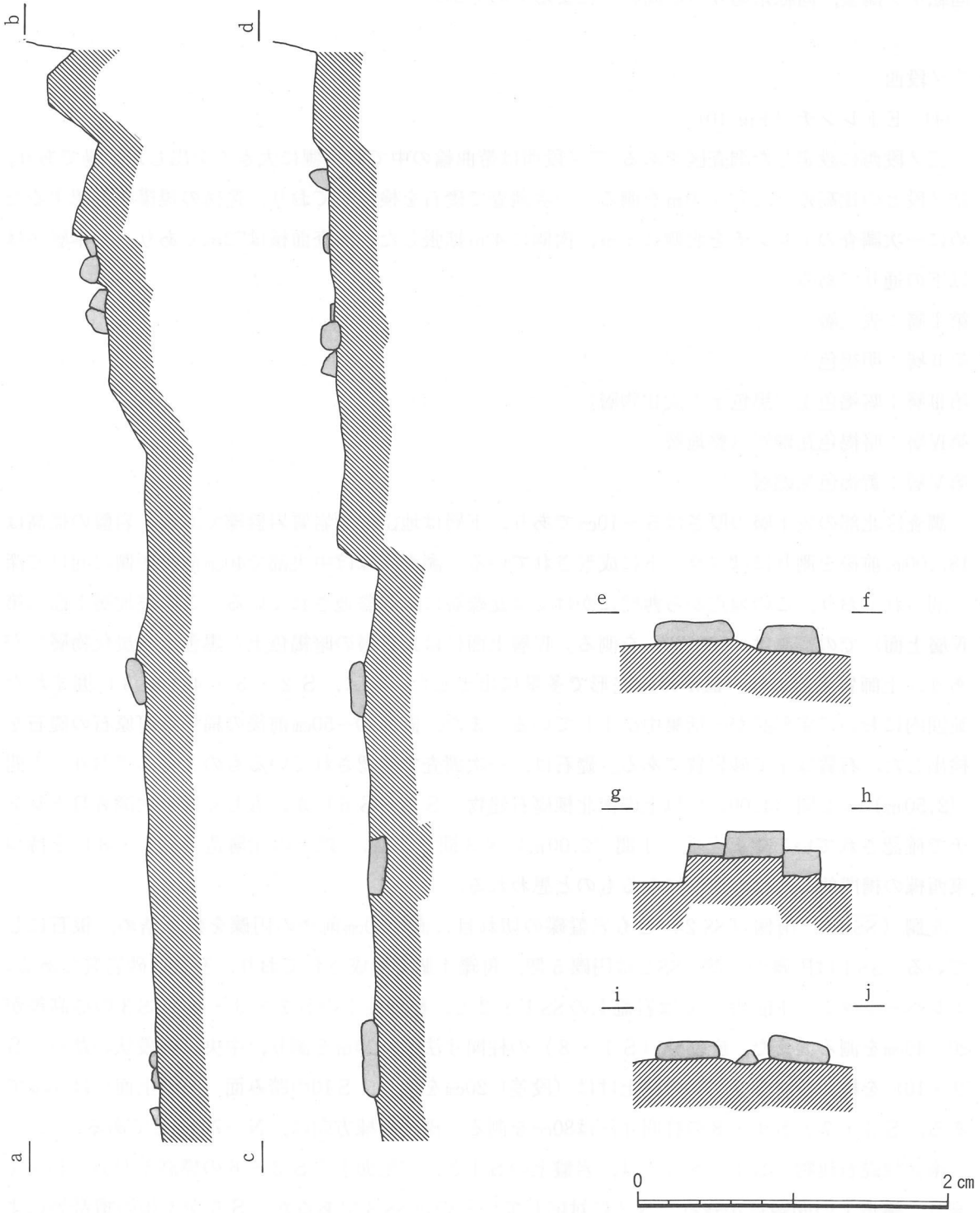


Fig. 9　Eトレンチ礎石エレベーション

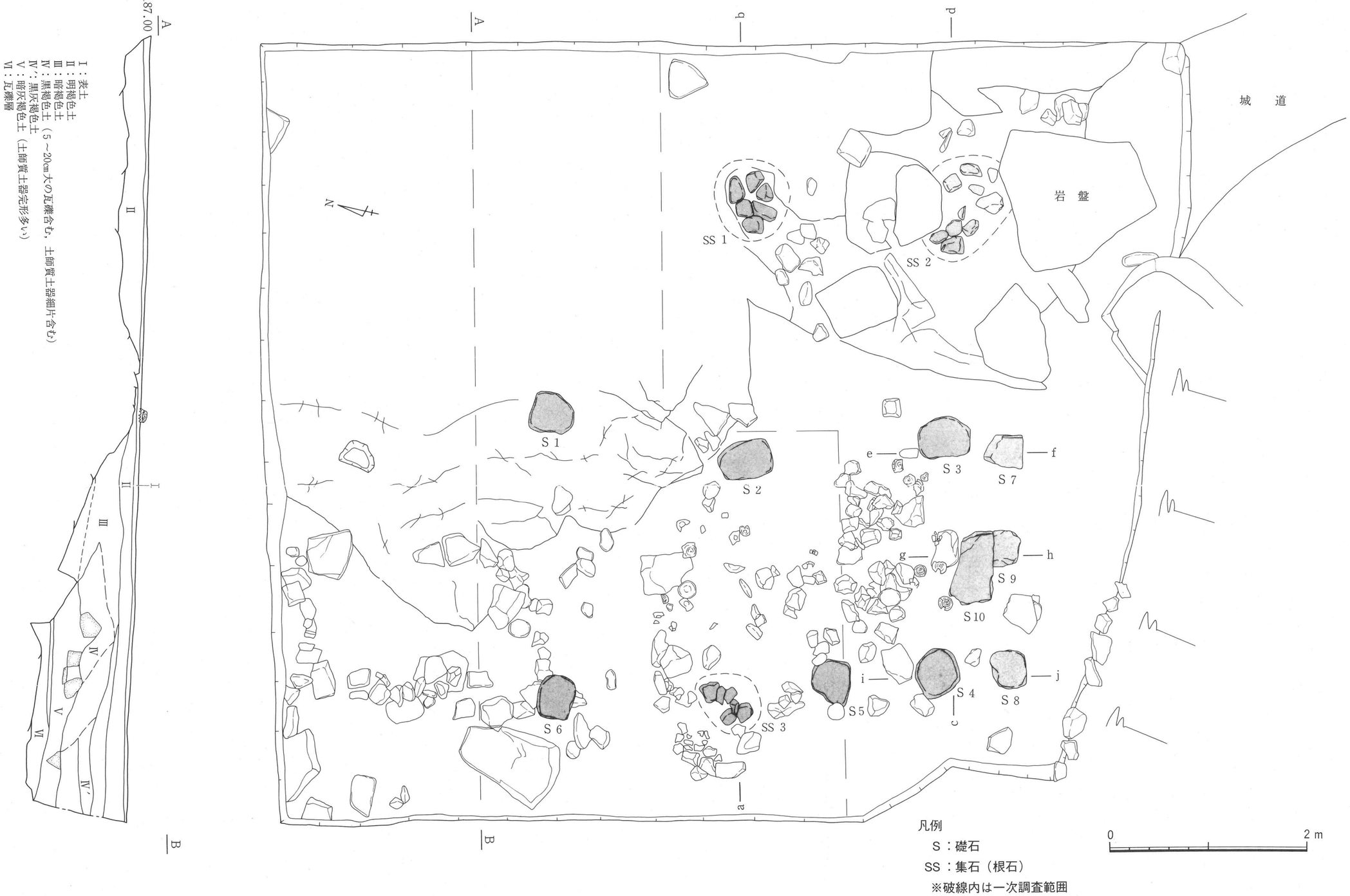


Fig. 10　Eトレンチ遺構平面図・セクション図（南壁）

検出レベルはＳ７・８と同じレベルであり，石列上面での標高は186.40ｍを測る。

その他調査区北では，岩盤上でピットを１個検出した。プランは直径36㎝前後を測る不整円形で，深さは26㎝を測る。遺構埋土はⅡ層の明褐色土であり，遺物は出土しなかった。また，調査区北東隅部と東端中央部の地山岩盤上で，直径32～40㎝前後を測る扁平な円礫を検出している。礎石に使われていた可能性が強い。

Ｅトレンチ出土遺物（Fig. 11）

今年度調査の二ノ段西Ｅトレンチからは総点数1205点の遺物の出土があり，その内訳は，土師質土器1166点（細片も含めて），備前焼４点，青磁８点，白磁１点，青白磁２点，染付４点，鉄製品６点，銅製品１点，石製品１点，炭片11点，貝殻１点が出土した。土器器種の構成は土師質土器：小杯・小皿・杯・皿，備前焼：甕，青磁：碗・杯・盤，青白磁：梅瓶（渦文），白磁：皿，染付：皿が出土している。この内土師質土器は，Ⅲ層693点，Ⅳ層376点と圧倒的にⅢ・Ⅳ層から集中して出土している。陶磁器については，Ⅰ～Ⅱ層上面にかけて出土がみられた。Ｅトレンチ北のⅣ層瓦礫層中より青磁盤，胴製品（飾り金具）が出土している。

ここでは，今回，Ｅトレンチより出土した遺物について種類・器種ごとに分類し，図示した遺物を中心に概要をまとめることにしたい。

(1) **土師質土器**（Fig. 11　13～31）

土師質土器は，小杯・小皿・杯・皿の供膳具が中心に出土している。今回出土した供膳具の土師質土器は全てロクロ成形で，底部外面に回転糸切り痕が施される。回転方向は右回転であり，内面はナデ調整が施され，底部内面にロクロ目を残す。皿の中では，今回図示し得なかったが，手づくねの製品も微量みられる。

ここでは小杯・小皿・杯・皿について法量・形態・胎土等の特徴から分類を行った。小杯・小皿については器高で大きく分類し，底径指数（口径と底径の比率）で細分類をおこなった。杯については，胎土・色調の差異で大きく分類し，形態及び底径指数等で細分類した。また，杯については皿と明瞭に区別できないタイプもあるが，今回は杯として分類した。

小杯（13・14）

Ａ類：器高が1.7㎝以上を測り，底部から斜上外方に直線的に立ち上がるもの。

Ａ－１類（13）

底径指数が68％以上を測り，底部から外上方に直線的に立ち上がるタイプのもの。13は底部内面にロクロ目が残る。

Ａ－２類（14）

底径指数が56％を測り，Ａ－１類に比べ斜上外方に開くタイプのもの。底部は段をもつ。14は器高が2.1㎝とやや高く，内面はナデ調整が施され底部内面にロクロ目を残さない。

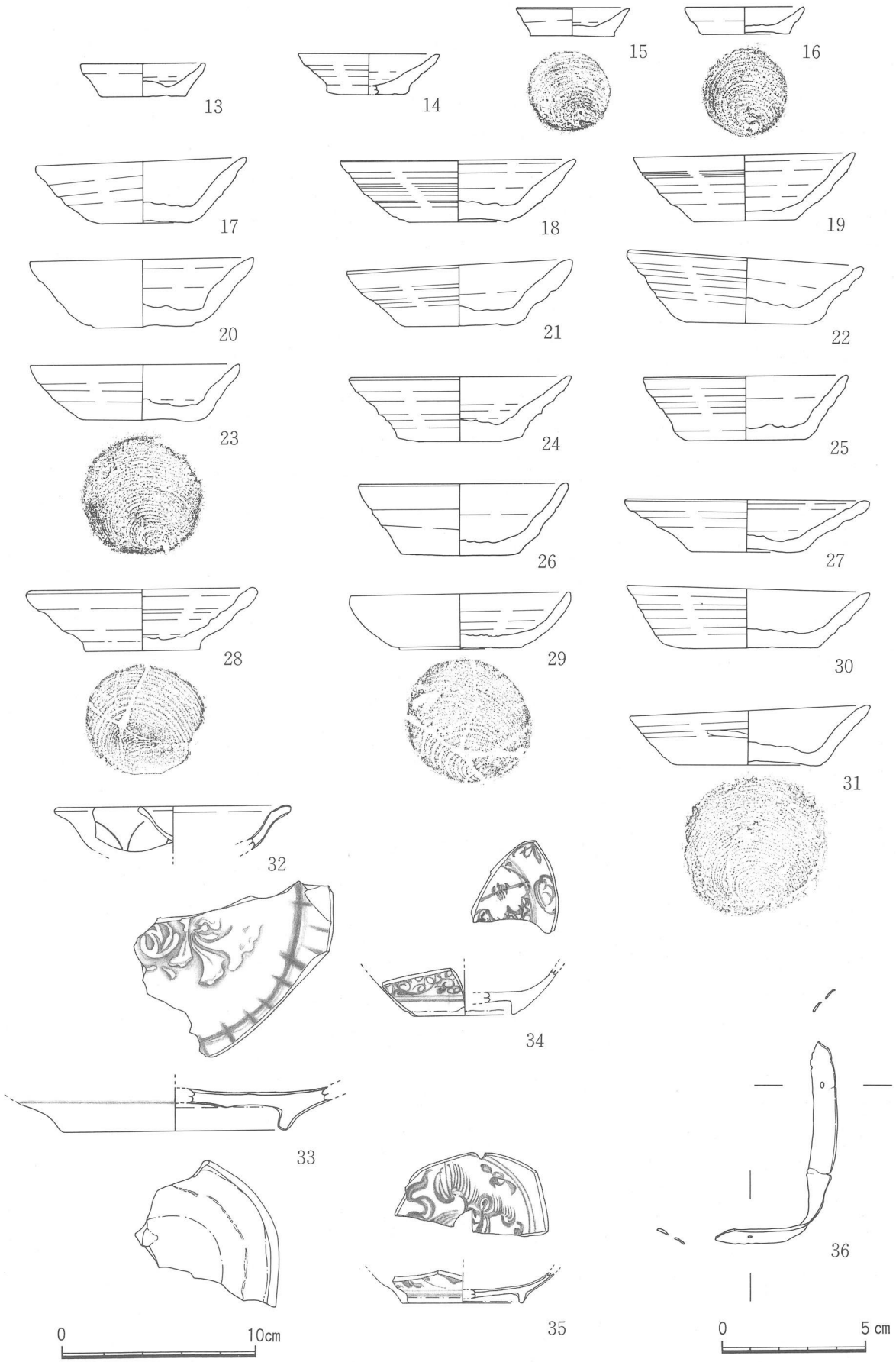


Fig. 11　Eトレンチ出土遺物（土師質土器・青磁・青花・銅製品）

小皿（15・16）

小皿は，器高が1.4㎝以下のものである。

Ａ類：底径指数が72％以上を測り，外上方に短く立ち上がるもの（15・16）。15は底部切り離しが低速回転によるものである。体部外面の一部が熱を受け赤色を呈する。16は体部外面下半に強いナデにより段差が生じる。

杯（17～29）

杯は，胎土・色調に差異が認められることから，ここで大きく分類し，形態及び底径指数等で細分類を行った。

Ａ類：全て軟質で，橙色を呈する。ロクロ成形によるもので回転ナデ調整が施され，底部切り離しは回転糸切り（右回転）による。底径は4.5～6.4㎝を測る。

Ａ－１類（17～21）

口径10.8～12.1㎝を測り，底径指数40％前半代を示すもので，斜上外方に直線的に立ち上がるタイプのものである。17は，ベタ底から外上方へ直線的に立ち上がり，口縁部は尖り気味に仕上げる。他に比べやや法量が小さい。18の口縁端部は尖り気味であり，口径は12.1㎝と大きい。20・21は，器壁が分厚く他に比べ粗雑であり，体部内面下半部に段を持つ。21は底径が6.1㎝と大きく，底径指数も53％を示すものであるが，形体的には20と同じタイプである。

Ａ－２類（22）

底径指数50％前半代を示し，斜上外方に直線的に立ち上がるタイプである。22は体部外面下半は，強いナデ調整により段が生じる。

Ａ－３類（23～26）

底径指数50％後半代を示し，外上方に直線的に立ち上がり箱型に近い形態である。内面体部下半にやや段を持つ。器高は2.9～3.7㎝とばらつきがある。

Ａ－４類（27）

器高が2.7㎝と低く形態的にみて皿と呼べるものである。27は底径が5.7㎝と狭く底径指数が45％以上を示すことからここでは杯に分類した。

Ｂ類：Ａ類に比べ胎土が緻密で硬質であり，色調が鈍い黄橙色を呈する。

Ｂ－１類（28）

底径指数51％を示し，ベタ底からやや段を持ち斜上外方へ立ち上がり，口縁部は丸味を帯びやや肥厚する。28の外面は丁寧なナデ調整，内面はロクロ目を残す。

Ｂ－２類（29）

ベタ底から外上方へ内湾して立ち上がる。口縁部は尖り気味に仕上げる。29の外面は丁寧なナデ調整，内面はロクロ目を残す。

皿（30・31）

Ａ類：器高が3.1㎝以下で底径が7.5㎝以上を測るもの。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がる。

全て回転ナデ調整が施され，底部外面には回転糸切り痕（右回転）が残る。30・31の体部内面は丁寧なナデによりロクロ目を残さない。

(2) **青磁**（32・33）

青磁はＥトレンチより８点出土しているが，その内訳は碗５点・皿２点・盤１点である。32は杯であり，内湾気味に立ち上がる体部から口縁部は強く外反する。体部外面に幅の広い連弁を片切彫で表現しているが，連弁部は盛り上がりを失う。Ｂ－Ⅱ類に属する。33は盤であり，内面見込みに１重の界線が巡りその内側には牡丹文の印花を施す。見込み界線部より体部にかけ単位の不規則な連弁がみられる。釉は全体的に厚く全面に施釉され，外底部は釉を輪状に削り取る。外底中央部は，やや凹む。

(3) **染付**（34・35）

脇に２重の界線が巡る。呉須の釉調は淡い藍色を呈する。35は皿（B_2Ⅶ群）であり，高台から内湾気味に立ち上がる。内面見込みに２重の界線が巡り，その内側には玉取り獅子が描かれる。高台畳付から外面にかけて釉を削り取る。高台脇は２重界線が巡る。呉須の釉調は淡い藍色を呈する。

(4) **金属製品**（36）

36は，銅製の鎧の小札であると思われる。全長8.6㎝，全幅0.9㎝，全厚0.1㎝を測り，重量は4.6ｇである。両端は尖り気味に仕上げており，両端から1.5㎝の所にそれぞれ直径0.2㎝の円形の穿孔が認められる。

二ノ段北

(5) **Ｒトレンチ**（Fig. 12・13）

二ノ段北側に，今年度新たに設定した調査区である。二ノ段北側は，詰ノ段との比高差4.0～4.5ｍを測り，幅２～５ｍの通路状の平坦面となっている。西から東に向けて標高が高くなっており西端と東端の比高差は２ｍを測る。この通路状平坦面の中でも比較的幅の広い場所に２×４ｍのトレンチを３ヵ所並べて設定しＲトレンチとした。調査面積は45㎡である。基本層序は調査区の部分によって異なるが概ね以下のとおりである。

Ⅰ層：表土

Ⅱ層：暗褐色土（整地層）

Ⅲ層：暗灰褐色土

Ⅳ層：黒色土（炭化物層）

Ⅴ層：黒黄色瓦礫層（炭化物を含む２～20㎝の瓦礫層）

Ⅵ層：地山（砂岩質の岩盤）

表土層の厚さは５～20㎝前後で堆積しており，青花（染付）片が多く出土した。Ⅱ層である暗褐色土は層厚20～40㎝で調査区全域にわたり認められるが，帯曲輪改修時期の整地層であり，青磁片，

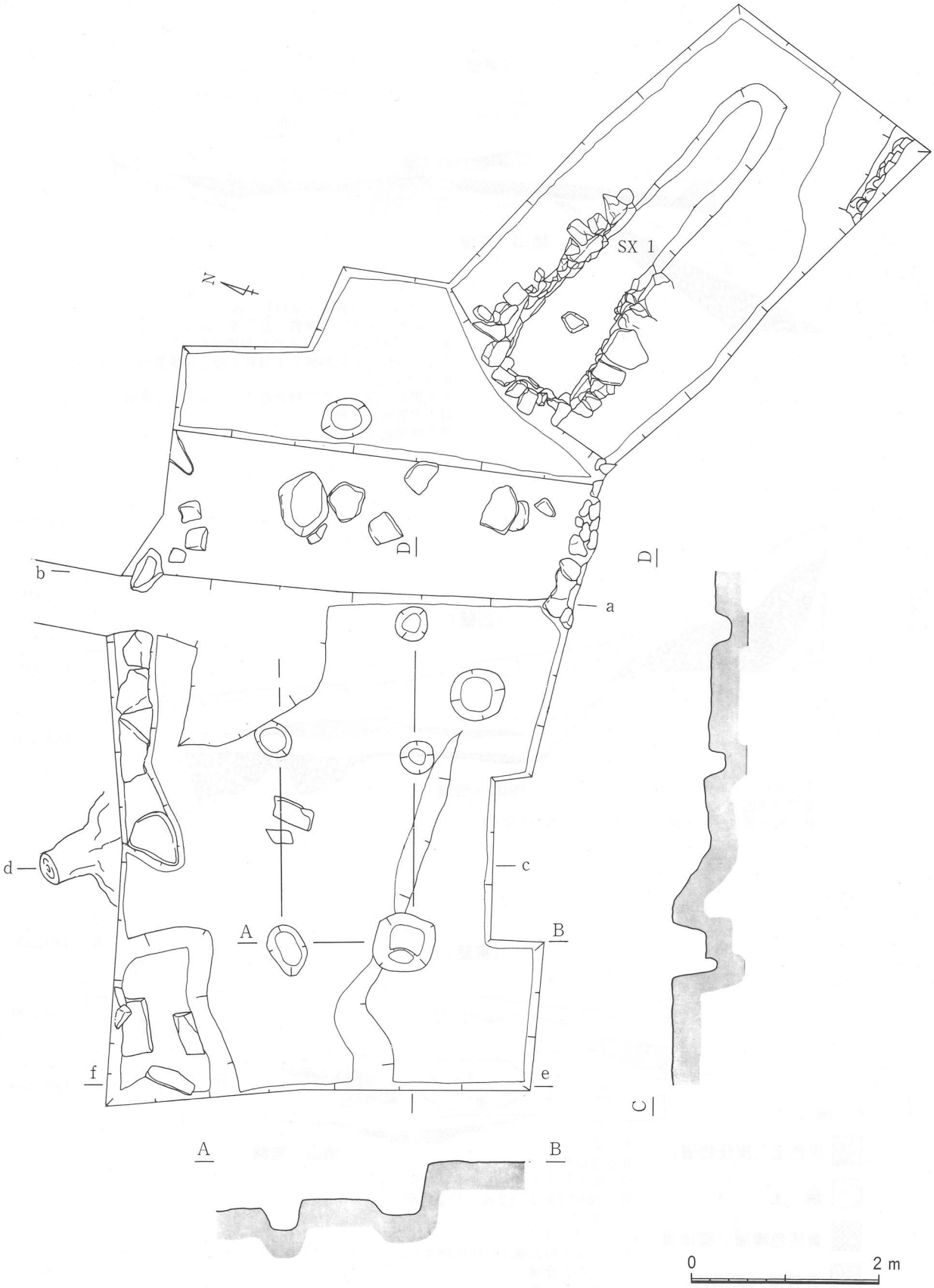


Fig. 12　Rトレンチ遺構図

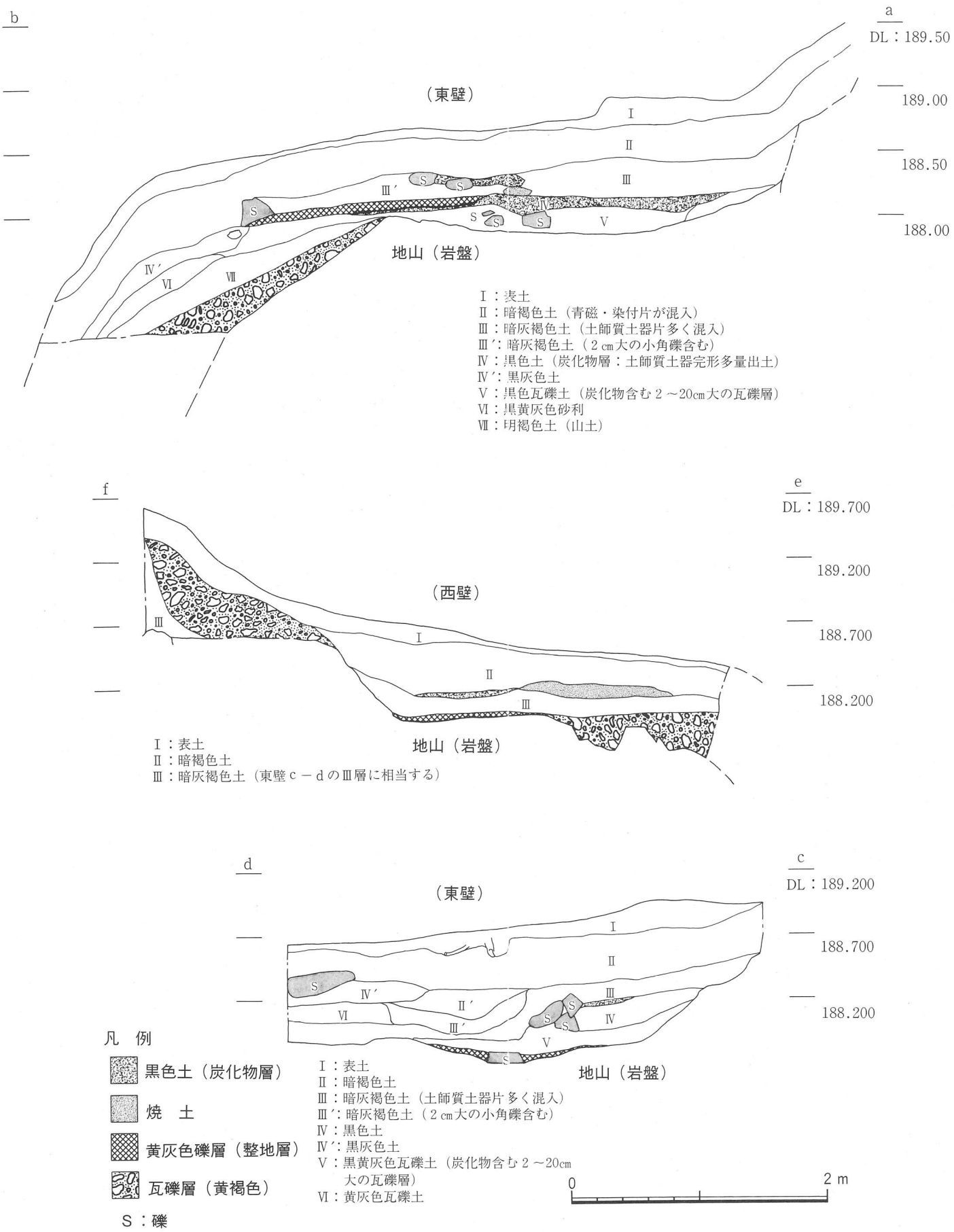


Fig. 13　Rトレンチセクション図

染付片を中心とする遺物が混入している。Ⅲ層は暗灰褐色土で，ほぼ調査区の全域にわたり標高188.20m前後で認められるが，Ⅳ層の黒色土もほぼ同じレベルで検出されており，第一次面としてキー層になる。層中には土師質土器片が多量に含まれており，特に，Ⅳ層からは完形品も多く出土している。Ⅳ層は炭化物を含んだ黒色土であり，焼土（赤褐色土）も部分的に認められる。Ⅳ層下には黒色及び黒黄色を呈したⅤ層が認められるが，調査区西端部では認められない。このⅤ層は2～20cm大の瓦礫整地層であり，炭化物を若干含む地山直上層である。出土遺物は白磁の皿・碗（Fig. 20　115・116）などが出土している。さらに，Ⅴ層下には，固く締った黄色瓦礫土が部分的に認められ地山である岩盤の起伏を充填している。この黄色瓦礫土はａ－ｂの断面をみるとⅢ′層下に認められるが，厚さ10cm前後で北側斜面部上面まで続いており，層の北端には直径40cm前後の腰巻石と思われる角礫が認められることから，このａ－ｂ間では第一次面を北側斜面部に向けて曲輪を拡張し整地を行っているものと考えられる。地山の岩盤は多少の起伏を持ちながらもほぼフラットに成形されており，この成形面での標高は187.90mを測る。また，調査区西端部では詰ノ段斜面下の地山を「Ｌ」字状にカットし二段に成形している。この上段部の犬走り状を呈した平坦面は調査区西端で幅1.8m，上段と下段の比高差65cmを測り，東へ3.70m延びた所で下段の地山面とつながり終結する。

Ｒトレンチでは，掘立柱建物跡１棟，ピット２個，性格不明土坑１基を検出している。性格不明土坑（ＳＸ１）の遺構検出面はⅡ層上面であり，標高188.54mを測る。また，第一次面（Ⅳ層上面）では調査区北端，曲輪縁辺部に直径40～50cmを測る腰巻石と思われる砂岩質の角礫を５個検出している。また，第一次面上では礎石に使われていたと思われる直径40cm前後を測る円礫や，一部，集石が認められたがいずれもプランとしては不明確であった。第一次面下では掘立柱建物跡及びピットを検出した。検出面は地山岩盤直上であり，標高187.90m前後を測る。以下に検出遺構ごとに概要を述べる。

掘立柱建物跡（Fig. 12）

梁間１間（1.20m）×桁行２間（3.48m）以上の東西棟建物になるものと考えられる。柱間寸法は桁行1.20～1.48m，梁間1.48～2.00mとばらつきがある。ピットは直径38～60cmと疎らであり，深さは20～46cmを測る。Ｐ－１は犬走り状平坦面である地山岩盤を切って掘込まれており，直径60cm，深さ35～46cmを測る。また，ピット西端には直径18～22cmの柱痕が認められる。遺構埋土は，黒灰黄色瓦礫土であり遺物は出土しなかった。遺構検出面上の建物中央部は，焼土及び黒色土（炭化物層）が集中している。

性格不明土坑ＳＸ１（Fig. 12・14）

調査区東部，標高188.80mを測るⅡ層上面で検出した。長軸4.26m，短軸60～95cmを測る長方形状の土坑であり，土坑の南壁，及び北壁，西壁の一部は石積みが認められる。土坑の東半分は岩盤を溝状に掘込んでおり石積みはみられない。土坑底面の標高は東端部で187.97m，西端部で187.87mを測り，西側に向かってやや傾斜している。石積み部の南壁は長さ1.76m，高さ0.88mを測り，東

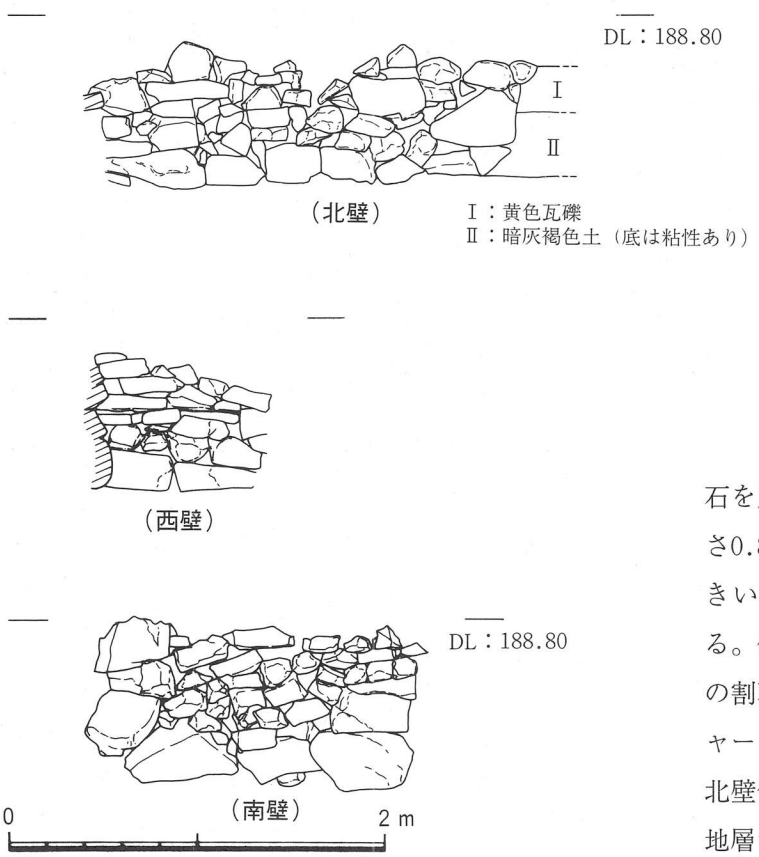


Fig. 14　Ｒトレンチ SX 1 石積み側面図

端及び底石部には直径60㎝大の比較的大きい角礫（砂岩）を用い，他は直径10～20㎝大の角礫（砂岩）及び割石で隙間なく積み上げている。南壁側の東端から東側は岩盤である。西壁側は長さ0.90ｍ，高さ0.70ｍを測り，長径20～40㎝の扁平な割石を横に寝かして積み上げている。底石は長径50㎝の比較的大きい割石を用いる。北壁側は長さ2.24ｍ，高さ0.80㎝を測り，直径35～50㎝大の大きい割石を東端部と底石に用いている。他は大半が面を揃えた20～30㎝大の割石（砂岩）を用いているが一部チャート質の角礫も認められる。また，北壁側は黄色瓦礫土と暗灰褐色土の整地層がみられることから，この土坑は帯曲輪整地後に構築されたものと考えられる。この石積みを伴う土坑の遺構埋土は黄褐色瓦礫土であり，底面はやや粘性のある灰褐色土が認められる。遺物は出土しなかった。

Ｓトレンチ（Fig. 15）

二ノ段北，帯曲輪整地層の拡がりを把握するためにＥトレンチとＲトレンチの間に設定した１×3.5ｍのトレンチである。Ⅱ層の暗褐色土はＲトレンチのⅡ層に相当し，帯曲輪改修段階の整地層

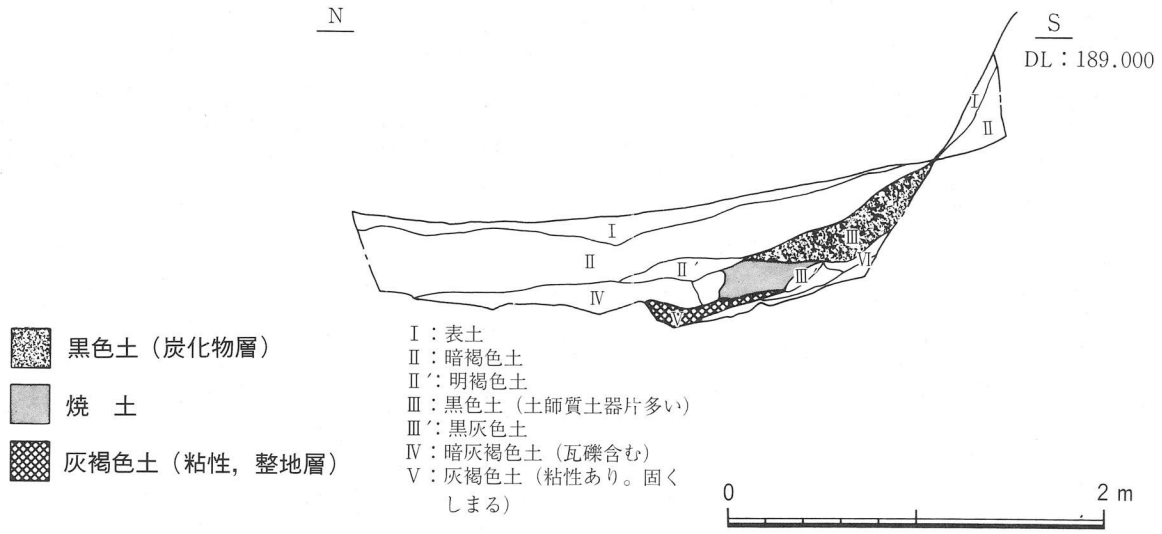


Fig. 15　Ｓトレンチセクション図（東壁）

である。層厚20～30㎝を測りＲトレンチよりもやや薄い。Ⅱ層下にはⅢ層の黒色土と焼土が認められ，Ⅲ層中より土師質土器片が多く出土している。地山岩盤は標高187.50ｍを測り，地山直上にはⅤ層の灰褐色を呈した瓦礫整地層が認められる。Ｓトレンチでは遺構は検出されなかった。出土遺物はⅠ～Ⅱ層を中心に土師質土器28点，青磁２点，青白磁１点，染付１点の出土があった。

Ｒトレンチ出土遺物（Fig. 16～21）

二ノ段北Ｒトレンチからは総点数2,756点の遺物の出土があり，その内訳は細片も含めて，土師質土器2,294点，備前焼108点，瀬戸・美濃焼６点，瓦質土器２点，青磁89点，白磁31点，青白磁13点，染付112点，鉄製品37点，銅製品４点，石製品５点，瓦２点，古銭（銅銭）２点，その他京焼系陶器，骨片等51点である。土器器種の構成は土師質土器：小杯・小皿・杯・皿，備前焼：壺・甕・摺鉢，瀬戸焼：卸し皿・折縁鉢・鉢・天目茶碗，瓦質土器：火鉢，青磁：碗・皿・盤・香炉・摺鉢，青白磁：梅瓶（渦文），白磁：碗・皿，染付：碗・皿が出土している。この内，土師質土器はⅢ層773点，Ⅳ層1,160点と圧倒的にⅢ・Ⅳ層から集中して出土している。特に，Ⅳ層黒色土中より完形品が一括集中して出土している。

ここでは，Ｒトレンチより出土した遺物について種類・器種ごとに分類し，図示した遺物を中心に概要をまとめることにしたい。なお，分類外の製品については個々の特徴を説明していく。

(1) 土師質土器（Fig. 16・17）

土師質土器は，小杯・小皿・杯・皿の供膳具が中心に出土している。今回出土した供膳具の土師質土器は全てロクロ成形で，底部外面に回転糸切り痕が施される。回転方向は右回転であり，内面はナデ調整が施され，底部内面にロクロ目を残す。皿の中では，今回図示し得なかったが，手づくねの製品も微量みられる。

ここでは小杯・小皿・杯・皿について法量・形態・胎土等の特徴から分類を行った。小杯・小皿については器高で大きく分類し，底径指数（口径と底径の比率）及び口径指数（器高と口径の比率）で細分類をおこなった。杯については，胎土・色調の差異で大きく分類し，形態及び底径指数等で細分類した。また，杯については皿と明瞭に区別できないタイプもあるが，今回は杯として分類した。皿については底径が7.0㎝以上を測る大きいものを抽出し，口径指数で細分類を行った。

小杯（Fig. 16　37～41）

器高が1.7㎝以上を測り，底部から斜上外方へ直線的に立ち上がるもの。底径指数及び底部の形態によって以下に分類した。

Ａ類：底径指数67.2％前後を測り，底部の厚みが0.8㎝前後のもの。(37・38)

Ｂ類：底径指数68.1～84.3％を測り，底部が1.2㎝以上の分厚いもの。(39～41)

37は器高が2.1㎝と高く，口径指数36.2％を示し，器形がやや箱型を呈する。40は内外面ともナデ調整が施される。口縁端部の一部にタールの付着が認められる。41は底径指数が84.3％を示し，底部から直立気味に短く立ち上がる。

小皿（Fig.16　42～48）

器高が1.5㎝以下のもので，底部から斜上外方へ立ち上がるものと直立気味に短く立ち上がるタイプのものとが存在する。

A類：器高が1.5㎝以下のもので斜上外方へ直線的に立ち上がるもの。

A－1類（42・43）

底径が4.4～5.0㎝を測り，口径指数が22.1％前後を測るものである。底部中央がやや盛り上がる。

A－2類（44）

底径が5.0㎝内外を測り，口径指数が17.6％前後を測るものである。A－1に比べ胎土・色調に差異が認められる。44は灯明皿である。器壁は薄く，口縁部は尖り気味に仕上げる。体部外面及び口縁部内面の一部にタールが付着している。

B類：底径指数が83％以上を示し，直立気味に短く立ち上がるもの。緻密な胎土で，色調はにぶい橙色を呈する。（45～48）

B－1類（45・46）

底径が5.0㎝前後を測り，器高が1.4㎝以下のものである。46は器壁が分厚く，口縁部は丸味を帯びる。

B－2類（47・48）

底径が6.0㎝以上を測る法量の大きいものである。47・48は器高が1.7㎝を測る。47は上方へ直立気味に立ち上がり，口縁部は丸くおさめる。48は器壁が薄く，口縁部は尖り気味に仕上げる。

杯（Fig.16　49～62）

杯は，胎土・色調に差異が認められることから，ここで大きく分類し，形態及び底径指数等で細分類を行った。底径が6.2～7.7㎝を測り，器高が3.5㎝以上を測るもの。

A類：全て軟質で色調は橙色を呈す。回転ナデ調整を施し，底部切り離しは回転糸切り（右回転）による。

A－1類（49～56）

底径指数が56％以上，口径指数が27％以上を測り，底部から外上方へ直線的に立ち上がり，器形が箱型に近いものである。56は器高が4.7㎝を測り，底径指数が64％を示すA類の中でも大型のものである。

A－2類（57～59）

底径が7.0㎝以下と小さく，底径指数が50％前半代を示すものである。底部から斜上外方へ直線的に立ち上がる。

B類（60・61）：底部からやや段を持ちながら外上方へ内湾気味に立ち上がるものであり，胎土・色調がA類と差異が認められる。体部内面は丁寧なナデ調整を施し，底部内面はロクロ目を残す。底部切り離しは回転糸切り（右回転）による。

C類（62）：底径指数が37％を示し，底部から斜上外方に大きく立ち上がる。高速回転によるナデ調整により内外面ともロクロ目の段が均等である。底部は円柱造りによるもので底部切り離しは高

速回転により幅の狭い糸切り痕が残る。搬入品の可能性が強い。

皿（Fig. 16・17　63～77）

器高が3.4cm以下のものである。全て回転ナデ調整を施し，底部切り離しは回転糸切り（右回転）による。

Ａ－１類（63）

底径が6.2cmを測り，底径指数が50％と底径と口径の比率が２：１のものである。63は底部から斜上外方へ直線的に立ち上がり口縁端部は外側に面を成す。

Ａ－２類（64～66）

器高が2.6～2.9cmを測り，口径指数が20～22％前後を測るものである。64・65は底部中央が盛り上がり器壁が分厚い。66は器壁が薄く底部から外上方に立ち上がる。

Ａ－３類（67～71）

2.9～3.0cmを測り，口径指数が23％前後を測るものである。体部下半は強いヨコナデにより体部中位にやや段が生じている。

Ａ－４類（72～77）

器高が3.3cm以上を測り，口径指数が25％を測るものである。皿の中でも器高が高く杯と分類し得るものである。73・74は体部下半は強いヨコナデにより上半部はやや外反し形態的にはＡ－３類タイプに類似する。75～77は体部外面のロクロ目が底部から口縁部まで至る。75・76は底部中央が盛り上がり，ナデの単位が狭く均等である。

耳皿（Fig. 17　78～80）

78・79は器高2.0cm前後を測り，口縁両端を直立気味に折曲げる。ナデ調整を施し，底部は回転糸切り痕（右回転）が認められる。底部内面にロクロ目が残る。79は底部内面にタールの付着が認められる。80は器高2.9cm前後を測り，口縁両端を内側に大きく折曲げる。摩耗が著しく調整は不明。

(2)　国産陶器（Fig. 18　81～93）

Ｒトレンチでは，瀬戸・美濃焼，備前焼が出土しており，細片も含めて瀬戸・美濃焼21点，備前焼82点である。瀬戸・美濃焼では卸し皿，折縁鉢，大皿，天目茶椀，備前焼では，壺，甕，摺鉢など貯蔵具・調理具が中心に出土している。

瀬戸・美濃焼（81・82　84～86）

81は灰釉の卸し皿である。底部から斜上外方に立ち上がり，口縁部は端部を上方に引き上げる。内底部に１条の条線が認められる。釉は口縁端部外面から体部内面途中まで施釉されており，その他は露胎である。82は卸し皿の底部片である。内底部に格子状の条線が認められる。釉は内面施釉，外面は露胎である。84は天目茶椀であり，削り出し高台を有し，体部は斜上外方に直線的に立ち上がる。高台外端部は面取りされ内側は上げ底気味に浅く削り込まれている。ロクロ水挽き成形，回

転ナデ調整であり，釉は高台部周辺を除いて鉄釉が漬け掛けされている。さらに，高台部周辺は鉄釉が化粧掛けされている。85は灰釉の折縁鉢である。体部は斜上外方に直線的に立ち上がり口縁部に至る。口縁内側には稜を有し，口縁端部は丸味を帯びる。釉は内外面とも体部上半部に緑灰黄色を呈した灰釉が施され，体部下半は内外面とも露胎である。86は灰釉の鉢である。斜上外方へ立ち上がり，口縁端部は面を成す。浅黄色を呈した灰釉が全面に施釉されている。83は，褐釉壺の口縁である。頸部から内傾気味に立ち上がり，口縁部は外側に折れ，上端は水平な面を成す。口縁部内面は頸部との境に段を有す。産地は不明である。

備前焼（87～93）

87は壺の口縁部片である。口縁部は垂直に立ち上がり，端部は押さえつけた玉縁状を呈する。内面はヨコナデを施す。88は小壺片であり，平底の底部から内湾して立ち上がる。内外面はヨコナデを施す。底部は回転糸切り痕が認められる。89は甕の口縁部片である。内傾する体部から口縁部は直立する。口縁端部は外側に折り返し扁平な玉縁を作る。口縁部内外面はナデ調整，胴部内面はヨコ方向を基調とするハケ調整を施す。90は甕の底部片である。平底から上方に直立気味に立ち上がる。外面はタテ方向を基調とするハケ調整，内面はナデ調整を施す。91～93は摺鉢である。91の体部は外上方に立ち上がり口縁部が上方に拡張される。内面には7本単位の条線が認められ，条線は口縁直下から始まる。口縁部外面及び内面はナデ調整を施す。92は底部から外上方に立ち上がり，口縁部が上方に拡張される。内面には7本単位の条線が認められる。条線は口縁直下から始まり放射状に配されるが片口部下半は弧状に施される。内外面ともナデ調整。93の体部は外上方に立ち上がり，口縁部は上方に拡張される。櫛状工具による6本単位の条線が認められる。条線は下方から口縁端部まで施される。内外面ともナデ調整を施す。

(3) **輸入陶磁器**（Fig. 19・20）

Ｒトレンチからは，青磁・白磁・青白磁・染付が出土している。青磁は碗が最も多くＢ－Ⅱ－ｂ類，Ｂ－Ⅳ類・Ｃ類・Ｄ類（上田分類）が主体で出土している。白磁は切り高台の皿（Ｄ類）（森田分類）など皿が主体で出土しているがその量は他に比べ僅少である。青白磁は梅瓶が2個体出土している。染付はB_2Ⅶ群，Ｃ群の皿が主体で出土しているが，112点中，86点がⅠ～Ⅱ層からの出土である。

青磁（Fig. 19　94～113）

94～97は，無文（Ｄ類）の碗である。内湾する体部から口縁部は外反する。オリーブ灰色を呈した釉が全面施釉される。95は透明感のある釉が施釉されており貫入が認められる。胎土は黒っぽい灰色を呈する。98は碗（Ｃ類）であり口縁部外面に片切彫りによる雷文帯を巡らす。オリーブ灰色を呈した釉が比較的厚く全面施釉される。99は外面に草花風の文様が施される。100は碗の底部片である。釉は全体的に厚く全面施釉されており，高台畳付及び外底部の一部に釉を削り取った痕跡が認められる。内面見込みには草花風の文様が施される。101は碗（Ｂ－Ⅱ－ｂ類）の底部片である。

体部外面に幅の広い片切彫りの連弁文が見られる。断面逆台形状の高台から体部は内湾気味に立ち上がる。高台外面下部は斜めの面取りが認められる。釉は畳付を越えて高台内面途中までかかり畳付の釉は削り取らない。外底は無釉である。102は碗の底部片であり断面逆台形状の高台から体部は内湾気味に立ち上がる。内面見込みは1重の界線が巡りその内側には菊花のスタンプが施される。外面は草花風の文様が認められる。釉は比較的厚く全面施釉されており外底部の釉は削り取る。RトレンチⅣ層とB区丘陵南尾根部のVトレンチⅡ層出土の断片が接合した。103～105は細線連弁文（B－Ⅳ類）の碗である。外面は細線と剣頭の単位にずれが生じている細線連弁文が施されている。釉調はくすんだオリーブ色と透明感のあるオリーブ色を呈するものがある。105は体部内面下半部に草花文の一部が認められる。107は稜花皿である。腰折れ気味の体部から口縁部は大きく外反する。口縁端部は抉りがはいり，口縁部内面には波状の櫛描が3条施される。108は盤である。口縁部は外折し上方に肥厚する。体部内面には深い丸彫の連弁が施される。109・110は摺鉢である。109は内湾気味の体部から口縁部は外反する。釉調は淡いオリーブ色を呈し外面全体に施釉が認められる。体部には2条の界線が認められる。内面は口縁直下（0.7～1.0cm）まで施釉が至り，体部内面は露体である。内面露胎部はタテ方向を基調とする浅い摺目が全体にわたり認められる。摺目の幅は0.7～1.0mm前後を測る。110は底部であり，ベタ高台を呈し中央部に向かって上げ底になっている。釉は高台外面及び体部下半部は全面施釉されており色調は淡いオリーブ色を呈する。外底部は露胎である。内面は露胎であり，荒いハケ状工具による摺目が認められる。体部はタテ方向を基調としており底部で斜位方向の摺目と交わる。109・110は同一個体の可能性がある。111～113は香炉である。111は直立する頸部から口縁部は外折し上方に肥厚する。頸部から口縁部にかけて外面に把手が付く。釉は口縁部内面まで施釉され頸部以下は露胎である。112は腰部から直立気味に立ち上がる。外面は全面施釉，内面下半は露胎である。腰部を巡る弱い凸帯には粘土玉を張り付け鋲を模した突起が配されており，体部外面には環状の把手を模した突起が配される。113の底部には脚が付く。底部から直立気味に立ち上がり，外面は全面施釉，内面は露胎である。腰部を巡る弱い凸帯には粘土玉を張り付け鋲を模した突起が配される。112と同一個体の可能性がある。

白磁（Fig. 20　114～116）

114は切り高台の皿である。高台にはアーチ状の抉り込みが4ヵ所認められる。釉は高台周辺及び体部下半は露胎でありその他は施釉されている。アーチ状高台の凸部には重ね焼きの際の釉の付着が認められる。また内面見込みには4ヵ所の目痕が認められる。115は碗である。断面逆台形状の高台から内湾気味に立ち上がる。胎土は軟質で色調は黒っぽい灰色を呈する。高台外面下部は斜めの面取りが行われ，高台内外底部には右回転の削り出しの痕が認められる。釉調は青みがかった灰色を呈し，外面腰部から高台周辺は露胎している。116は皿であり，断面正方形の高台から内湾気味に立ち上がる。内面及び外面腰部まで透明感のある乳白色を呈した釉が施釉され，底部は露胎である。胎土は淡黄色を呈し，やや軟質である。釉は薄く目の細かい貫入が入る。

青白磁（Fig. 20　117・118）

117・118は梅瓶である。腰部下半に2条の界線が巡り，体部にはそれぞれ3条，4条を基調とする渦文が施される。釉は全体的に薄く施釉され，内面は回転ナデ調整が施される。内面には鉄錆の付着が認められる。

その他（天目茶碗）（119）

119は天目茶碗である。体部は丸味を持ち口縁部は屈折し端部は細く斜め上方に突き出す。釉は全面にわたり黒褐色を呈した鉄釉が施されるが口縁端部は赤褐色を呈する。体部内外面には単位の細かい筋状の条線が認められる。建窯産の禾目天目茶碗ではないかと思われる。

青花（染付）（Fig. 20　120～132）

120～122は碗である。121は畳付から高台内は露胎，高台端部は面取りし釉を削り取る。内底には羯磨文が描かれる。呉須の釉調はくすんだ藍色を呈し，高台周辺には砂が溶着している。122は断面三角形の高台から内湾して立ち上がる。高台脇及び内面見込みにはやや線の細い2重界線が巡る。呉須の釉調はくすんだ藍色を呈する。123～129は皿である。123は内湾気味の体部から口縁部は外反する。体部外面には密に装飾化された唐草文，内面にはアラベスク文様が施される。口縁端部内外面にはそれぞれ2条の界線が巡る。呉須の色調は淡い藍色を呈する。B_1群の皿である。124は碁笥底を呈するC群の皿である。底部から内湾気味に立ち上がる。畳付部は釉を削り取る。体部外面は密に装飾化された唐草文，内面はアラベスク文様が施される。呉須の釉調は外面の唐草は薄く，内面は濃い藍色を呈する。125～127はB_2Ⅶ群の皿である。内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。口縁部内外面に1重の界線，見込は2重の界線が巡る。体部外面には牡丹唐草が施され，呉須の釉調はくすんだ藍色で柄は不鮮明である。126は高台脇に2重界線体部外面は唐草文が施される。口縁端部内外面に1重界線が巡り，内面見込みに2重の界線その内側には玉取獅子が施される。高台端部には砂の付着が認められる。127は高台端部の釉を削り取る。128は，高台畳付及び高台内面は釉を削り取る。外面は無文であり，内底全体に捻花風の便化した牡丹文が描かれている。呉須の色調は濃い藍色を呈す。129は高台脇に1重の太めの界線，腰部に2重の界線を巡らす。内面見込みには2重界線その内側には人物文が描かれる。高台端部には砂の付着が認められる。130は大皿であり，やや碁笥底を呈した底部から外方に立ち上がり，腰部で斜上外方に折れる。高台外面及び面取りされている畳付は釉を削り取る。見込みは2重界線が巡りその内側にはアラベスク文様が施される。呉須の釉調は濃い藍色を呈する。131も大皿であり，碁笥底気味の高台から斜上外方に立ち上がり，腰部で折れ口縁部は大きく外反する。口唇部は口錆釉が認められる。内面見込み部は2重界線が巡り高台端部は釉を削り取っている。132は盤であり，高台脇に1重，内面見込みに2重の界線が巡る。高台端部の釉は削り取る。

(4)　瓦質土器（Fig. 21　133）

瓦質土器は，133の火鉢が出土している。133は内湾する体部を口縁部で内側に折曲げ，上端面を水平にする。外面口縁部直下に2条の凸帯に挟まれた型押し渦文が巡る。口縁端部内面は火を受け

土師質化している。

(5) **金属製品**（Fig. 21　134～145）

134は小柄の差し込み部であると考えられ，鞘本体は欠損している。長軸2.1㎝，幅1.1㎝，残高0.7㎝を測り，中央小柄差し込み部は方形筒状に穿孔している。穿孔部下段には，刻みの入った縁金が施されている。穿孔部は長軸1.0㎝，短軸0.25㎝を測り，重量は1.9ｇである。135は銅製の鋲であり，表面に歯朶をモチーフにした文様が認められる。全長1.65㎝，全幅1.5㎝，重量2.2ｇを測る。136は飾り金具であり，中央部に直径0.6㎝の円形の穿孔が認められる。表面は透彫による草花風の文様が彫金されており，裏面は止め具の痕跡が２ヵ所認められる。全幅2.2㎝，全厚0.3㎝，重量は2.2ｇを測る。刀の目貫の飾り金具ではないかと思われる。137・138は銅製の笄である。137の胴は長さ5.6㎝，幅0.7㎝の楕円形の穿孔が認められる。竿から穂先にかけては湾曲する。全長18.8㎝，全幅1.2㎝，全厚0.1㎝を測り，重量は10.8ｇである。138は胴に楕円形を呈した浮彫が認められるが，穿孔はしていない。竿から穂先にかけてはやや湾曲する。全長15.65㎝，全幅1.0㎝，全厚0.2㎝を測り，重量は11.6ｇである。139は銅製で，中央部楕円形，両側端に方形の穿孔が認められ，中央部はやや湾曲する。表面は魚子地に彫金され鎧に付く障子の板ではないかと思われる。全長4.25㎝，全幅3.7㎝，全厚0.15㎝，重量11.1ｇを測る。140は冠型を呈し，中央部はやや湾曲する。中央上位に孔径0.2㎝の円形の穿孔が認められる。表面には毛彫が認められる。全長3.3㎝，全幅4.1㎝，全厚0.1㎝，重量7.5ｇを測る。141は切羽である。中央に三角形状を呈した穿孔が認められる。全長3.8㎝，全幅1.9㎝，全厚0.1㎝，孔径2.5㎝，重量は２ｇを測る。142は木の葉型を呈した銅製品である。全長3.95㎝，全幅0.8㎝，全厚0.05㎝を測り，重量は0.8ｇである。

(6) **石製品**（Fig. 21　143～145）

143は石臼である。分画の詳細は細片のため不明であるが，溝間が広く４条以上の溝を存する。溝は丸溝である。全長19.5㎝，全幅14.0㎝，全厚9.1㎝を測り，重量は2.5㎏である。石質は砂岩である。144は端部を磨き平らにしており，内面は幅0.9㎝の区画線の内側に条線状の彫り込みがみられる。他は欠損しており詳細は不明である。全長6.15㎝，全幅6.5㎝，全厚2.7㎝，重量は1.2㎏を測り，石質は赤色頁岩である。145は砥石である。側面と表面に擦痕が認められる。全長8.5㎝，全幅7.6㎝，全厚3.0㎝を測り，重量は251ｇである。

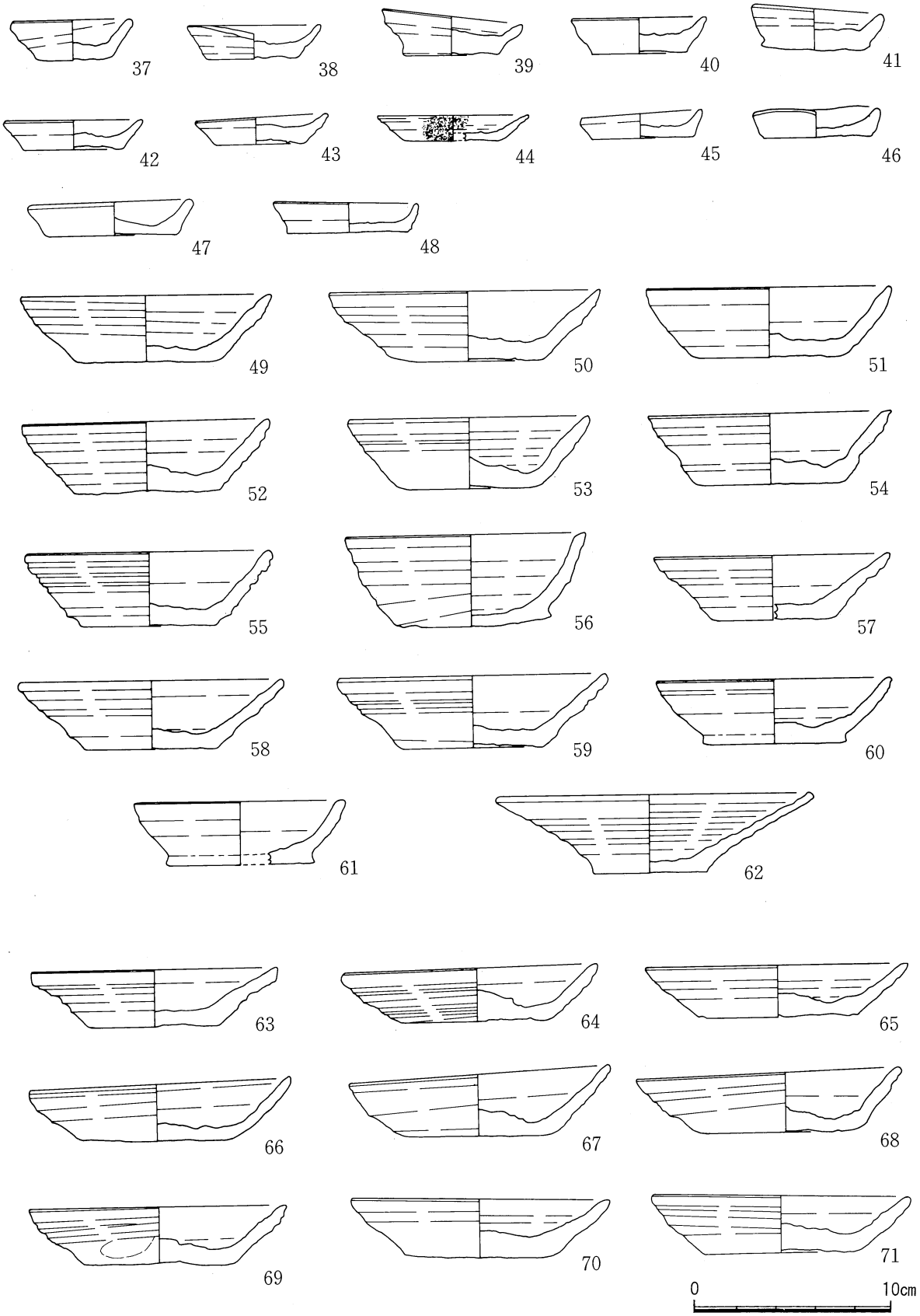


Fig. 16　Rトレンチ出土遺物（土師質土器）

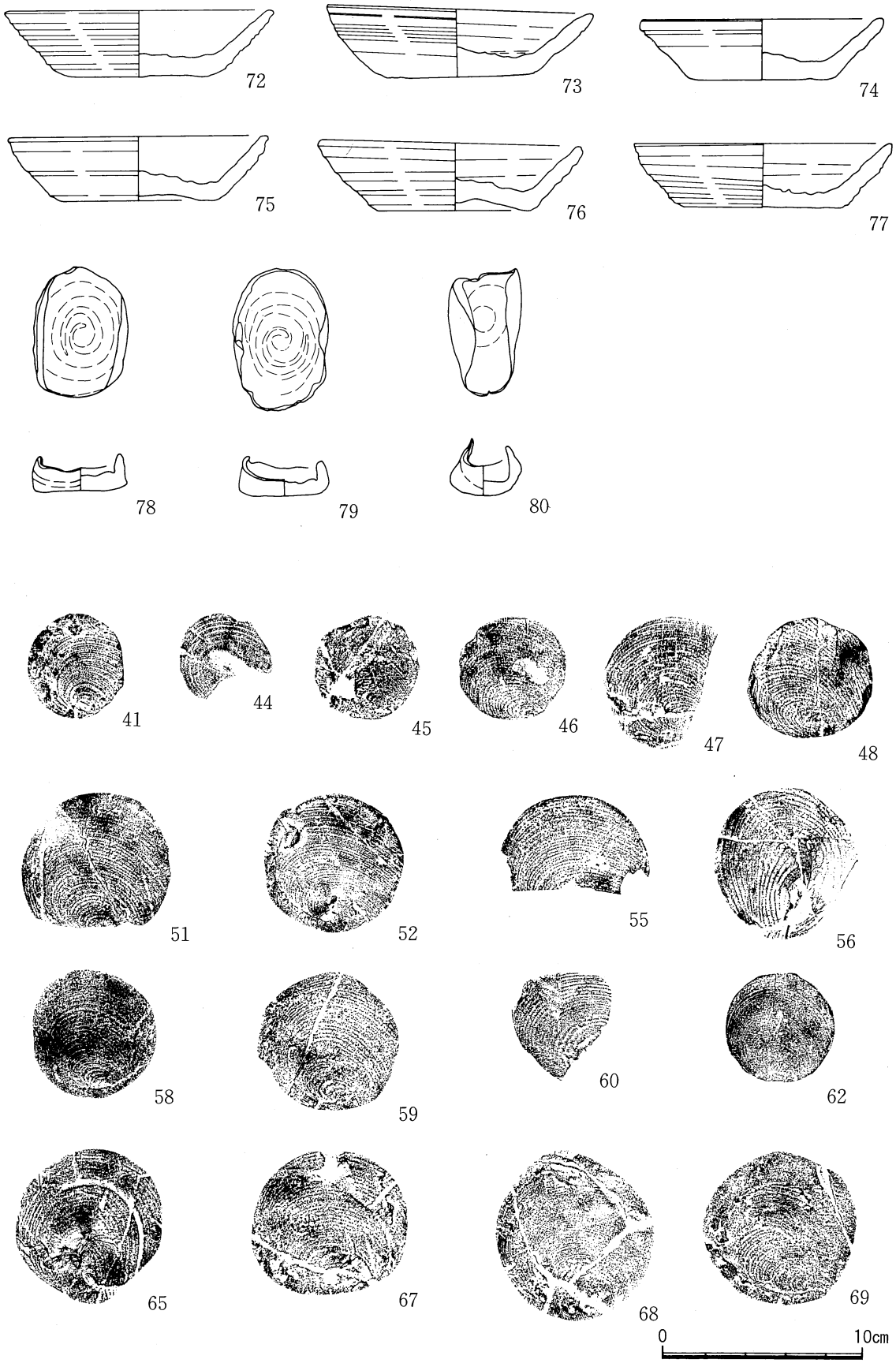


Fig. 17　Rトレンチ出土遺物・土師質土器底部拓本

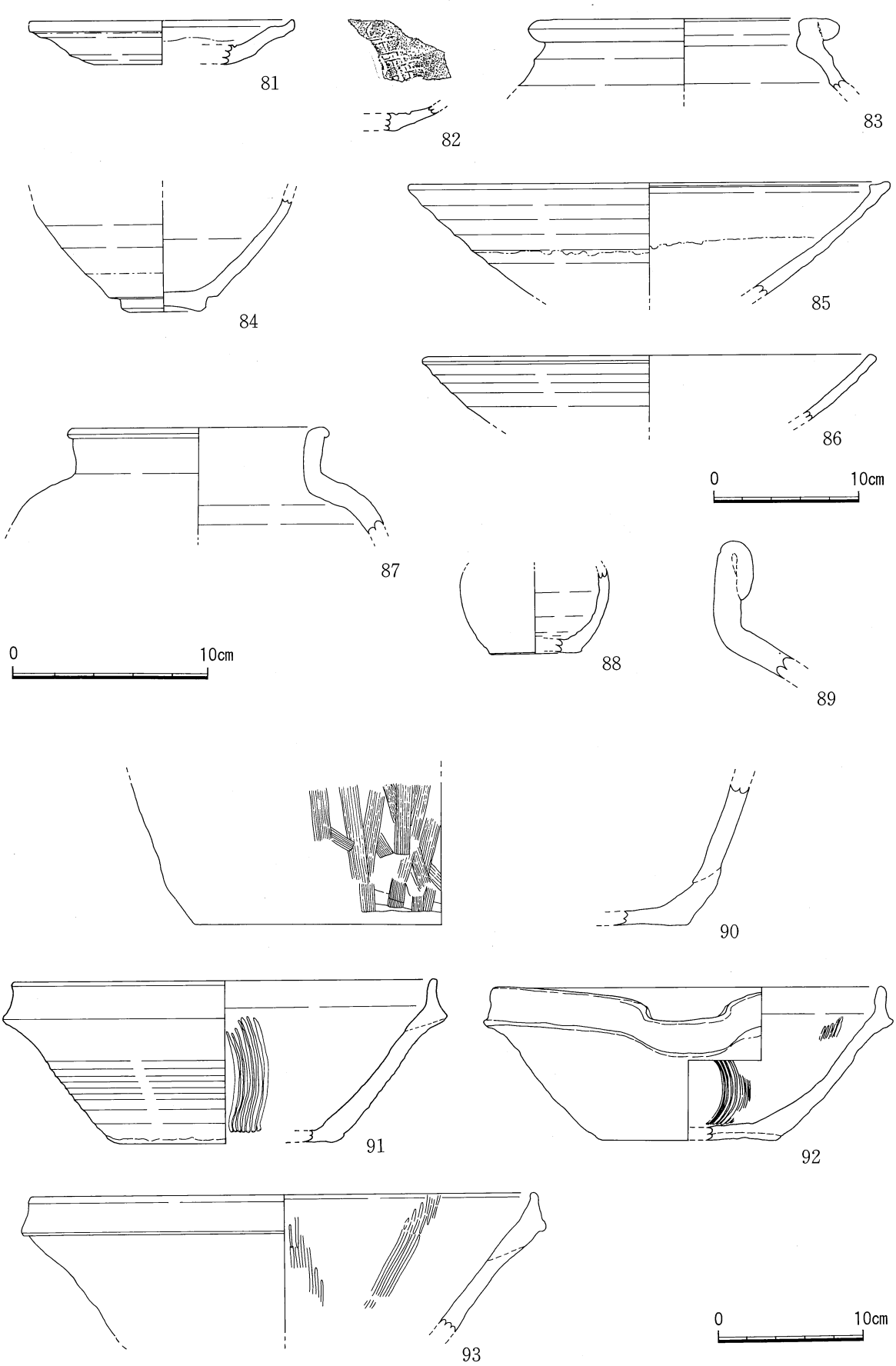


Fig. 18　Rトレンチ出土遺物（瀬戸・備前）

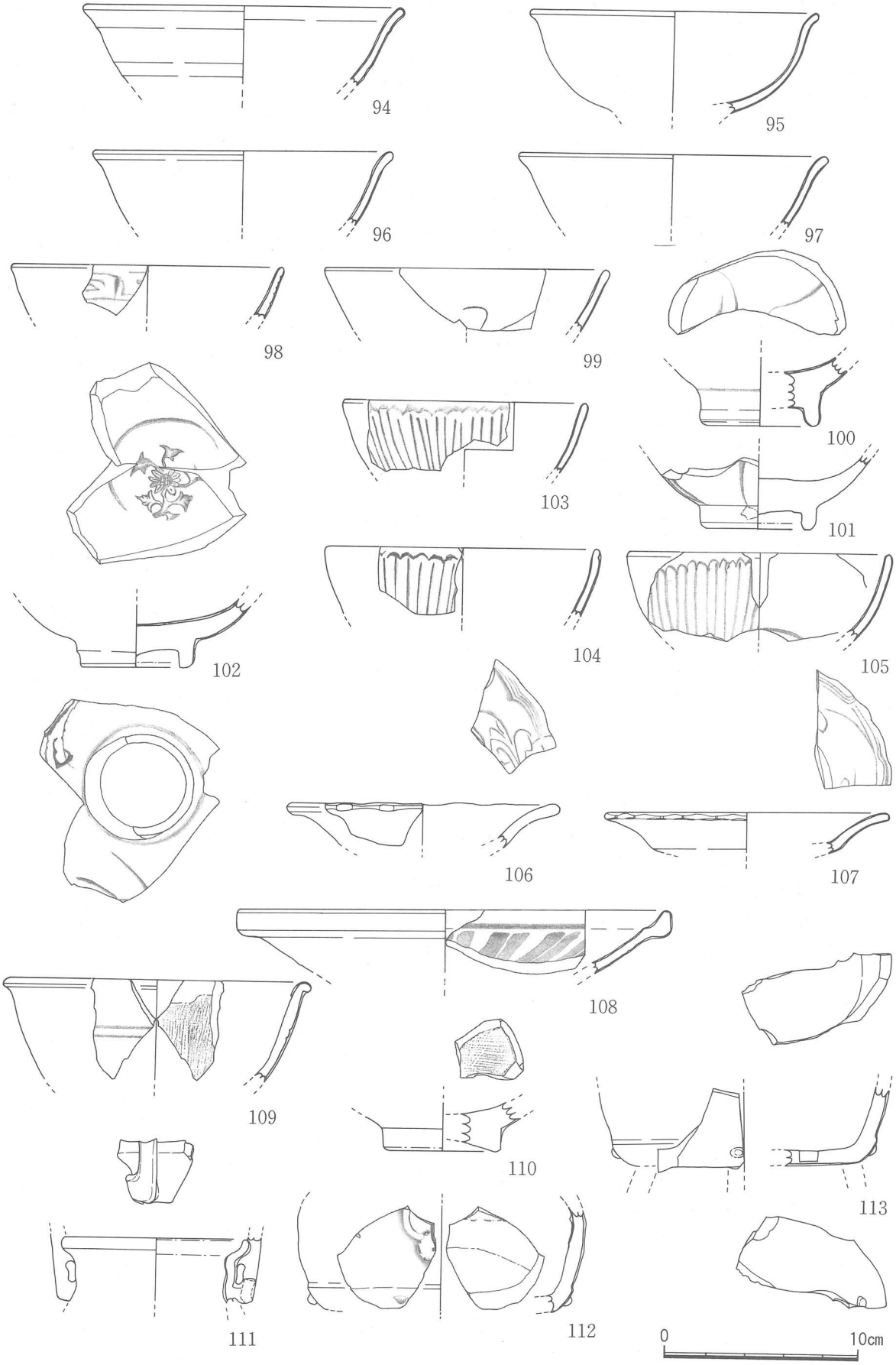


Fig. 19　Rトレンチ出土遺物（青磁）

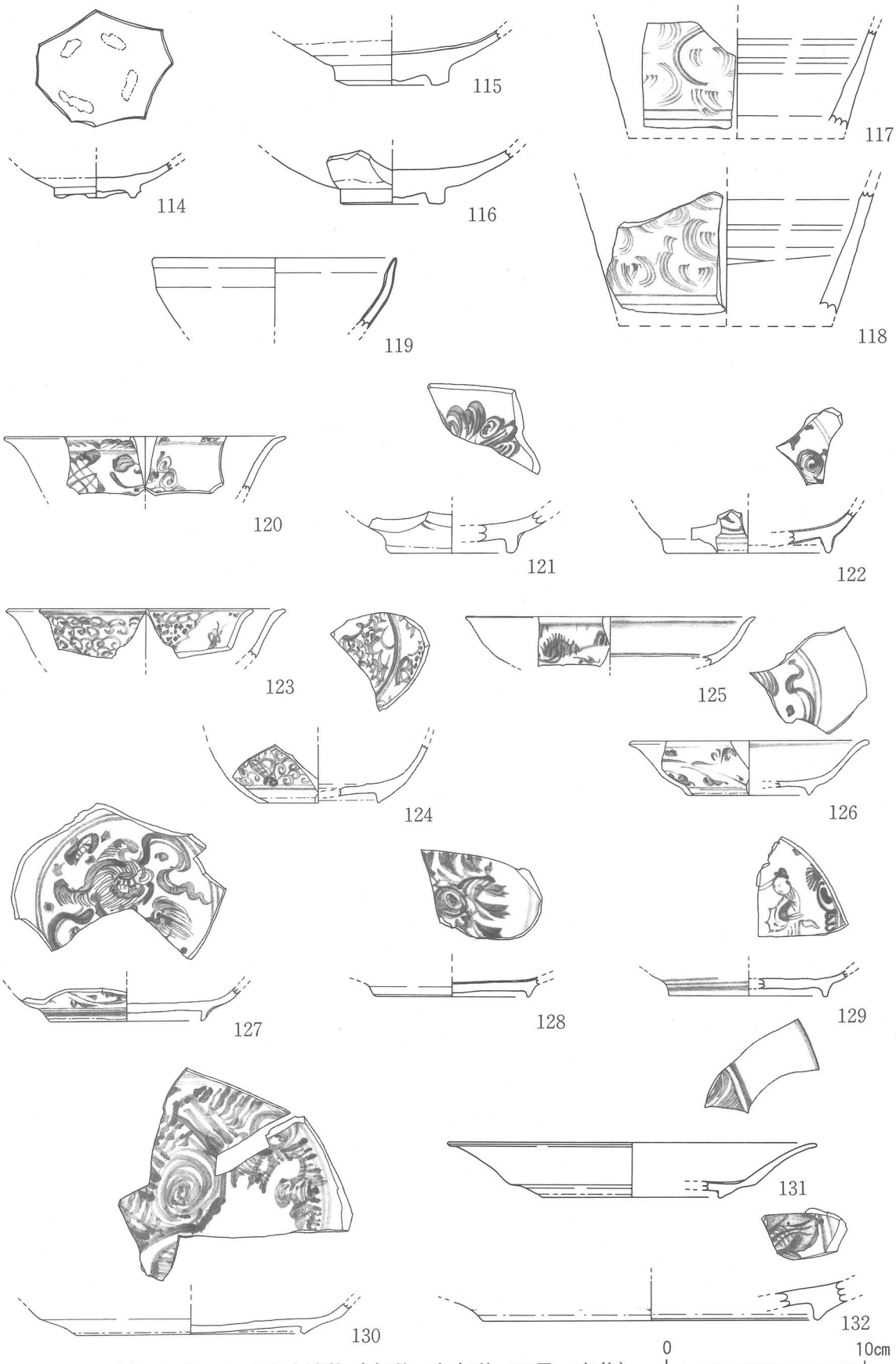


Fig. 20　Rトレンチ出土遺物（白磁・青白磁・天目・青花）

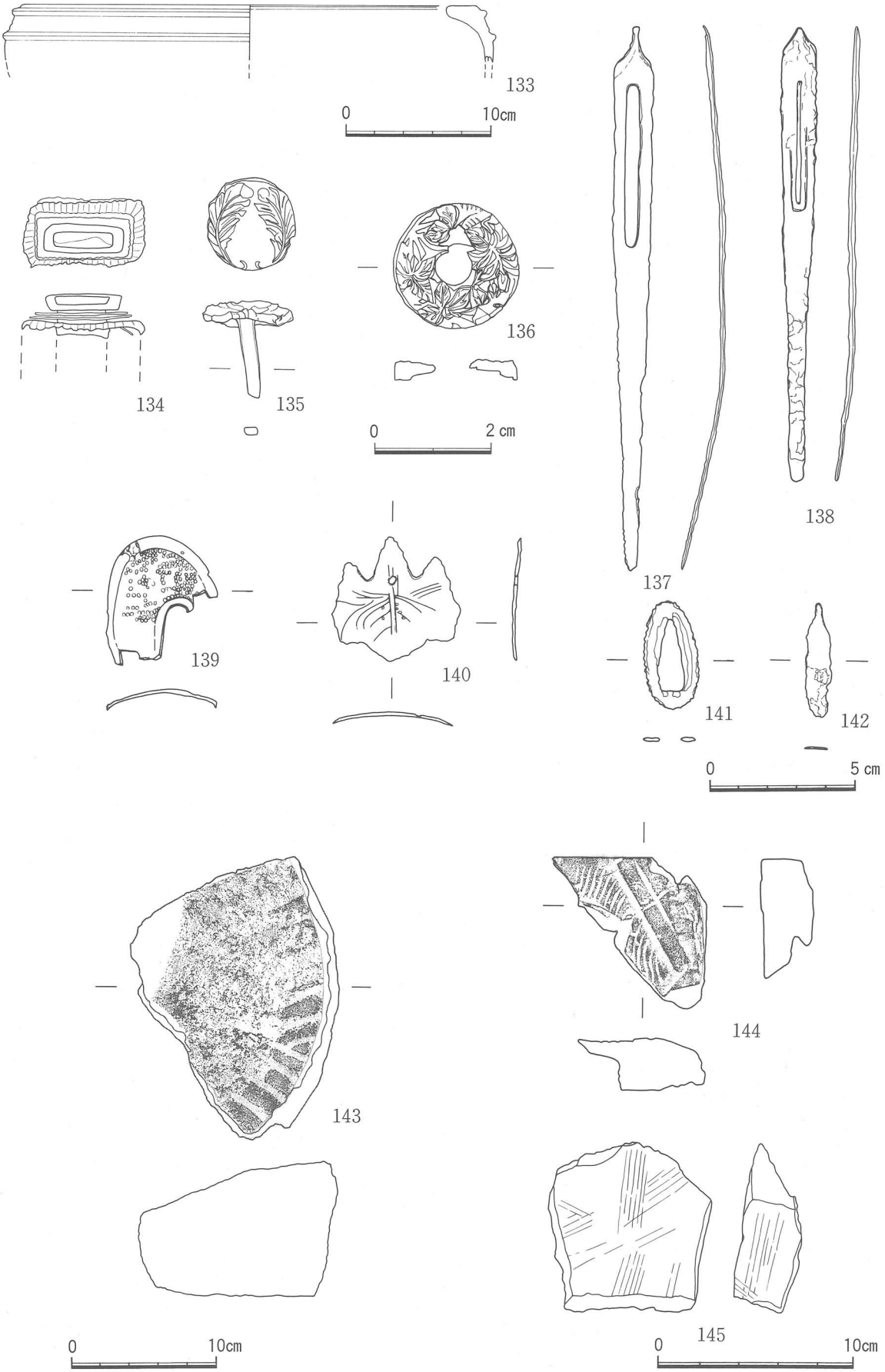


Fig. 21　Rトレンチ出土遺物（瓦質土器・銅製品・石製品）

二ノ段南

(6) Ｆトレンチ

二ノ段南に設定した調査区である。平成６年度調査でＴ字型に設定したＦトレンチの調査区を拡張し，ほぼ二ノ段南全域にわたり調査区を拡張した。調査面積は74㎡である。二ノ段西から巡る帯曲輪は北側で東に向かって標高を増し二ノ段南に至る。二ノ段南は標高189.30ｍを測り，二ノ段西より2.7ｍほど高く，詰ノ段との比高差3.6ｍを測る。丘陵南尾根部の方向に大きく張り出している。

一次調査Ｆトレンチ，及び今次調査区の北端（詰ノ段側）は表土直下で地山岩盤層が認められるが，南半分は岩盤を0.72ｍほどＬ字型に削りフラットに成形している。南半分の堆積状況は表土層下に黄褐色瓦礫層（Ⅱ層）があり，その下に暗黄褐色土（Ⅲ層）が堆積している。さらに，その下層には直径20～30㎝大の円礫の集石が認められる。この集石は調査区北部から中央部にかけて敷き詰められており整地層確認範囲検出面（スクリーントーンで示した範囲）の南検出面上において土師質土器の杯が集中して出土した。調査区北東部から調査区中央部北端（スクリーントーンで示した範囲）にかけては幅40～80㎝，長さ4.48ｍにわたり直径0.2～0.3㎝大の玉砂利と黄褐色瓦礫土で固く盤築状に整地された部分が認められる。Ａ－Ｂの断面でみると地山岩盤をＬ字型に削った縁辺部に直径40㎝大の角礫を並べており，この石列から集石までの間に整地層が認められる。この整地層中より丸瓦片（Fig. 23　164）が出土している。さらに，整地層下，地山岩盤直上には直径40㎝前後を測る円礫及び角礫の礎石が存在する。

調査区中央部より西側にかけては，直径50㎝前後の角礫を２，３段積み上げた石積み遺構を検出した。石積みは調査区中央部から調査区西端にかけ詰ノ段裾部に沿って続いており，調査区中央部から二ノ段南南端にかけては二重の構造（ａ－ｂ・ｃ－ｄ）になっている。長さはそれぞれａ－ｂ間6.62ｍ，ｃ－ｄ間5.26ｍを測る。石材は砂岩，泥岩の割石でありチャートも若干認められる。石積みは地山岩盤の上に直接積まれており石積みの裏込めは認められない。ｅ－ｆは，二ノ段西との境界部にあたるが石積みも乱雑で石材も不均等で崩落している。一部，岩盤が露頭しておりプランは不明確である。

Ｆトレンチ出土遺物

二ノ段南Ｆトレンチからは総点数178点の遺物の出土があり，二ノ段西及び北のトレンチに比べその出土量は小量である。内訳は，細片も含め土師質土器101点，備前焼23点，青磁17点，白磁３点，青白磁１点，染付13点，瓦１点，銅製品１点，鉄製品16点，銅銭２点である。土器器種の構成は，土師質土器：小杯・杯，備前焼：摺鉢，青磁：碗・盤，白磁：皿，青白磁：梅瓶，染付：皿が出土している。これらの遺物はⅢ層（暗黄褐色土）からの出土がほとんどであり，特に，集石上面（Ⅳ層上面）において土師質土器が集中して出土している。

ここでは，Ｆトレンチより出土した遺物について種類・器種ごとに分類し，図示した遺物を中心に概要をまとめることにしたい。なお，分類外の製品については個々の特徴を説明していく。

(1) 土師質土器（Fig. 23　146～156）

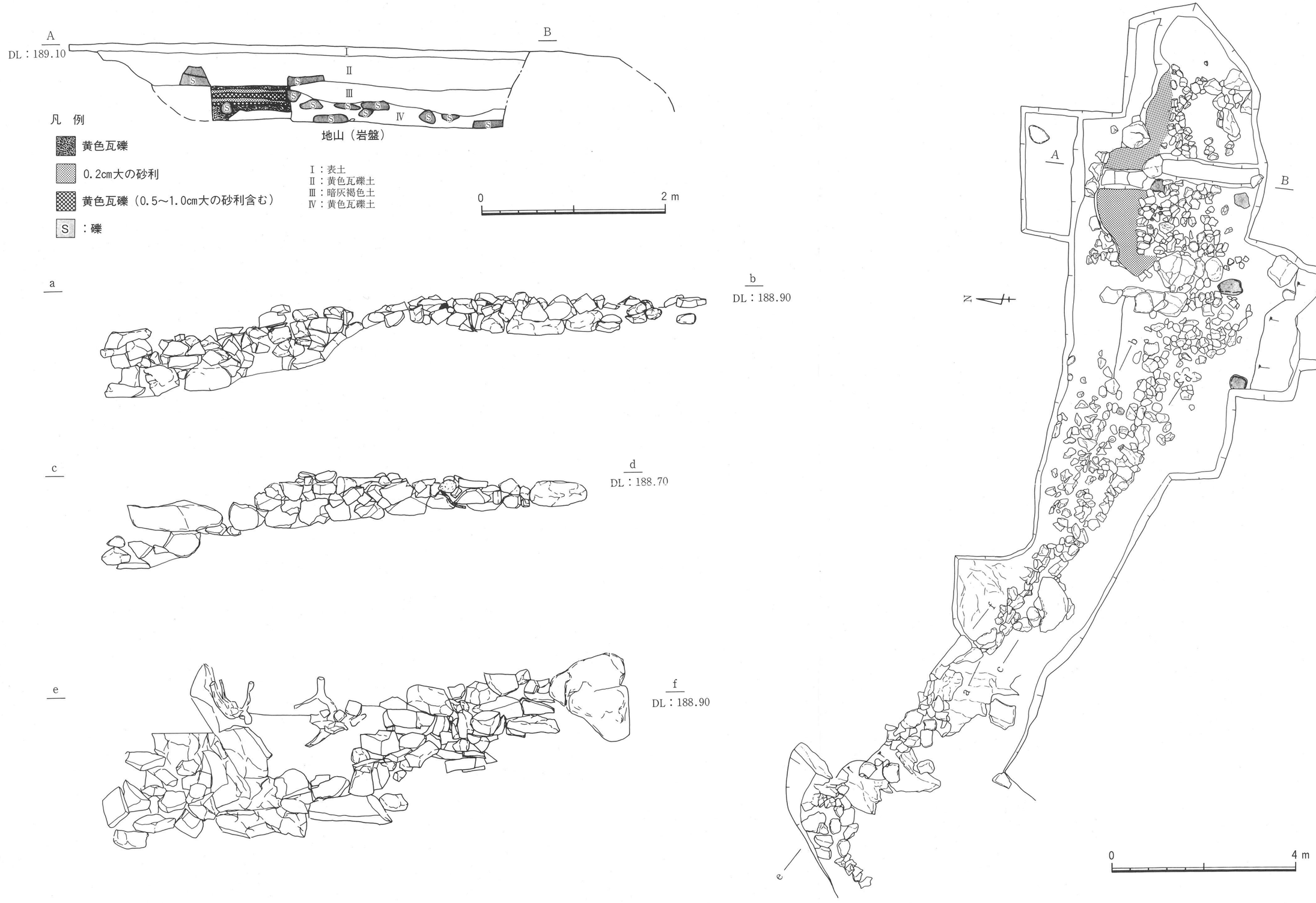


Fig. 22　Ｆトレンチ遺構図・バンクセクション・石積み部側面図

土師質土器は，小杯・小皿・杯の供膳具が中心に出土している。今回出土した供膳具の土師質土器は全てロクロ成形で，底部外面に回転糸切り痕が施される。回転方向は右回転であり，内面はナデ調整が施され，底部内面にロクロ目を残す。

ここでは小杯・小皿・杯について法量・形態・胎土等の特徴から分類を行った。小杯・小皿については器高で大きく分類し，底径指数（口径と底径の比率）で細分類をおこなった。杯については，胎土・色調の差異で大きく分類し，形態及び底径指数等で細分類した。また，杯については皿と明瞭に区別できないタイプもあるが，今回は杯として分類した。

小杯（Fig. 23　146・147）

器高が1.9㎝以上を測り，斜上外方に直線的に立ち上がるものである。底径指数が70％代を示すもの（A－1類）と，90％代を示すもの（A－2類）とが存在する。146（A－1類）は底部にやや段を持ちながら斜上外方に直線的に立ち上がる。147（A－2類）は外方に張り出すベタから外上方へ直線的に立ち上がり，口縁端部は尖り気味に仕上げる。体部内面にはナデ調整により段が残る。

小皿（Fig. 23　148）

148は器高が1.4㎝を測り，底径指数が88％を測る。形態的には小杯のA－2類（147）に類似するが，ここでは小皿として分類した。外方に張り出すベタ底から外上方に直線的に立ち上がり，口縁端部は尖り気味に仕上げる。

杯（Fig. 23　149～156）

胎土・色調に違いが認められるものを大きく分類し，器高及び，底径指数等で細分類した。

A類：全て胎土が軟質で橙色を呈し，回転ナデ調整，底部切り離しは回転糸切り（右回転）によるもの。

A－1類（149～151）

器高が2.9～3.1㎝と低く，底径指数が50％中半代を示すものである。149・150は体部内面にナデ調整による段が残る。151は体部下半が強いナデにより段が生じており，体部はやや内湾気味に立ち上がる。

A－2類（152・153）

器高が3.4～3.7㎝を測り，底径指数が50％以下を示し，他に比べ，やや体部が開くタイプのものである。

A－3類（154・155）

器高が4.0㎝以上を測るものである。ベタ底から斜上外方に直線的に立ち上がるタイプのものと（154），体部下半にやや段を持ちながら立ち上がるタイプのもの（155）とがある。155は底部内面にタールの付着が認められる。

B類：A類に比べ，胎土が緻密でにぶい黄橙色を呈するもの。回転ナデ調整，底部切り離しは回

転糸切り（右回転）による。

Ｂ－１類（156）

156は，ベタ底から外上方に内湾して立ち上がり口縁端部は丸味を帯びる。器壁が薄い。

(2) **国産陶器**（Fig. 23　157）

157は，備前焼（Ⅳ期）の摺鉢である。斜上外方に直線的に立ち上がり，口縁端部はやや，上下に拡張され内傾する面を成す。口縁内面下に８条の櫛描条線が認められる。

(3) **輸入陶磁器**

青磁（Fig. 23　158～160）

158はＤ類の碗である。内湾気味に立ち上がり口縁部は外反する。内外面は無文であり，内面見込みに１重の界線が巡る。釉調は透明感が強く，淡いオリーブ灰色を呈する。釉は全体的に薄く内外面に目の細かい貫入が入る。159・160は盤である。159は口縁部は外折し端部を上方に拡張する。体部内面に丸ノミ状工具による連弁が施される。160は逆台形状の高台から斜上外方に立ち上がる。釉は高台内外底部にまで施釉されており，外底部は輪状に釉を削りとる。内面見込み及び高台脇は１重の界線が巡る。

青白磁（Fig. 23　161）

161は梅瓶である。外面に３条を基調とする渦文が施される。釉は全体的に薄く施されており，内面はロクロ痕が施される。

染付（Fig. 23　162）

162はＣ群の皿である。碁笥底の底部から内湾気味に立ち上がる。体部外面は渦状に装飾化された唐草文，内面はアラベスク文様が描かれる。内面見込み及び高台脇に２重の界線が巡る。高台外面は釉を削り取る。呉須の色調は濃い藍色を呈す。

(4) **金属製品**（Fig. 23　163）

163は銅製の鏃と思われる。有茎で，断面半楕円形を呈した扁平定角形であり，先端部を欠損する。全長4.3㎝，全幅0.7㎝，全厚0.3㎝を測る。

(5) **瓦**（Fig. 23　164）

164は丸瓦片である。全厚2.4㎝を測り，側面は1.2㎝，胴部凹面側縁は1.6㎝と内に幅広の面取りが見られる。面取りは玉縁端面まで行われ，凹面玉縁面では幅2.0㎝の面取りが施される。凹面には目の細かい布目痕，ループ状の吊り紐痕が認められる。凸面の一部に縄叩き痕とナデ調整が施されている。

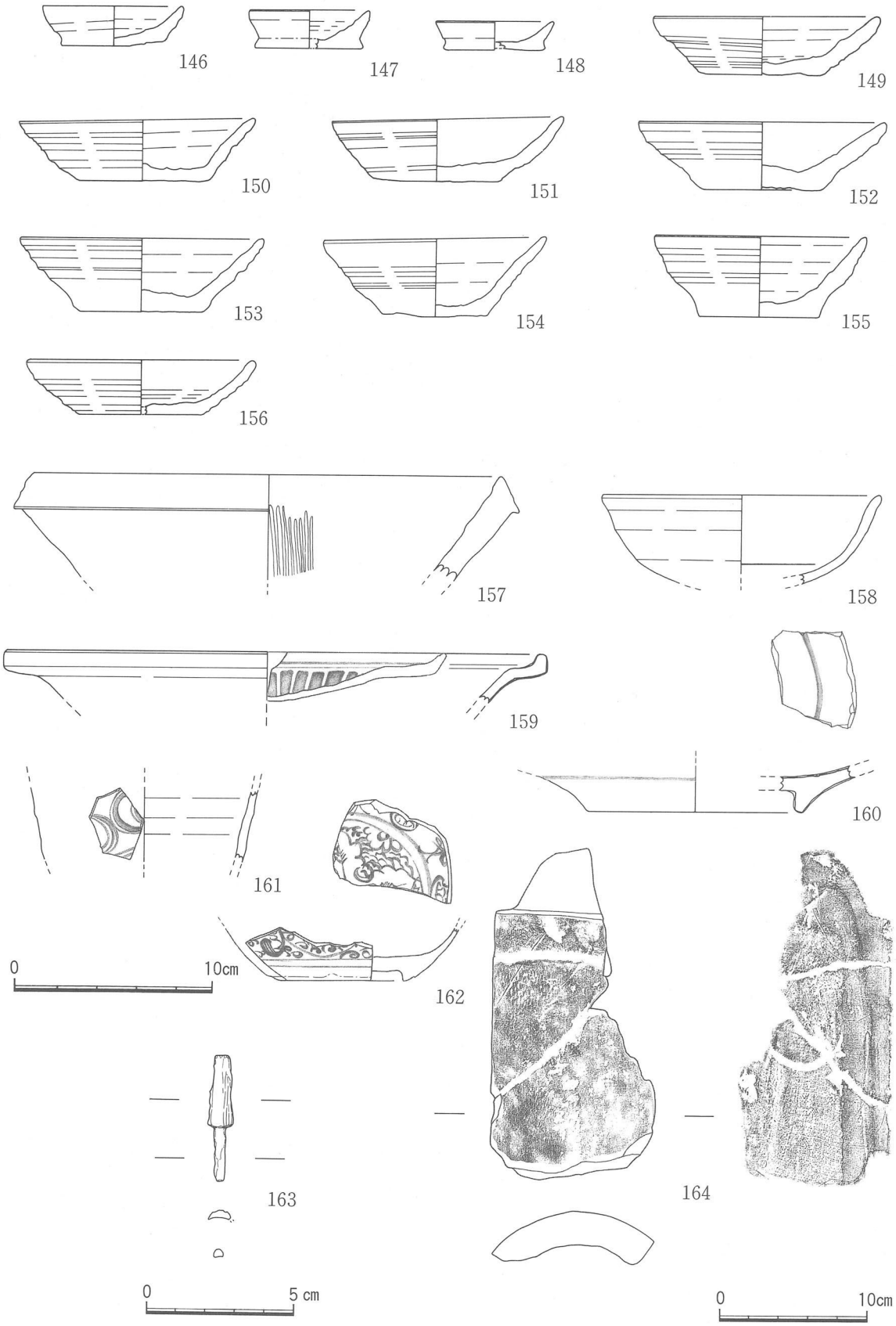
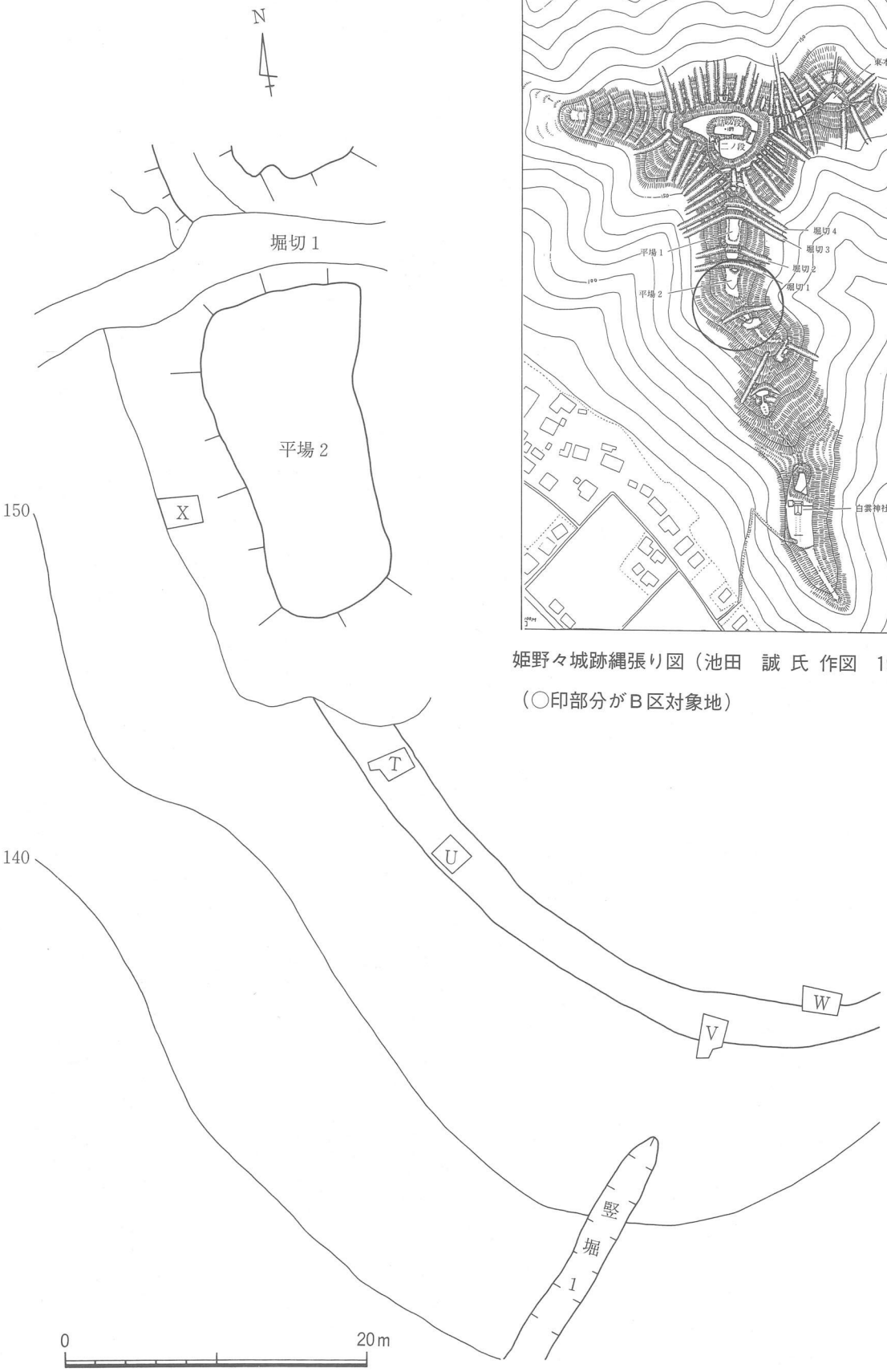
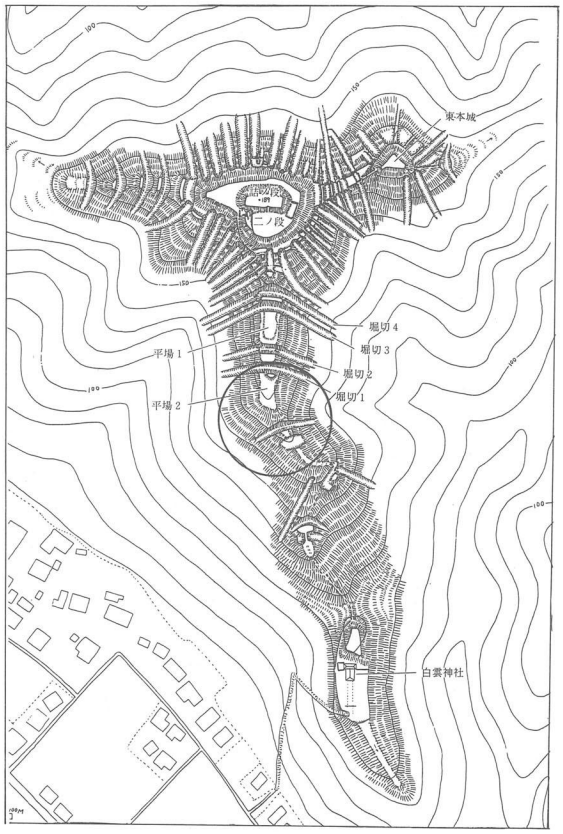


Fig. 23　Ｆトレンチ出土遺物（土師質土器・備前・青磁・青白磁・青花・銅製品・瓦）





姫野々城跡縄張り図（池田　誠 氏 作図　1994を転載）

（○印部分がＢ区対象地）

Fig. 24　Ｂ区トレンチ設定図

2．丘陵南尾根部（B区）

B区は当事業計画による遊歩道設置ルートの丘陵南尾根部に設定した調査区である。今回の調査は平成6年度に調査を実施した平場2より，南東部に延びる尾根上を中心にトレンチを設定し発掘調査を行った。

丘陵南尾根部は，姫野々城跡の縄張りの中でも最大規模を測る4本の連続堀切（堀切1，2・3，4）があり，その堀切間には2つの平場（平場1・2）が存在する。さらに，尾根は平場2から南東方向に変化し，比高差4m下から痩せ尾根が50mほど続き南東端部は比高差10mの急崖になり，標高140m前後の南西斜面及び，南東斜面部には南限の竪堀が存在する。

今次調査は，試掘トレンチを痩せ尾根部に4箇所（T～Wトレンチ），平場2南西斜面に1箇所（Xトレンチ）を設定し発掘調査を実施した。その結果，Tトレンチでは南西斜面にむけて竪堀の基端部と思われる堀状の落ち込みを確認した。また，Vトレンチでは土師質土器を中心とする多量の遺物の出土があり，さらに，平場2南西斜面のXトレンチでは斜面をL字型にカットした通路状の平坦面を確認した。Uトレンチについては遺構は検出されず，遺物の出土も皆無である。Wトレンチでは遺構は検出されなかったが遺物が若干出土している。しかし，細片でその出土量も僅少であり今回は図示し得なかった。以下に，遺構・遺物を検出したトレンチについてその概要を述べる。

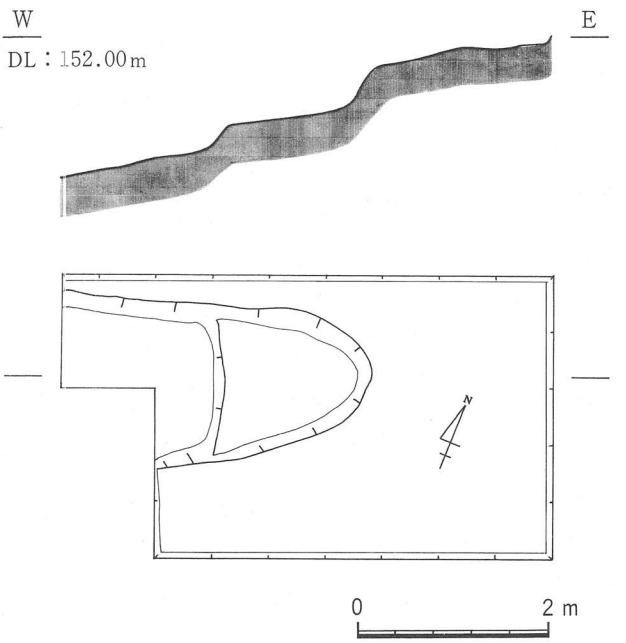


Fig. 25　Tトレンチ遺構図

(1)　Tトレンチ（Fig. 25）

平場2の南東下部，痩せ尾根上に設定した2.6×1.5mのトレンチである。尾根の変化点にあたり，鞍部が堀切状にやや凹んでおり，縄張り図では堀切として捉えられている地点であり，今回は鞍部が堀切として掘込まれているのか確認を行った。現況で南西斜面側一帯は檜の植林になっており，村有地の境界になっている尾根上の木々の間

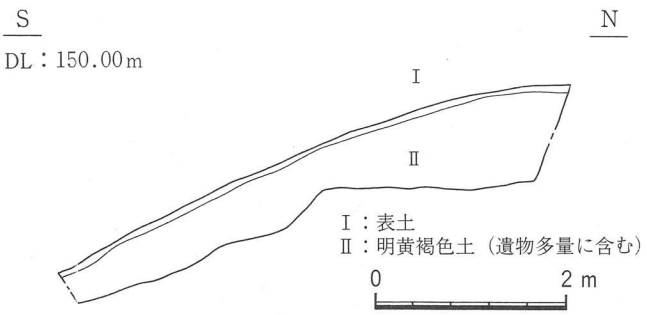


Fig. 26　Vトレンチセクション図

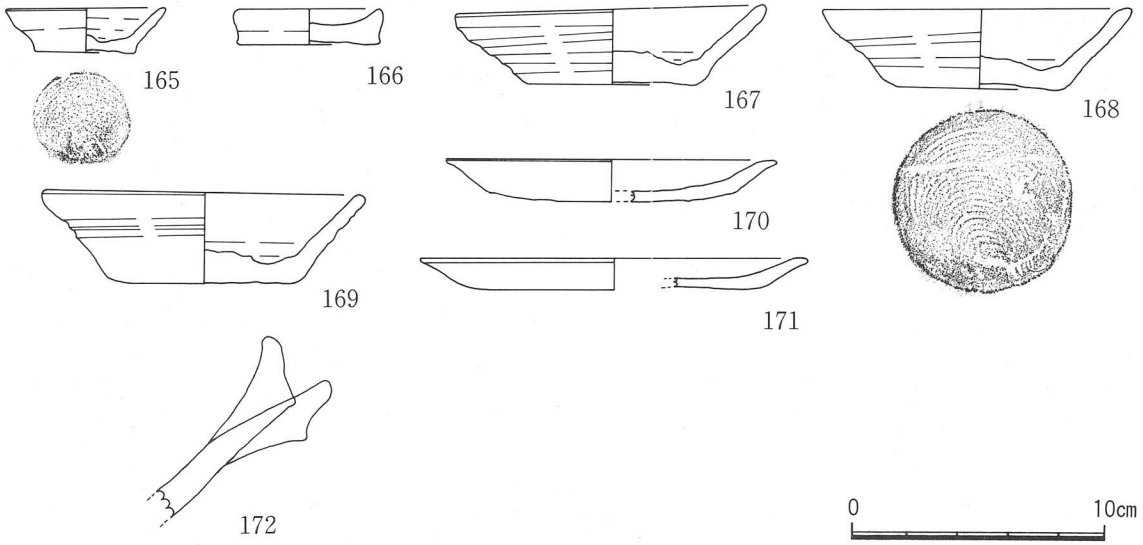


Fig. 27　Vトレンチ出土遺物（土師質土器・備前）

にトレンチを設定せざるを得なかった。Tトレンチ地点での標高は151.991mである。

鞍部は表土直下12cmで地山の岩盤である。トレンチ中央部から南西斜面側にかけて堀状の落ち込みプランを確認した。プランはU字型を呈し，検出面は地山岩盤上で標高151.733mを測る。落ち込みの基端部は長軸78cm，幅70cmを測るテラス状を呈しており，テラスから南西斜面下の方に向かってさらに落ち込む。埋土は暗黄色土であり，トレンチ内からの遺物出土は皆無であった。

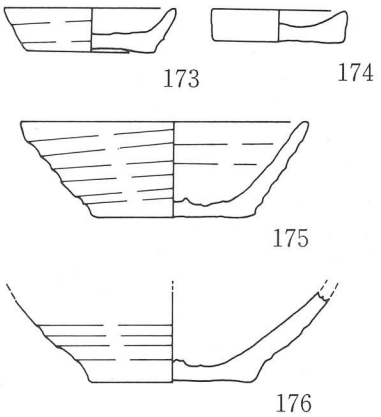


Fig. 28　Xトレンチ出土遺物

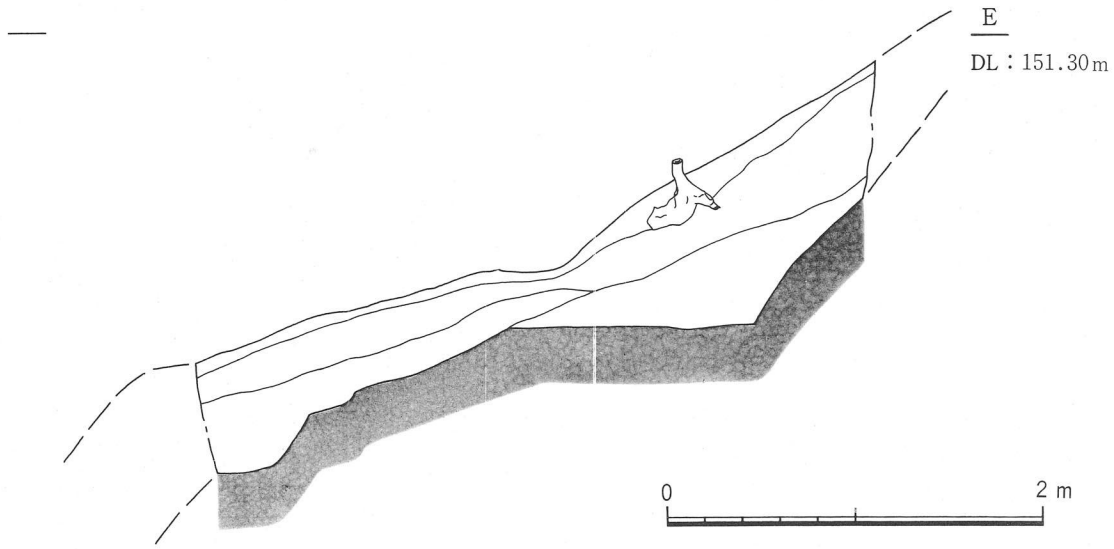


Fig. 29　Xトレンチセクション図（北壁）

(2) Ｖトレンチ（Fig. 26・27）

痩せ尾根部南端に設定した2.7×1.8ｍのトレンチである。Ｖトレンチ設定地点での標高は，149.744ｍを測り，尾根は南に向かって傾斜角46°の急崖になる。南下部との比高差は10ｍを測る。現況では，南東斜面側は植林で急峻であり，南東及び東斜面側は自然林が生い茂り，南西側に比べやや緩斜面である。当初，地表面に土師質土器の細片が散在しており，土器片が集中的に表採されている地点にトレンチを設定した。特に，南西斜面側に多く見られたが，植林と村有地外に該るため尾根上部の調査に止まった。

表土層下には，多量の土器片を含む明黄褐色土が厚さ20～40㎝堆積しており，土師質土器を中心とする遺物の出土が見られた。（Fig. 26）出土した土師質土器は小杯・小皿・杯・皿であり，ロクロ成形，底部切り離しは回転糸切り（右回転）によるものである。皿については手づくねの製品も見られる。165は小杯である。体部中位にやや段を持ち，直線的に立ち上がる。底部内面にロクロ目を残す。166は小皿である。ベタ底から直立し，短く立ち上がる。167～169は杯である。いずれも底部は分厚く，斜上外方へ直線的に立ち上がる。体部下半は強いナデが施され，上位はやや外側に開く。ロクロ成形，内面はナデ調整が施され，底部内面にロクロ目を残す。器高は3.0～3.6㎝前後を測り，底形は6.7～7.7㎝，口径は12㎝前後を測る。170・171は手づくねの皿である。やや丸味を帯びた平底から口縁部は外反する。171は器高が1.3㎝を測り，170に比べやや器高が低く，口縁端部をやや水平に引き出す。172は備前焼（Ⅳ期）の摺鉢口縁部片である。口縁部は上下に拡張され，端部は丸味を帯びる。体部内面に６条の櫛描条線が認められる。他に青磁の碗底部片が出土しているが，Ａ区（主郭部分）の二ノ段Ｒトレンチ出土の青磁碗（Fig. 19　102）と接合した。

(3) Ｘトレンチ

平場２の南西斜面，標高150ｍを測る腰曲輪状に開けた平坦面に設定した２×４ｍのトレンチである。平場２との比高差は5.3ｍを測る。基本層序は第Ⅰ層：表土，Ⅱ層：黄色瓦礫層，Ⅲ層：暗黄褐色瓦礫層であり，地表面下42㎝，標高149.70ｍで地山岩盤を逆Ｌ字状に削り取った通路状の平坦面を確認した。この地山岩盤の平坦面の幅は1.3ｍを測り，ほぼフラットであり，地山は南西斜面に向かって傾斜角26°で下る。

遺物は第Ⅱ層及びⅢ層で出土している。出土遺物は土師質土器の細片が中心であり，出土状況からみて平場２からの流れ込みであると考えられる。今回，図示した４点（173～176）は全て土師質土器であり，Ⅲ層からの出土である。173は小杯であり，ベタ底から外上方に直線的に立ち上がる。ロクロ成形，回転ナデ調整であり，底部内面にロクロ目を残す。174は小皿であり，ベタ底から直立し，短く立ち上がる。175・176は杯である。175は比較的薄い底部から，外上方に直線的に立ち上がる。ロクロ成形，回転ナデ調整であり，底部内面にロクロ目を残す。176は底部からやや段を持ちながら斜上外方に立ち上がる。

Tab. 1　出土土器法量表１

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外 / 内(断)	郭	出土TR	層位	備考
1	土師質土器	杯	12.4	3.5	4.6		浅黄橙 10YR 8/4 黄橙 〃 8/6	詰	A-1トレンチ	pit9 埋土	搬入品？
2	〃	〃	—	(3.1)	4.2		橙 7.5YR 7/6 浅黄橙 〃 8/6	〃	〃	〃	
3	〃	〃	—	(1.8)	4.2		にぶい黄橙 10YR 7/4 浅黄橙 〃 8/4	〃	〃	〃	搬入品？
4	青花(染付)	Ⅲ (B Ⅶ)	12.0	(2.3)	—	—	灰白 5GY 8/1 〃 N 8/1	〃	〃	Ⅰ	
5	〃	〃	14.3	(2.3)	—	—	灰色 5GY 8/1 〃 N 8/1	〃	〃	pit12 埋土	
6	青磁	碗	—	(3.0)	4.9	1.5	オリーブ灰 10Y 6/2 〃	〃	北斜面表採		
7	備前焼	甕	—	(4.9)	—		にぶい赤褐色 5YR 5/3 〃 2.5YR 4/3	〃	A-2トレンチ	Ⅱ	
8	青花(染付)	Ⅲ (C)	9.8	(2.0)	—	—	淡黄 5Y 8/3	〃	〃	Ⅰ	
9	〃	Ⅲ (E)	—	(1.1)	8.1	0.7	灰白 5Y 8/1	〃	〃	Ⅰ	
10	〃	Ⅲ	—	(1.2)	8.4	0.7	灰白 5Y 8/1	〃	A-3トレンチ	Ⅰ	
11	土師質土器	小Ⅲ	6.6	1.7	5.6		橙 5YR 7/8 〃	〃	〃	Ⅱ	
12	〃	杯	—	(2.2)	8.0		橙 7.5YR 7/6 〃	〃	〃	Ⅱ	
13	〃	小杯 (A-1)	6.4	1.7	4.4		橙 5YR 7/6 〃 7.5YR 7/6	二ノ西	Eトレンチ北	Ⅳ	
14	〃	〃 (A-2)	7.2	2.1	4.1		明赤褐 5YR 5/8 橙 5YR 6/8	〃	〃	〃	
15	〃	小Ⅲ (A)	5.8	1.4	4.3		橙 5YR 6/8 〃 〃	〃	Eトレンチ南	Ⅲ	
16	〃	〃 (A)	6.1	1.4	4.5		橙 5YR 7/8 〃 5YR 6/6	〃	〃	Ⅱ	
17	〃	杯 (A-1)	10.8	3.2	4.5		橙 5YR 7/8 〃 5YR 6/8	〃	〃	Ⅲ	
18	〃	〃 (A-1)	12.1	3.2	5.2		橙 7.5YR 7/6 〃 〃	〃	〃	〃	
19	〃	〃 (A-1)	11.2	3.4	5.2		橙 5YR 6/8 〃 5YR 7/8	〃	〃	〃	
20	〃	〃 (A-1)	11.5	3.5	4.8		橙 5YR 6/8 〃 〃	〃	〃	〃	
21	〃	〃 (A-1)	11.5	3.2	6.1		黄橙 10YR 8/8 〃 7.5YR 7/8	〃	〃	〃	
22	〃	〃 (A-2)	12.1	3.6	6.3		橙 5YR 7/8 黄橙 7.5YR 7/8	〃	〃	〃	
23	〃	〃 (A-3)	10.7	2.9	6.0		橙 5YR 6/8 〃 〃	〃	〃	Ⅱ	
24	〃	〃 (A-3)	11.4	3.6	6.4		橙 5YR 7/8 〃 〃	〃	Eトレンチ北	Ⅳ	
25	〃	〃 (A-3)	10.4	3.3	5.9		黄橙 7.5YR 7/8 橙 5YR 7/6	〃	Eトレンチ南	Ⅱ	
26	〃	〃 (A-3)	10.6	3.7	6.0		橙 5YR 6/8 〃 5YR 7/6	〃	〃	〃	

Tab. 2　出土土器法量表 2

挿図番号	種　別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外 / 内(断)	郭	出土TR	層位	備　考
27	土師質土器	杯 (A-4)	12.4	2.7	5.7		黄橙 7.5YR 7/8 橙　7.5YR 7/6	二ノ西	Eトレンチ北	Ⅲ	
28	〃	〃 (B-1)	11.4	3.2	5.9		にぶい黄橙 10YR 〃　　〃	〃	Eトレンチ南	Ⅱ	
29	〃	〃 (B-2)	11.3	2.9	6.2		にぶい橙 7.5YR 7/4 〃　　〃	〃	〃	〃	
30	〃	Ⅲ (A)	12.5	3.1	8.0		橙 5YR 6/8 〃　〃	〃	〃	Ⅲ	
31	〃	Ⅲ (A)	12.3	2.8	7.4		橙 5YR	〃	〃	〃	
32	青磁	〃	11.8	(2.3)	—		オリーブ灰 10Y 5/2 灰白　　10Y 8/1	〃	Eトレンチ北	Ⅰ	
33	〃	大Ⅲ(盤)	—	(2.2)	11.4		オリーブ灰 6/2 灰白　　8/1	〃	〃	Ⅳ	
34	青花(染付)	Ⅲ (C)	—	(2.3)	5.2	0.8	明青灰 灰白 5GY 8/1	二ノ西	Eトレンチ南	Ⅰ	
35	〃	Ⅲ (B_2Ⅶ)	—	1.6	6.1	0.5	明青灰 灰白 5GY 8/1	〃	〃	〃	
37	土師質土器	小杯 (A)	5.8	2.1	3.9		橙 5YR 7/6 〃　〃	二ノ北	Rトレンチ	Ⅲ	
38	〃	〃 (A)	6.7	1.7	4.5		橙 5YR 7/8 〃　〃	〃	R-3トレンチ	〃	
39	〃	〃 (B)	6.9	2.0	4.7		橙 5YR 6/8 〃　〃	〃	R-2トレンチ	〃	
40	〃	〃 (B)	6.7	1.7	4.8		橙 5YR 7/8 〃　〃	〃	R-3トレンチ	Ⅴ	
41	〃	〃 (B)	6.4	2.1	5.4		橙　5YR 6/6 〃 7.5YR 6/6	〃	Rトレンチ	Ⅳ	
42	〃	小Ⅲ (A-1)	6.8	1.5	5.0		橙 5YR 7/8 〃　〃	〃	〃	Ⅲ	
43	〃	〃 (A-1)	6.6	1.4	4.4		橙 5YR 7/6 〃　〃	〃	R-3トレンチ	Ⅴ	
44	〃	〃 (A-2)	7.4	1.3	5.1		灰黄褐　　10YR 5/2 にぶい黄橙 10YR 7/3	〃	Rトレンチ	〃	体部外面及び口縁部内面の一部にタール付着
45	〃	〃 (B-1)	6.0	1.3	5.0		にぶい橙 7.5YR 6/4 〃　　〃	〃	R-2トレンチ	Ⅵ	
46	〃	〃 (B-1)	6.3	1.4	5.4		にぶい橙 7.5YR 〃　　〃	〃	R-3トレンチ	Ⅲ	
47	〃	〃 (B-2)	8.0	1.7	6.6		にぶい黄橙 10YR 7/2 〃　　〃	〃	Rトレンチ	〃	
48	〃	〃 (B-2)	7.1	1.7	6.1		橙色 7.5YR 7/6 〃　　〃	〃	R-2トレンチ	〃	
49	〃	杯 (A-1)	12.4	3.5	7.3		橙 7.5YR 7/6 〃　　〃	〃	〃	〃	
50	〃	〃 (A-1)	13.6	3.6	7.7		にぶい黄橙 10YR 7/4 〃　　〃	〃	〃	〃	
51	〃	〃 (A-1)	12.2	3.6	7.0		橙 5YR 6/6 〃 5YR 7/8	〃	〃	Ⅳ	外面のロクロ目が均等である

Tab. 3　出土土器法量表 3

挿図番号	種　別	器種	法量（cm）				色調	外	郭	出土ＴＲ	層位	備　考
			口径	器高	底径	高台高		内(断)				
52	土師質土器	杯 (A-1)	12.4	3.7	7.4		橙 7.5YR 7/6 〃　〃		二ノ北	R-2トレンチ	Ⅲ	
53	〃	〃 (A-1)	12.0	3.6	7.0		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	Ⅳ	
54	〃	〃 (A-1)	12.3	3.6	7.6		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	〃	
55	〃	〃 (A-1)	12.2	3.8	6.7		橙　5YR 7/8 〃 7.5YR 7/6		〃	R-3トレンチ	〃	
56	〃	〃 (A-1)	12.1	4.7	7.8		にぶい橙 7.5YR 7/4 〃　〃		〃	Rトレンチ	〃	
57	〃	〃 (A-2)	11.8	3.3	6.2		橙 7.5YR 7/6 〃　〃		〃	〃		
58	〃	〃 (A-2)	13.2	3.5	6.6		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	R-2トレンチ Rトレンチ	Ⅲ	
59	〃	〃 (A-2)	13.4	3.7	7.0		橙 5YR 7/8 〃 5YR 7/6		〃	Rトレンチ		
60	〃	〃 (B)	11.8	3.3	7.2		にぶい黄橙 10YR 6/3 橙　5YR 7/6		〃	R-2トレンチ		
61	〃	〃 (B)	10.4	3.2	7.5		にぶい橙 7.5YR 〃　〃		〃	〃	Ⅲ	
62	〃	〃	15.4	4.0	5.7		浅黄橙 10YR 8/4 〃　〃		〃	〃	Ⅳ	
63	〃	Ⅲ (A-1)	12.4	2.9	6.2		橙 7.5YR 6/6 〃 7.5YR 7/6		〃	Rトレンチ		
64	〃	〃 (A-2)	12.7	2.7	7.5		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	R-2トレンチ	Ⅲ	
65	〃	〃 (A-2)	13.0	2.6	8.2		橙 5YR 6/8 〃 5YR 7/8		〃	〃	Ⅳ	
66	〃	〃 (A-2)	13.1	2.9	7.4		黄橙 7.5YR 8/8 橙　5YR 6/8		〃	〃	Ⅲ	
67	〃	〃 (A-3)	13.0	3.1	7.3		にぶい橙 7.5YR 7/4 〃　〃		〃	〃	Ⅲ	
68	〃	〃 (A-3)	13.2	3.1	7.9		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	R-3トレンチ	〃	
69	〃	〃 (A-3)	12.9	3.0	7.5		橙　5YR 7/8 〃 7.5YR 7/6		〃	R-2トレンチ	Ⅳ	
70	〃	〃 (A-3)	12.9	3.0	7.5		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	Ⅲ	
71	〃	〃 (A-3)	12.6	2.9	7.7		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	〃	
72	〃	〃 (A-4)	13.0	3.3	6.4		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	Rトレンチ		
73	〃	〃 (A-4)	13.2	3.4	7.5		橙 5YR 7/6 〃　〃		〃	R-2トレンチ	Ⅲ	
74	〃	〃 (A-4)	12.0	3.0	7.2		橙 7.5YR 6/6 〃　〃		〃	〃	〃	
75	〃	〃 (A-4)	12.8	3.2	7.4		橙 7.5YR 7/6 〃　〃		〃	R-3トレンチ		
76	〃	〃 (A-4)	12.8	3.4	7.6		橙 5YR 6/8 橙 5YR 7/8		〃	R-2トレンチ	Ⅳ	

Tab. 4　出土土器法量表 4

挿図番号	種　別	器種	法量（cm）				色調	外 内(断)	郭	出土ＴＲ	層位	備　考
			口径	器高	底径	高台高						
77	土師質土器	皿 (A-4)	12.7	3.2	7.7		にぶい橙 5YR 6/4 〃　〃		二ノ北	Rトレンチ	Ⅳ	
78	〃	耳皿	4.0～ 6.5	1.9	4.6～ 4.7		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	Rトレンチ	Ⅲ	
79	〃	〃	3.7～ 7.0	2.0	3.9～ 5.3		にぶい橙 7.5YR 6/4		〃	〃	Ⅲ	
80	〃	〃	－	2.9	－		橙 5YR 6/6 〃		〃	R-3トレンチ	Ⅳ	
81	瀬戸・美濃焼	卸し皿	13.2	2.3	6.8		淡黄 2.5Y 7/3 淡黄 2.5Y 8/3		〃	〃	Ⅱ	灰釉
82	〃	〃	－	(1.2)	－		灰白 5Y 7/1 灰白 5Y 8/1		〃	Rトレンチ	Ⅴ	〃
83	産地？不明	壺	15.8	(3.8)			黒褐色　10YR 3/2 灰オリーブ 5Y 6/2		〃	R-3トレンチ	Ⅲ	褐釉
84	〃	天目茶椀	－	(5.8)	4.3		黒　10R 1.7/1 灰白 2.5Y 8/2		〃	〃	Ⅲ	鉄釉
85	〃	折縁鉢	32.6	(7.8)	－		灰オリーブ 7.5Y 5/3 浅黄　2.5Y 7/4		〃	〃	Ⅲ	灰釉
86	〃	鉢	30.2	(4.5)	－		浅黄 2.5Y 7/3 浅黄 2.5Y 7/4		〃	R-2トレンチ	Ⅴ	〃
87	備前焼	壺	12.4	(5.6)	－		黄灰 2.5Y 5/1 〃		〃	〃	Ⅳ	
88	〃	小壺	－	(4.3)	4.7		灰褐色 5YR 4/2 灰白　7.5Y		〃	〃	Ⅲ	
89	〃	甕	－	(7.1)	－		灰赤　10R 4/2 赤黒 2.5YR 2/1		〃	R-3トレンチ	Ⅱ	
90	〃	〃	－	(9.8)	33.6		にぶい褐色 7.5YR 5/3 灰褐色　5YR 4/2		〃	〃	Ⅲ	
91	〃	擂鉢	28.8	11.2	15.6		褐色 7.5Y 4/4 赤褐　10R 4/4		〃	Rトレンチ	Ⅲ	
92	〃	〃	25.2	10.6	12.0		灰褐色 7.5YR 5/2 赤褐色　10R 4/4		〃	R-2トレンチ	Ⅴ	
93	〃	〃	34.4	(9.5)	－		にぶい黄橙 10YR 5/4 暗赤褐　10R 4/1		〃	〃	Ⅲ	
94	青磁	碗	16.0	(4.1)	－		灰オリーブ 10Y 6/2 灰白　5Y 8/2		〃	Rトレンチ	Ⅳ	
95	〃	〃	14.6	(5.3)	－		オリーブ灰 10Y 5/2 灰　5Y 4/1		〃	R-2トレンチ	Ⅵ	
96	〃	〃 D(D-Ⅱ)	15.4	(3.8)	－	－	オリーブ灰 10Y 6/2 灰白　10Y 8/1		〃	Rトレンチ	Ⅳ	
97	〃	〃 (D)	15.8	(3.7)	－	－	オリーブ灰 10Y 6/2 灰白　10Y 8/1		〃	〃	Ⅳ	
98	〃	〃 (C)	13.8	(2.7)	－	－	オリーブ灰 5GY 6/1 灰白　5Y 8/2		〃	R-3トレンチ	〃	
99	〃	〃	14.4	(3.2)	－	－	オリーブ灰 5GY 6/1 灰白　10Y 8/1		〃	〃	〃	
100	〃	〃	－	(3.6)	5.6	2.0	オリーブ灰 10Y 5/2 灰白　5Y 8/1		〃	〃	Ⅱ	
101	〃	〃	－	(3.9)	6.0	1.2	オリーブ灰 2.5GY 5/1 灰オリーブ　5Y 5/3		〃	〃	Ⅳ	

Tab. 5　出土土器法量表 5

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外	内(断)	郭	出土TR	層位	備考
102	青磁	碗	—	(3.6)	6.0	1.5	明オリーブ灰 5GY 7/1 灰白 5Y 8/1		二ノ北	R-3トレンチ Vトレンチ	Ⅳ	R・Vトレ接合
103	〃	(B-Ⅳ)	12.4	(3.6)	—	—	灰オリーブ 7.5GY 5/2 灰 N 6/1		〃	Rトレンチ	Ⅱ	
104	〃	(Ⅳ)	13.8	(3.5)	—	—	オリーブ灰 10Y 5/2 灰白 N 8/1		〃	R-2トレンチ	Ⅲ	
105	〃	(B-Ⅳ)	13.4	(4.5)	—	—	オリーブ灰 10Y 6/2 灰白 7.5Y 8/2		〃	〃	Ⅱ	
107	〃	稜花Ⅲ	14.2	(2.1)	—		オリーブ灰 5GY 6/1 灰白 5Y 7/2		〃	R-2トレンチ	〃	
108	〃		23.0	(3.3)	—		オリーブ灰 5GY 6/1 灰白 7.5Y 8/1		〃	〃	Ⅲ	
111	〃	香炉	—		—		オリーブ灰 5GY 6/1 灰白 7.5Y 7/1		〃	R-2トレンチ	〃	
112	〃	〃	—	(5.3)	—		灰オリーブ 5Y 5/2 灰白 N 8/1		〃	R-3トレンチ	〃	
113	〃	〃	—		—		灰オリーブ 5Y 5/2 灰白 N 8/1		〃	〃	〃	
114	白磁	Ⅲ	—	(1.8)	4.0	0.6	灰白 7.5Y 8/1 灰白 2.5Y 8/2		〃	R-2トレンチ	Ⅴ	
115	〃	碗	—	(2.8)	5.7	1.0	明オリーブ 5GY 7/1 灰白 2.5Y 7/1		〃	Rトレンチ	Ⅵ	
116	〃	Ⅲ (E-2)	—	(2.7)	5.2	0.8	灰白 7.5Y 8/1 淡黄 2.5Y 8/3		〃	R-3トレンチ	Ⅴ	
117	青白磁	梅瓶	—	(5.3)	(11.0)		明緑灰 7.5GY 7/1 灰白 2.5GY 8/1		〃	〃	〃	
118	〃	〃	—	(6.2)	(11.0)		明緑灰 10G 7/1 灰白 7.5Y 8/1		〃	Rトレンチ	〃	
119		天目茶碗	12.1	(4.1)	—	—	黒褐色 2.5Y 3/2 暗灰色 N 3/1		〃	R-3トレンチ	〃	
120	青花(染付)	碗	14.0	(3.0)	—		灰白 2.5GY 8/1 〃 N 8		〃	Rトレンチ	Ⅰ	
121	〃	〃	—	(2.1)	6.2	1.0	明青灰 10BG 7/1 灰白 5Y 8/1		〃	R-2トレンチ	Ⅱ	
122	〃	〃	—	(2.2)	8.1	0.8	灰白 10Y 8/1 淡黄 2.5Y 8/3		〃	R-3トレンチ	〃	
123	〃	Ⅲ (B2-Ⅷ)	13.7	(2.5)	—		灰白 1/8 〃 2/8		〃	R-2トレンチ	Ⅲ	
124	〃	Ⅲ (C)	—	3.0	6.0		灰白 5GY 1/8 〃 7.5Y 2/8		〃	Rトレンチ	Ⅰ	
125	〃	Ⅲ (B2-Ⅶ)	14.4	(2.4)	—		灰白 5GY 8/1 〃 10Y 8/1		〃	R-3トレンチ	Ⅲ	
126	〃	〃 (B2-Ⅶ)	12.0	2.8	6.1	0.4	灰白 5GY 8/1 〃 10Y 8/1		〃	R-2トレンチ	Ⅰ	
127	〃	〃 (B2-Ⅶ)	—	(1.7)	7.6	0.7	灰白5GY 8/1 〃 10Y 8/1		〃	R-3トレンチ	〃	
128	〃	〃 (B2)	—	(1.0)	7.6		明緑灰 7.5GY 8/1 灰白 10Y 8/1		〃	R-2トレンチ	Ⅲ	
129	〃	Ⅲ	—	(1.3)	8.0	0.6	明緑灰 10G 7/1 灰白 N 8/1		〃	R-3トレンチ	Ⅰ	

Tab. 6　出土土器法量表6

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外	内(断)	郭	出土TR	層位	備考
130	青花(染付)	大皿(F)	—	(1.5)	11.4		灰白 7.5Y 8/1 〃　〃		二ノ北	R-2 R-3トレンチ	Ⅲ	
131	〃	皿	18.3	2.8	8.9		灰白　N 8/1 〃　2.5Y 8/1		〃	R-3トレンチ	Ⅱ	
132	〃	大皿(F)	—	(2.0)	16.7		明緑灰 10GY 8/1 灰白　7.5Y 8/1		〃	〃	〃	
146	土師質土器	小杯(A-1)	7.0	2.0	5.2		橙 5YR 6/8 〃　〃		二南	Fトレンチ	Ⅳ	
147	〃	小皿(A-2)	6.0	1.9	5.4		橙 5YR 7/8		〃	〃	Ⅲ	
148	〃	〃(A-2)	5.8	1.5	5.1		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	〃	
149	〃	杯(A-1)	11.2	2.9	6.4		黄橙 7.5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	Ⅳ	
150	〃	〃(A-1)	11.8	3.0	6.5		橙 5YR 6/8 〃 5YR 7/8 〃 5YR 7/8		〃	〃	Ⅲ	
151	〃	〃(A-1)	11.6	3.1	6.4		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	〃	
152	〃	杯(A-2)	12.3	3.4	6.0		橙 5YR 7/8 〃　〃		〃	〃	〃	
153	〃	〃(A-2)	12.2	3.7	6.2		橙 7.5YR 7/6 〃　5YR 7/6		〃	〃	〃	
154	〃	〃(A-3)	11.0	4.0	5.4		橙 7.5YR 7/6 〃　〃		〃	〃	〃	
155	〃	〃(A-3)	10.6	4.1	6.0		橙 5YR 7/6 〃 5YR 7/8		〃	〃	〃	
156	〃	〃(B)	11.2	2.8	6.2		明赤褐 2.5YR 5/8 橙　2.5YR 7/8		〃	〃	〃	
157	備前焼	擂鉢(Ⅳ期)	23.4	(5.3)	—		灰褐色　7.5YR 4/2 にぶい赤褐 2.5YR 5/3		〃	〃	〃	
158	青磁	碗	14.8	(4.5)	—		灰　10Y 6/1 灰黄 2.5Y 7/2		〃	〃	〃	
159	〃	大皿(盤)	27.8	(2.5)	—		オリーブ灰 10Y 6/2 灰色　7.5Y 8/1		〃	〃	Ⅱ	
160	〃	〃(〃)	—	(1.8)	10.7		オリーブ灰 10Y 6/2 灰白　7.5Y 8/1		〃	〃	Ⅲ	
161	青白磁	梅瓶	—	(3.5)	—		明緑灰 10GY 7/1 灰白　5Y 8/2		〃	〃	Ⅱ	
162	青花(染付)	皿	—	(2.7)	6.4		明青灰 10BG 7/1 灰白　5Y 8/2		〃	〃	Ⅰ	
165	土師質土器	小杯	6.2	1.7	3.9		橙 5YR 7/8 〃　〃		B区(丘陵南尾根)	Vトレンチ	Ⅱ	
166	〃	小皿	5.4	1.4	5.6		橙 5YR 7/6 〃　〃		B区(丘陵南尾根)	〃	〃	
167	〃	杯	12.0	2.9	6.7		黄橙 7.5YR 7/8 〃　〃			〃	〃	
168	〃	〃	12.1	3.2	7.0		橙 5YR 7/8 〃　〃			〃	〃	
169	〃	〃	12.5	3.6	7.7		黄橙　7.5YR 7/8 浅黄橙 7.5YR 8/6			〃	〃	

Tab. 7　出土土器法量表７

挿図番号	種　別	器種	法量（cm）				色調	外	郭	出土ＴＲ	層位	備　考
			口径	器高	底径	高台高		内(断)				
170	土師質土器	Ⅲ (B-Ⅰ)	12.4	1.7	－		灰白 10YR 8/2 〃　〃			Ｖトレンチ	Ⅱ	手づくね
171	〃	〃 (B-1)	15.2	1.3	11.8		灰白 10YR 8/2 〃　〃			〃	〃	〃
172	備前焼	擂鉢 (Ⅳ)	－	－	－		暗灰黄 2.5Y 5/2 灰黄　2.5Y 6/2			〃	〃	
173	土師質土器	小杯	6.7	1.7	5.0		橙 5YR 7/8 〃 5YR 7/6		Ｂ区(平場２南西斜面)	Ｘトレンチ	Ⅲ	
174	〃	小皿	5.0	1.3	5.0		橙 7.5YR 7/6 〃 7.5YR 8/6		〃	〃	〃	
175	〃	杯	11.3	3.8	6.5		橙 5YR 6/6 〃 5YR 7/8		〃	〃	〃	
176	〃	〃	－	3.6	6.5		橙 2.5YR 6/6 〃　〃		〃	〃	〃	

第Ⅲ章　ま　と　め

今次調査は，平成６年度第一次調査で確認されている遺構の規模・性格を把握するための調査を行った。主に主郭部分についての調査[(1)]であったが，今回，新たに調査を行った二ノ段北のＲトレンチを含め，城郭の機能時期，及び主郭部分での各曲輪の機能分化を知る上で貴重な遺構・遺物の発見があった。また，Ｂ区（丘陵南尾根部）についても，平場２の南西斜面に設定したＸトレンチより通路状の遺構を検出し，旧城道との関連性が浮上した。

ここでは，今回，新たに検出された遺構と出土した遺物について，一次調査の結果をふまえ検討を加えてゆきたい。

Ａ区（主郭部分）で検出された遺構について

一次調査及び今次調査によって検出された遺構は詰ノ段では柵列及び掘立柱建物跡，二ノ段西では礎石建物跡，二ノ段北では掘立柱建物跡及び石組み土坑，二ノ段北では堀状遺構，二ノ段南では集石遺構及び石積み遺構である。

(1)　詰ノ段

今次調査の詰ノ段Ａ－１トレンチで検出された掘立柱建物跡は，詰ノ段の北東部寄りで検出されており，一次調査Ａトレンチで検出しているPitと梁間が並び，１間以上×２間の東西棟建物跡になると思われる。詰ノ段の北東部及び北斜面では，染付・青磁など15Ｃ後半～16Ｃ前半段階の輸入陶磁器類が集中して表採されており，また，建物のピット（Ｐ－12）から小野編年によるB_1Ⅶ群の染付皿（No.５）が出土していることから15Ｃ後半～16Ｃ前半段階の遺構であると考えられる[(2)]。

詰ノ段の西側は，一次調査でも確認されている整地層が認められ曲輪を西方に拡張している。今回，詰ノ段西南隅部に設定したＡ－３トレンチでは，この整地層が確認され詰ノ段西端部は，ほぼ全域にわたり拡張されていることが判明した。また，整地層上面においてピットを検出したが，一次調査で確認されているピットと並び，詰ノ段西南の縁辺部を囲む柵列になるものと考えられる。

詰ノ段は，東西に長い楕円形を呈した曲輪であり，西側拡張部の５ｍ下には西方に大きく張り出す二ノ段西の曲輪が存在する。南下には南方に張り出しを持つ二ノ段南の曲輪があり，二ノ段南と西の間には下方から主郭に通じる現在の城道がある。この部分は比高差２ｍの段差を持ち，段差が生じている部分の上方が詰ノ段西拡張部分にあたること，及び検出された柵列の性格を考えると詰ノ段西は横矢的な性格の空間ではないかと思われる。

(2)　二ノ段西

一次調査Ｅトレンチを中心に北側及び南側を拡張し二ノ段西の曲輪の約半分を拡げたが，礎石の並び方から見れば東西に棟方向を持つ細長い建物であると考えられる。二ノ段西の南端部墨線上に位置しており，防御的施設の可能性が考えられる。中井　均氏のⅡ－ｂ類に該当し，櫓という防御施設となる礎石建物であり，近世城郭でいう隅櫓，多聞櫓的な施設であったと考えられる[(3)]。Ⅱ－ｂ

類の礎石建物は，県内では中土佐町に所在する久礼城跡にも見られる。久礼城跡では，詰とされる主曲輪の東西両端部で礎石建物を検出しており，明らかに防御施設であることが看取できる。[(4)]姫野々城跡の二ノ段西下方の縄張りを見れば，西に延びる尾根には４本の連続堀切があり，南西斜面側には３本の畝状竪堀がある。検出された礎石建物の位置は曲輪の南寄りであることから，西，南方向からの侵入に対しての防御施設ではなかろうか。また，二ノ段西からは西方，及び南方への眺望が素晴しく，特に南西下方の城下町を見下ろす立地をしている。下からの視覚に対してのいわば威嚇をする存在ではなかったのだろうか。また，１間（2.2m）の南向きの庇構造を持ち，中央部に階段状の石積みが認められるが，現在の城道から西に一折れし，二ノ段西に入る門的な構造を呈していたものと思われ，二ノ段北側への侵入を遮断する施設であったと考えられる。礎石を検出した面は，整地層上面と地山岩盤面直上であり，それぞれに標高が違う。整地層上面には部分的に焼土，炭化物層（黒褐色土）があり，土師質土器がまとまって出土しており，「ハレの場」に使われた空間であったことも想定できる。

(3) 二ノ段北

主郭部分の調査で，今回新たに調査トレンチを設け発掘を実施した部分である。帯曲輪北側は，整地層により造成されており，二ノ段西から東に向けて標高が高くなる。帯曲輪の幅は2.5～５ｍ前後であり，調査トレンチは帯曲輪の中でも拡がりを持つ平坦面に設定した。帯曲輪北側での整地層はⅡ～Ⅲ層までであり，多量の遺物を包含している。出土した遺物をみると，14～16世紀代と時代幅が長く，特に16世紀代の染付は表土層及びⅡ層から出土している。掘立柱建物跡は，整地層下，地山直上でプランを検出した。Ⅳ層黒色土はＲトレンチ全面にわたり認められるが，Ⅳ層上面において土師質土器の杯・皿の完形が一括集中出土していることから，Ⅳ層上面が生活面として看取できる。また，Ｒトレンチ北寄りで検出した石積み土坑（ＳＸ１）であるが，前述したⅡ～Ⅲ層の整地層をを掘込んで構築されており，建物跡との時期差が考えられる。遺構埋土からは遺物の出土がなかったため時期等の詳細は不明であるが，プラン東側は溝状を呈しており，Ｒトレンチ東側及び詰ノ段北東部斜面との関係が考えられる。詰ノ段側の斜面は急斜面で崩落が著しく，部分的にしか調査を行えなかったが，輸入陶磁器を中心とする遺物が集中的に出土した。今回，調査した各トレンチで出土した遺物量を比較して見るとＲトレンチが他のトレンチを圧倒的に凌駕している。また，出土した遺物の内容をみると，土師質土器・青磁・白磁・染付等の供膳具以外にも，国産陶器では瀬戸・美濃産の天目茶椀，卸し皿，鉢，備前焼の甕，摺鉢など，貯蔵・調理具も出土しており，14～15世紀を中心とし，16世紀代に至るまで恒常的な生活空間であったと思われる。

(4) 二ノ段南

二ノ段南は，丘陵南尾根部の方向に大きく張り出す地形をしており，一次調査で曲輪の長軸方向に対してＴ字型に設定したＦトレンチで地山直上の一部から礎石を確認している。今次調査で確認されたことは，一次調査Ｆトレンチを境に南側は，地山岩盤をＬ字状にカットし，一段低い面の存在が認められたことである。サブトレンチで確認された地山面とその上に存在する礎石を見れば集

石の下に一面存在することが認められた。礎石は曲輪の中央から南寄りで検出されており，二ノ段西で検出されているⅡ－b類的な建物の存在が想定できる。また，整地層中より丸瓦片が出土しているが，二ノ段北Rトレンチ整地層出土の瓦片と接合したことから，二ノ段の帯曲輪改修以前に主郭部分に瓦葺き建物の存在が明らかとなった。瓦片の出土は一片だけであり，主郭部において検出された建物跡との関連は断定できないが，城八幡，寺院等の既存施設の存在も考えられる。岩盤面の直上は直径20㎝前後の河原石の集石が認められ，トレンチ中央部から，二ノ段南西端にかけて石積みが確認できた。この石積みは前述した二ノ段西と現在の城道との接点で終結しており，詰ノ段裾部，L字型に地山岩盤を成形した面に貼合わす様に積まれている。この石積みについては現段階では性格は不明であるが，位置的にみれば，詰ノ段の西端張り出し部直下を，虎口構造に改変しようとした表われではなかろうか。いずれにしても，一次調査の二ノ段東の堀状遺構（Cトレンチ）側面にも石積みがみられ，二ノ段の東から南にかけて，石造りの城に改変しようとした意識がみられる。

以上，主郭部分において検出された遺構を概観してみたが，姫野々城跡の縄張りからみると，この主郭部が全尾根筋を確保する構造であり，南北朝期の主尾根線上に点々と繋げられた[(5)]一次元的なものの様相とは異なる。このことは，室町期以降の段階で改修が進められ，防御が平面的なものに変化していく過程を示唆している。南北町期段階では，現在の主郭部を含め東尾根上に存在する「東本城」と呼ばれる単郭があり，城跡南東斜面を囲むような形で，曲輪と堀切が単純な構造で配置されていたものと考えられる。そして，室町期以降，現在の主郭部を中心に改修が進められ，主郭部下に存在する畝状竪堀群や，南尾根部にみられる大規模な二重の連続堀切（堀切１～４）などが配置され，二次元的な性格の城に変化したものと考えられる。

出土遺物について

今次調査の主郭部分においては総点数4,070点の遺物が出土したが全体の94.7％を土師質土器が占めている。今回，出土した土師質土器は全て供膳具であり，小杯・小皿・杯・皿の４種類が認め

Tab. 8　トレンチ別出土遺物集計表

種別／出土トレンチ	土師質土器	瓦質土器	備前焼	瀬戸美濃産	青磁	白磁	青白磁	染付	金属製品	石製品	その他(不明)	トレンチ別合計
詰ノ段 A－1トレンチ	91	0	2	0	5	0	3	10	1	0	2	114
A－2トレンチ	4	0	2	0	1	0	0	3	0	0		10
A－3トレンチ	70	0	0	0	1	2	1	2	0	0	近世陶磁器片2	78
二ノ段西 Eトレンチ	1,166	0	4	0	8	1	2	4	7	1	12	1,205
二ノ段北 Rトレンチ	2,294	2	108	6	89	31	13	112	4	5	瓦1 銅銭2	2,677
二ノ段南 Fトレンチ	101	0	23	0	17	3	1	13	1	1	瓦1 銅銭2	163
組成別合計	3,726	2	139	6	121	37	20	144	13	7	22	4,247

※数量は全て破片数である。

Tab. 9　土器組成と機能分担

	生産地別	組成比(%)	性　質	主要器種	飯食器	調理具	煮沸具	貯蔵具	暖房具	灯明具	化粧具	茶花香
地元産	土師質土器	94.7	土　　器	小杯・小皿・杯・皿	○					○		
国内産	備前焼	1.6	焼締陶	擂鉢・甕・壷		○		○				
	瓦質土器	0.2	土　　器	火鉢・風炉・羽釜			○		○			○
	瀬戸美濃産 鉄釉 灰釉	0.2	 施釉陶 施釉陶	 天目茶碗 折縁鉢・卸皿		 ○						 ○
外国産	中国陶磁 青磁 白磁 染付 黒褐釉	3.2	 磁　　器 磁　　器 磁　　器 施釉陶器	 碗・皿・鉢・盤 皿 碗・皿・杯 天目茶碗・壷	 ○ ○ ○							 ○ ○
	その他（不明）	0.1			○							

られ，その成形技法も全てロクロ成形で，底部切り離しは回転糸切り（右回転）によるものである。この中で，杯と皿については，明瞭に区別できないタイプのものが存在し，今回は杯として分類した。杯の分類の中では，胎土に大きな違いが見られ，軟質で橙色を呈するＡ類と，精選された胎土で硬質，色調は浅橙色を呈するＢ類とに分けれる。また，皿の中には，灰白色～浅橙色を呈した手づくねの製品も見られるがその出土量も昨年度と同様，土師質土器の出土量の１％にも満たない。また，小杯については，前年度報告書の小皿の分類で，器高が1.6㎝以上を測り，斜上外方に直線的に立ち上がる小皿Ａ－２タイプのものを今回は小杯とした。

今回，調査を行った各トレンチから出土した杯を見ると法量に違いが見られる。Ｅトレンチ出土の杯とＲトレンチ出土の杯の底径を比べると，Ｅトレンチ出土の杯の底径は4.5㎝～6.4㎝であるのに対してＲトレンチ出土の杯の底径は6.2㎝～7.8㎝と若干大きくなる。また，口径も底径に比例してＲトレンチ出土のものがやや大きい。そして，Ｆトレンチについては杯と呼べる器形の存在しか認められない。また，土師質土器の出土地点をみれば，二ノ段西から二ノ段北に連綿と続く黒褐色土（Ｒトレンチでは第Ⅲ～Ⅳ層）で集中して出土している。このことは，二ノ段西から北にかけての範囲が恒常的な生活空間であることを示唆している。

二ノ段西のＥトレンチでは，礎石検出面上においては土師質土器の出土しか認められず「ハレの場」として使われた空間ではないかと思われる。また，焼土，炭化物層及び，鉄犀及び鉄製品（釘）等の出土をみれば一定の生産活動が行われていたものと考えられる。

輸入陶磁器は青磁，白磁，青白磁，染付の出土が見られ，青磁が39.6％，染付が47％を示し，昨年度と同様，青磁，染付が圧倒的多数を占めている。青磁は椀・皿が中心であり，碗では細連弁文を中心とする（上田秀夫氏分類）ＢⅣ類が44.7％，無文のＤ類が39.5％を示し，14世紀後半から15世紀前半代と15世紀後半から16世紀代[(6)]が中心である。また，青磁では，盤や青白磁の梅瓶のように

13世紀後半から14世紀前半代にかけての遺物もみられる。染付は，ほとんどが皿であり，（小野正敏氏分類）B_1Ⅶ群が43.6％，C群が47.5％を占めている。これらは，青磁碗BⅣ類とのセット関係が考えられる。[7] また，一次調査では確認されなかったE・F群の皿が若干出土しており，16世紀後半段階まで帰属時期が拡がりそうである。[8] 白磁は，皿が中心に出土しており，D群が77.8％と多く，アーチ状の高台を呈するタイプの皿や，八角皿などが出土している。15世紀後半代のものである。[9]

国産陶器では備前焼が多く出土しており，甕・摺鉢が出土しており，これらの貯蔵具・調理具はⅣ期の所産のものである。他に瀬戸・美濃産の天目茶椀・卸し皿・鉢が出土しているが，概ね古瀬戸後期の第Ⅲ期～第Ⅳ期に相当し，15世紀後半代のものである。[10]

以上，出土遺物について概観してみたが，[11] これらの土器の帰属時期を整理すると，昨年度，実施した一次調査と同様で，14～15世紀前半代にあたる一群と，15世紀後半～16世紀代におさまる一群に分けられよう。出土地点を見れば，主郭部分では二ノ段，特に，二ノ段西から北にかけての出土が多く，遺物の大半を占める15世紀から16世紀にかけてこれら主郭部分の改修が進んだものと考えられる。

おわりに

今回の発掘調査により，確認された遺構・遺物について一次調査の結果を踏まえながら検討してみたが，十分な管見資料との検討もないまま荒削りな論に終わってしまった。姫野々城跡は，来年度も丘陵南尾根部についての調査が引き続き行われる予定である。今後の調査結果を待ち，歴史地理，文献等も含めた総合的な視野で，姫野々城跡全体を把握し，小地域における特殊性の追求を今後の課題としたい。

《参考文献》

(1) 吉成承三　『姫野々城跡　Ⅰ』　葉山村教育委員会　1995年

※平成６年度に国庫補助事業により，葉山村が調査主体で発掘調査を実施している。主郭部分を中心に試掘調査を実施した結果，二ノ段西で礎石建物の一部，二ノ段北で側面に石積みを伴う堀状遺構などを検出し，土師質土器，輸入陶磁器類を中心とする遺物の出土がみられた。

(2) 小野正敏　「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.２』　日本貿易陶磁研究会　1982

(3) 中井　均　「織豊系城郭の画期―礎石建物・瓦・石垣の出現」『中世城郭研究論集』　新人物往来社　1990

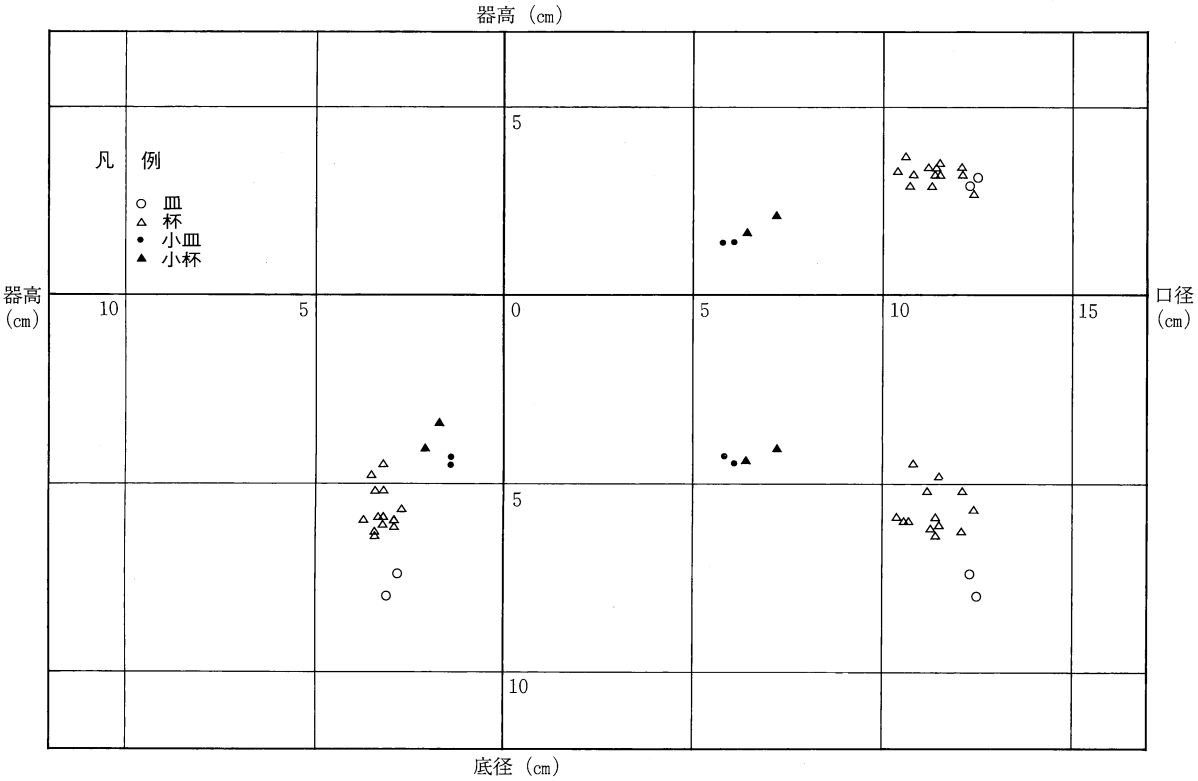
(4) 宅間一之・前田和男他　『久礼城跡』　中土佐町教育委員会　1984

(5) 平成６年度に縄張り調査を実施している。縄張り図作成については池田　誠氏に現地で作図していただいた。

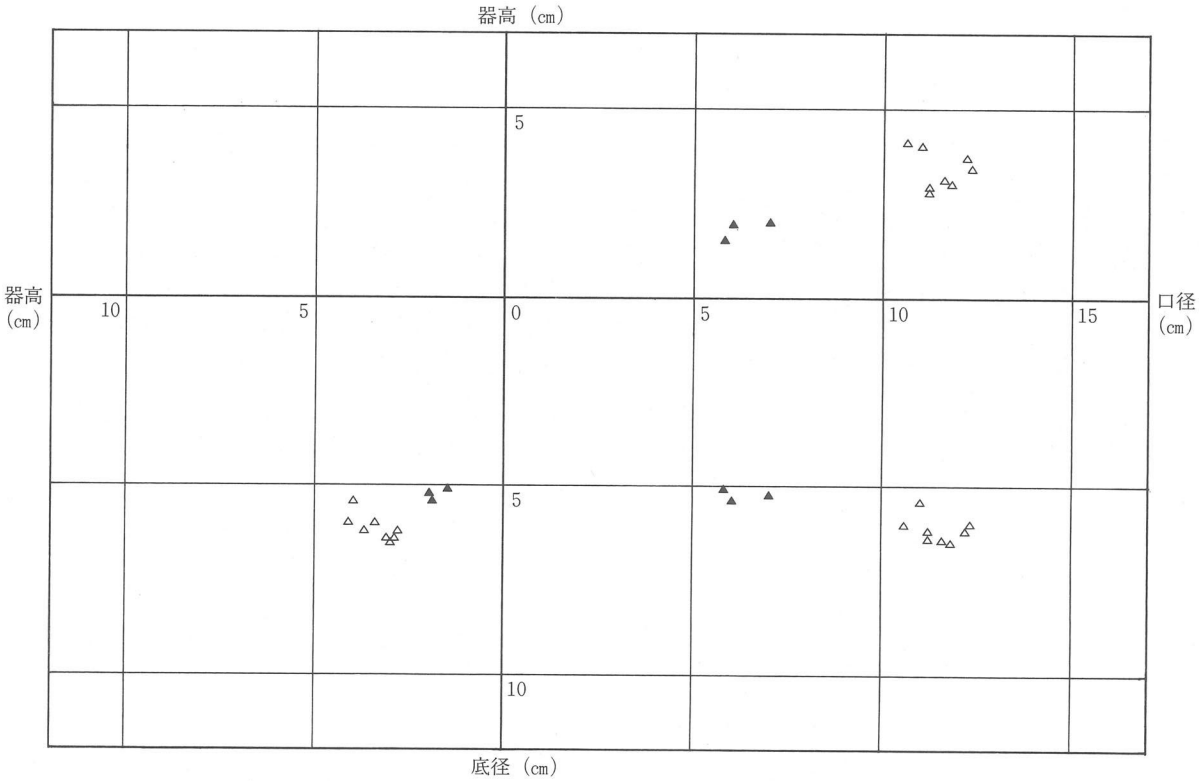
(6) 上田秀夫　「14～16世紀の青磁碗の分類について」　上記(2)と同じ

(7) 上記(2)と同じ

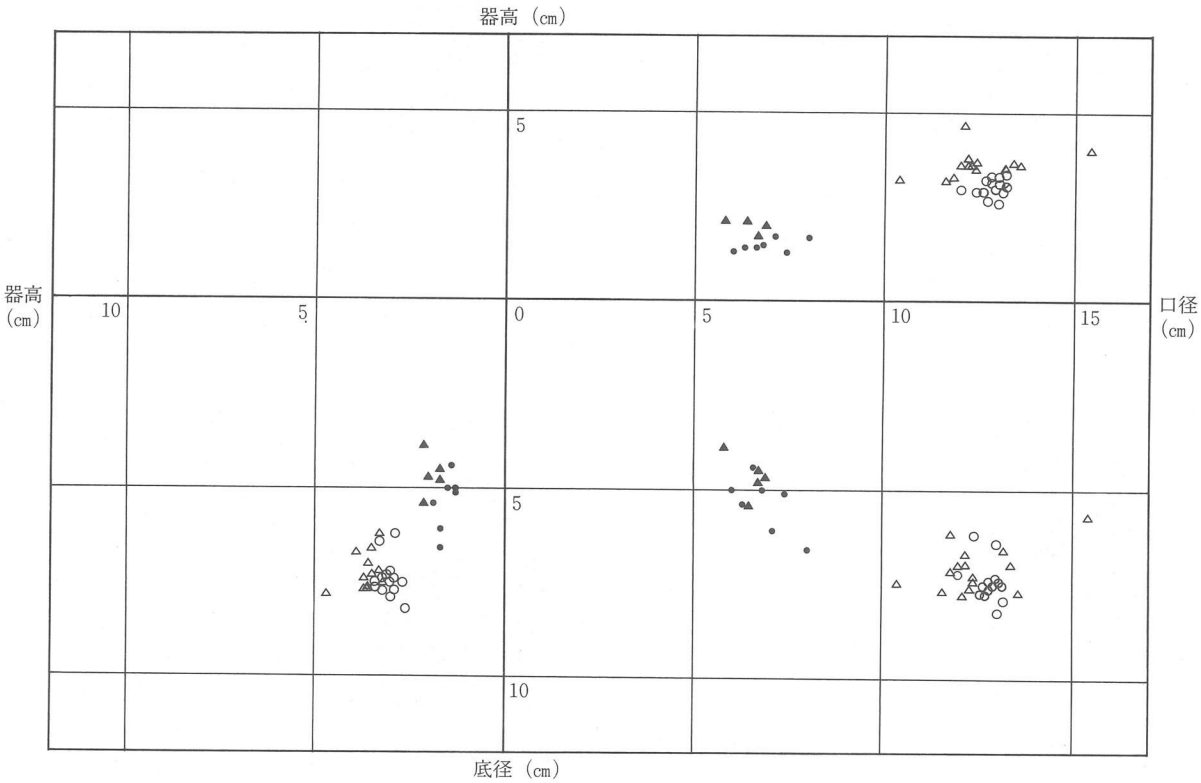
(8) 小野正敏 「出土陶磁よりみた一五，一六世紀における画期の素描」『15・16世紀の土器様相』第6回 四国中世土器研究会資料 1994
(9) 森田 勉 「14～16世紀の白磁の分類と編年」上記(2)と同じ
(10) 真壁忠彦・藍子 「備前焼研究ノート1～3」『倉敷考古館研究集報』 1966・1967
(11) 藤澤良祐 「中世陶器 古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 1995



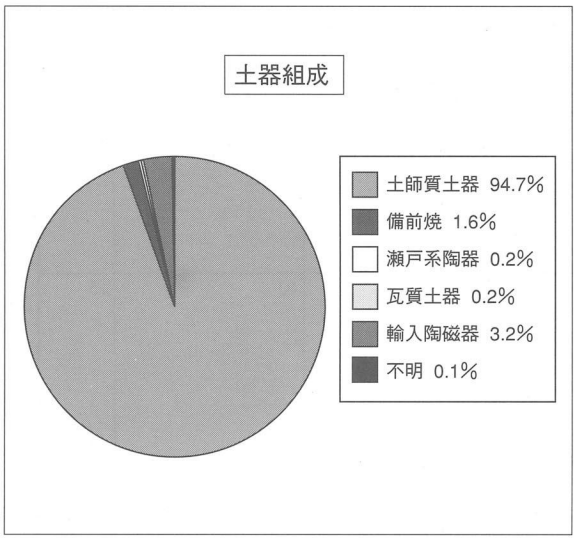
Tab. 10 Eトレンチ土師質土器法量表

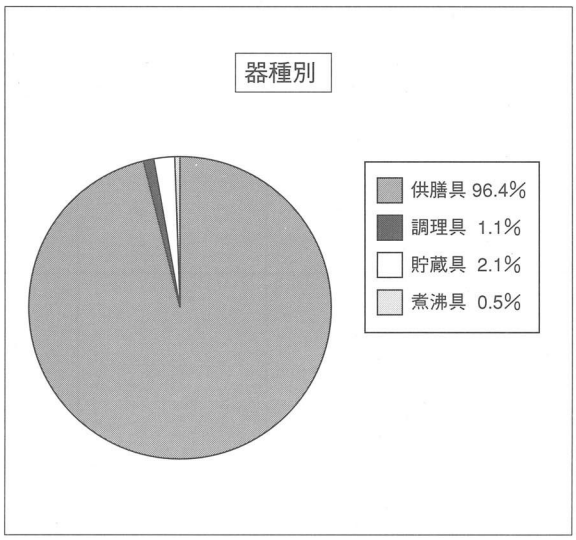


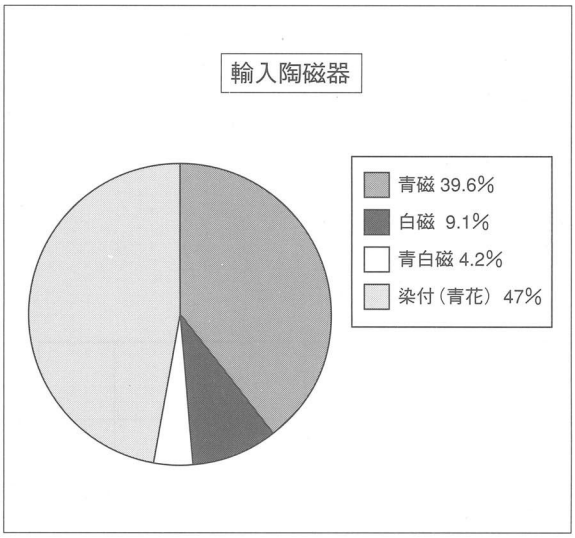
Tab. 11　Ｆトレンチ土師質土器法量表

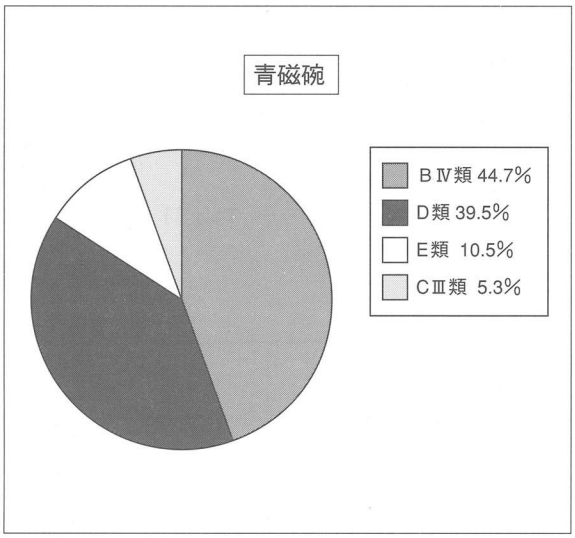


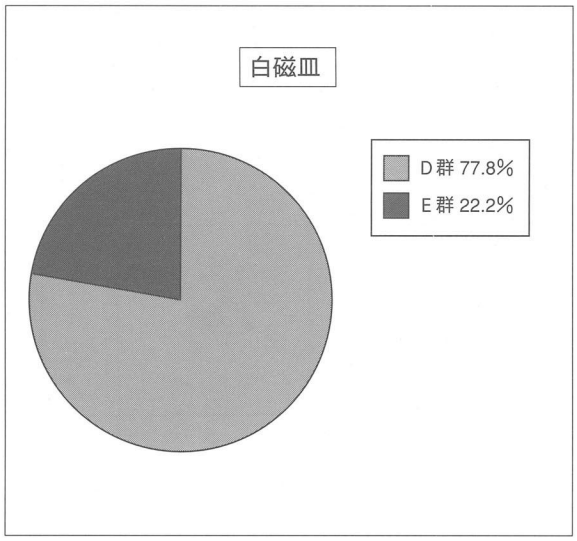
Tab. 12　Ｒトレンチ土師質土器法量表

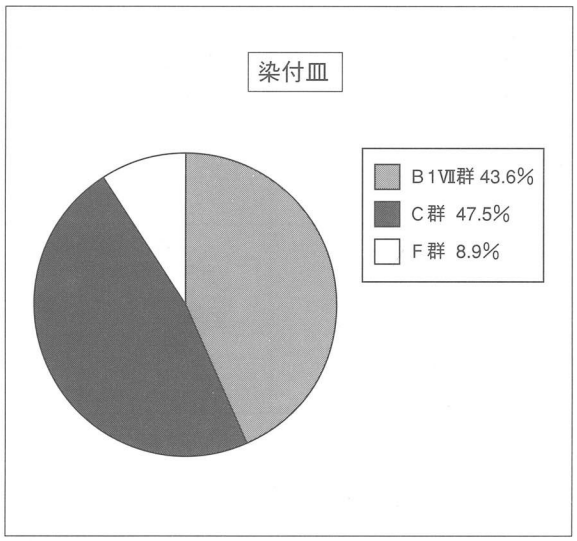

土器組成
土師質土器 94.7%
備前焼 1.6%
瀬戸系陶器 0.2%
瓦質土器 0.2%
輸入陶磁器 3.2%
不明 0.1%


器種別
供膳具 96.4%
調理具 1.1%
貯蔵具 2.1%
煮沸具 0.5%

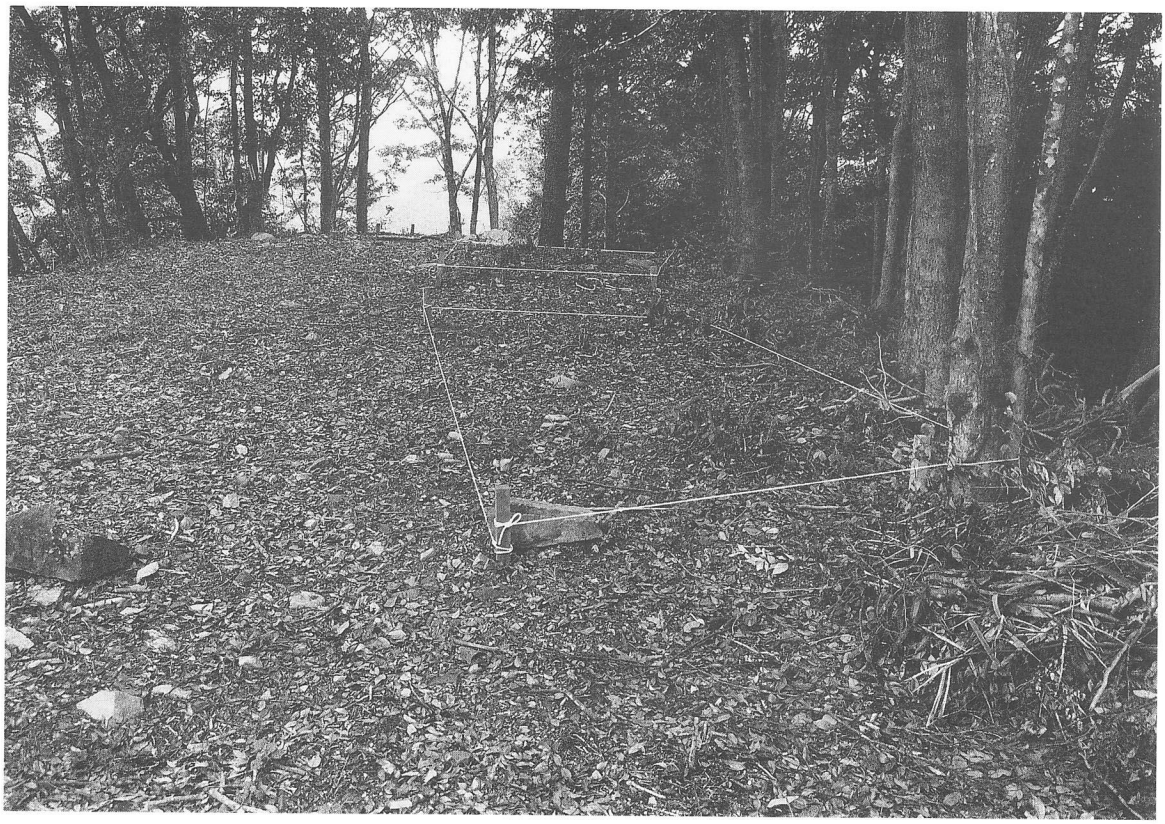

輸入陶磁器
青磁 39.6%
白磁 9.1%
青白磁 4.2%
染付（青花） 47%


青磁碗
BⅣ類 44.7%
D類 39.5%
E類 10.5%
CⅢ類 5.3%


白磁皿
D群 77.8%
E群 22.2%


染付皿
B1Ⅶ群 43.6%
C群 47.5%
F群 8.9%

写　真　図　版



詰ノ段調査前全景（東より）

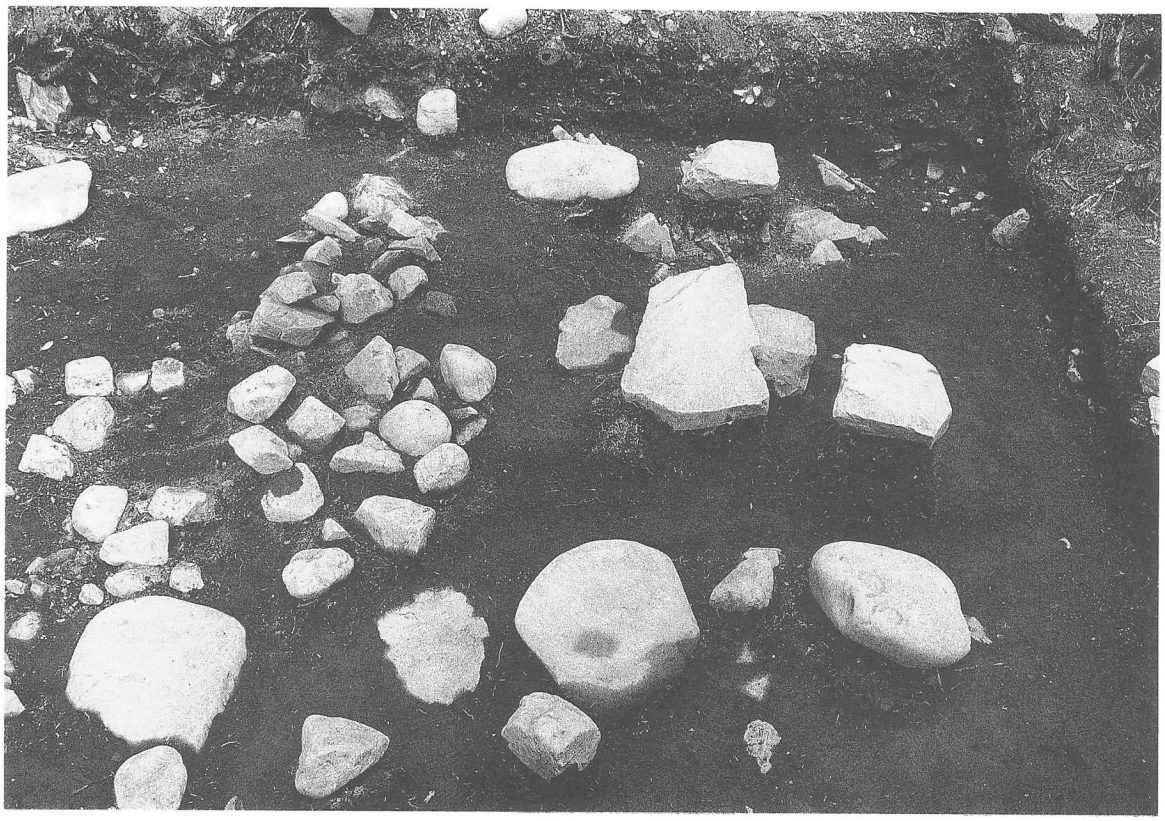
A-1 トレンチ全景（西より）

PL 2

Eトレンチ礎石検出状況

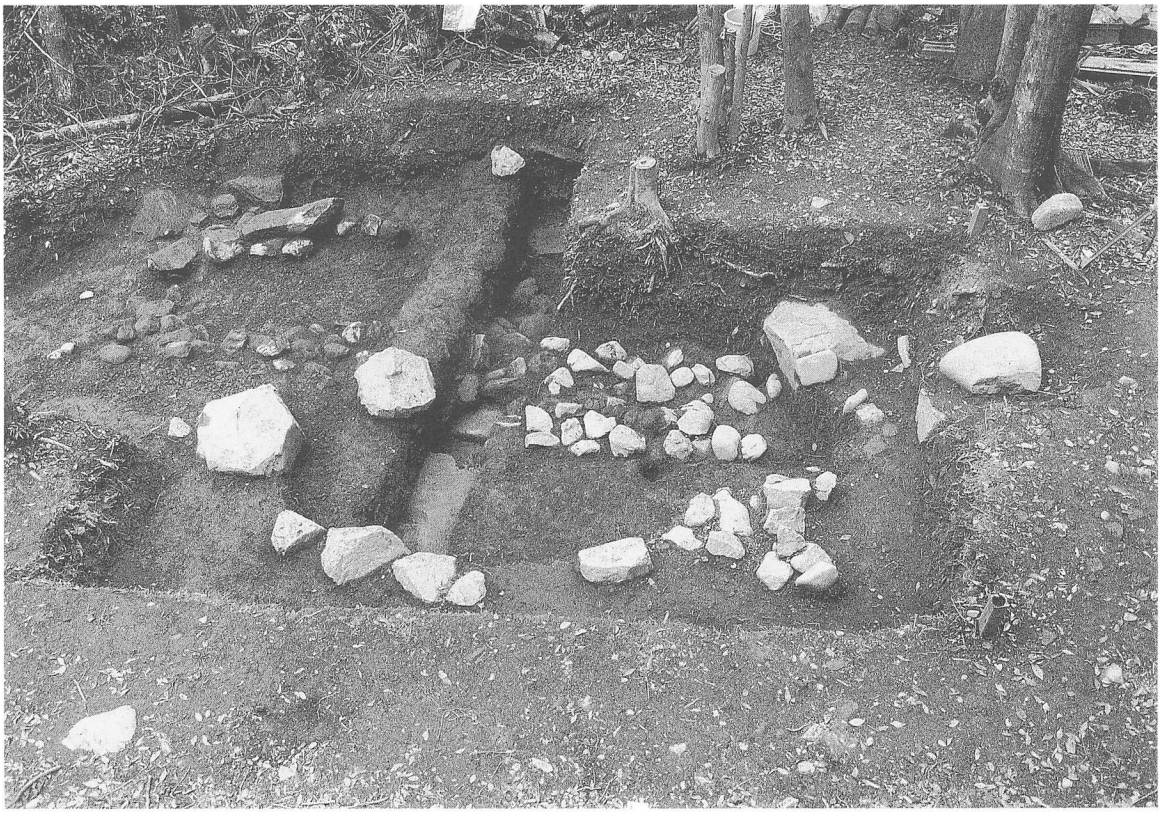
Eトレンチ完掘状況（北より）

Eトレンチ完掘状況（東より）



Eトレンチ礎石検出状況

PL 4



Ｆトレンチ第１次面検出状況（北より）

Ｆトレンチ集石検出状況（西より）

Ｆトレンチ石積み検出状況（東より）

同　上（西より）

PL 6

Ｆトレンチ石積み検出状況（西より）

Ｆトレンチ石積み西端部（南より：上方が詰ノ段）

Rトレンチ遺構検出状況（西より）

Rトレンチ遺物出土状況（東より）

PL 8

詰ノ段調査前全景

A-2トレンチ（東より）

A-3トレンチ（西より）

二ノ段南から二ノ段西を望む

二ノ段西 Eトレンチ

二ノ段南 Fトレンチ設定

Fトレンチ調査風景

二ノ段北 調査前全景